少女割礼

稗田東夷人

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
少女割礼

【Ｎコード】
Ｎ４０３７Ｋ

【作者名】
稗田東夷人

【あらすじ】
２０ＸＸ年、青少年健全育成法（通称、割礼法）が国会を通過した。もとより、躾の厳しい一部の家庭で行われてきた女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年の不純性交遊や自慰癖を予防する目的で、中学卒業後に女子は全員、健康診断を受けた上で割礼を受けることが事実上義務付けられたのだ。
どの程度の割礼を行うかは進学先の高校などの校則にもよるのだが、多くの高等学校や企業ではクリトリスの先端あるいは全部と小陰唇の切除が義務付けられるようになった。なを、この処置にかかる費

用は全額が公庫から支出されるが、麻酔に関してはこの対象とならない。費用を全額自己負担すれば麻酔した上での処置を受けられるが費用負担の公平を考え多くの高校ではこれを校則で禁止し、学校が選定した病院で集団で処置を受けることを義務づけている。

序（前書き）

お馴染の割礼ものです。日本に女子割礼の習慣が定着した世界を舞台に、ひどい通過儀礼を強いられる女の子たちを一話完結方式でいろいろと。

序

２０XX年、青少年健全育成法（通称、割礼法）が国会を通過した。もとより、躾の厳しい一部の家庭で行われてきた女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年の不純性交遊や自慰癖を予防する目的で、中学卒業後に女子は全員、健康診断を受けた上で割礼を受けることが事実上義務付けられたのだ。
どの程度の割礼を行うかは進学先の高校などの校則にもよるのだが、多くの高等学校や企業ではクリトリスの先端あるいは全部と小陰唇の切除が義務付けられるようになった。なを、この処置にかかる費用は全額が公庫から支出されるが、麻酔に関してはこの対象とならない。費用を全額自己負担すれば麻酔した上での処置を受けられるが費用負担の公平を考え多くの高校ではこれを校則で禁止し、学校が選定した病院で集団で処置を受けることを義務づけている。

日付が変わった深夜というのに開けっ放しになったトイレの扉から暗い廊下に光が漏れていた。夜中に尿意を覚えて目を覚ましてしまった士朗は姉の激しく嘔吐する苦しい声を聞いてしまった。嘔吐の原因が普通の体調不良ではないことは士朗も分かっている。便器を譲ってくれとはとても頼めず、事情が事情だけに声をかけるのもはばかられて、士朗はそっと廊下を横切って台所に向かった。特に喉が渇いていたわけではなかったが、士朗は水道の蛇口からコップに半分ばかり水を注ぎ。それを一気に飲んだ。四人がけのテーブルがあるダイニングから物干し場になっている庭に下り、踏み石の上にいつも置いてある夜露に濡れたサンダルをひっかけて、士朗は庭の隅で用を足した。

姉の淳子は二つ年上で、今年の春に高校生になった。明日は高校に入って初めての水泳の授業がある。そこに運悪く生理の周期が重なってしまった。休めば成績に響くと淳子は一大決心して生理用品をナプキンからタンポンに変えることにした。出血の多い初日を除けばそれでどうにか一時限を乗り切れるからだ。その代償がこの嘔吐だった。細いタンポンとはいえ初めての挿入には不安が伴う。慣れるまでは挿入の度に少なからぬ痛みもある。結局、一時間もトイレにこもってようやく淳子は一人で挿入に成功した。途中、見かねた母が手伝いを申し出たとき、淳子はトイレのドア越しに金切り声をあげて拒絶した。姉の心情を思えばむしろ当然で、母の無神経ぶりに嫌みでも言ってやりたくなったが、結局、士朗は黙った。中学生ともなれば家族とはいえ男が踏み込む話題ではなく、かえって姉が迷惑するくらいは士朗も弁えていた。

台所に戻るとヘアネットをかぶった母が冷蔵庫から麦茶を出して飲んでいた。母は軽いながらも糖尿病があり喉が渇くたちだった。ト

イレの真上が夫婦の寝室で淳子の絞り出すようなうめき声で眠れないのだという。姉にとっては父が仕事で不在なのがせめてもの幸いだったと士朗は思った。真っ青な顔で夕飯の席に現れた淳子はトマトを一切れと冷たい麦茶だけをどうにか飲み込むのがやっとだった。それもすぐに口元を両手で押さえてトイレに駆け込んでしまった。もう五時間も冷たいトイレの床にへたり込んだままということになり、痛ましさに士朗の胸が痛んだ。母が錠剤を二錠ばかり掌に乗せて士朗に突き出した。淳子に飲ませてやれということだ。この母にすれば気遣いなのだが、ならばせめて自分で届ければいいものを弟とはいえ男にそれをやらせようという無神経ぶりが士朗には苛立たしかった。どうやら自分の更年期障害で医師から処方された薬の中に吐き気止めが入っていたのを思い出して持ってきたらしい。母の細々した余計な説明を聞き流して士朗は廊下に出た。

　トイレのドアは開けっ放しになっていて、タイルの床の上にへたり込んだ淳子がいた。吐瀉物とびっしょりとシャツを濡らした汗の匂いがした。不潔な臭いのはずなのに淳子の体から出たと思うと、士朗にとってはどこか甘酸っぱく、胸の奥むずむずとがうずいた。トイレの床に淳子が苦しさの余り外したブラジャーが落ちていた。それをみつけてしまって士朗はあわてて目をそらす。そっぽを向いたまま士朗が錠剤を手渡すと、淳子がトイレの水を流して振り返った。士朗が横目で見ると血の気の失せた頬が涙でぬれていた。弟から見ても淳子は美人の部類に入る。顔の輪郭はきれいな卵形をしているし、高校に入ってからは校則で短く切らねばならなかったがつやのあるたっぷりとした髪だった。ただ、快濶で陽気でというよりは大人しく優しい気性もあって周囲には地味で目立たないと思われていた。士朗がそっぽを向いたまま錠剤の説明をした。

「うん、ありがとう…。」

細い声で礼を言って錠剤を受け取るとき、淳子は涙にぬれた顔で微笑んで見せた。こういう痛々しいまでの気遣いをする姉だった。小さい頃から何かあれば必ず淳子がかばってくれたし、士朗の悪さを

両親に言いつけたこともない。士朗の失敗を黙って被ってくれたことも数えきれない。そんなわけで、物心つくころには士朗は母よりも二つ違いの姉の方にべったりと懐く子供だった。その姉との距離感が最近になって変化したのは、年頃になった士朗が姉を異性として意識し始めたからだ。
「も、もうタ、タン、それは外して薬飲んだら今晩は寝ろよ。」
淳子の前でタンポンと士朗は言えなかった。
「うん、そうする。」
力なく言って淳子はまた微笑んでみせた。
扉が閉められても士朗はその場を離れられなかった。ドアの向こうからは物音一つしない。タンポンを引きぬくのが怖くて決心がつかず、淳子が息と詰めているに違いなかった。便器に片足をかけ股間から垂れた紐をつまんだまま震えている姿を想像してしまい士朗のペニスがムクリと起き上った。今まで自制してきたがこうなると男子中学生の下半身は意志の制御を受け付けない。
「う…ひぃ！」
苦しげなうめき声のあとに小さな悲鳴があった。どうやら淳子が自分でタンポンを引きぬけたようだ。カラカラとトイレットペーパーを引き出す音がした。あわてて士朗は自室に向かった。ドア越しに聞き耳立てていたなどと姉に知られたくはなかった。
自分の部屋に戻った後も士朗の心拍数は下がらない。顔に血が上って風呂でのぼせたような心地だった。そして股間ではこのところ身長の伸び以上にすくすくと成長しているペニスが痛いほど強張っていた。実の姉に、それも誰よりも細やかな気遣いをしてくれる人にこんな感情を持つことが浅ましいとは士朗も思っている。しかし、こんなときいつもひそかに思いを巡らせてしまう秘密が士朗にはあった。
地元には進学校と呼べる高校が二校ある。一校は私立で校則の緩やかなリベラルな校風だった。もう一校、公立には珍しい厳しい校則と規律と特徴とした高校で、それだけに毎年のように国立大学に

学生を送り出していた。入学試験もこの公立学校の方がはるかに難関だった。家族に気兼ねして淳子は黙って授業料の安い公立を選んだ。別の高校を選べば悠々と成績で上位を保てたはずが、難関校を選んだがために大学の推薦入試に必要な評定のために体育の出席点まで気にしなければならなくなってしまった。淳子の通う高校も校則で割礼を義務付けている。一般に公立の進学校といえば校則は緩やかで、割礼を義務付けるにしてもクリトリスの先端だけを切り取ることで済ませることが多い。ところが、淳子の受けねばならなかった割礼はクリトリスの全切除という厳しいものだった。

士朗は自分の体臭が染みたベッドから体を起こし本棚から分厚い英和辞書をとった。辞書といっても厚紙でできたカバーだけで中身は学校へ置きっぱなしになっている。そのカバーの中にディスクが隠してあった。母のお節介で不在中に部屋に入られたときのことも考えて、うっかり動かしても音がしないように隙間はちり紙を詰めて埋めて念入りに隠してある。これを手に入れたのは五月の大型連休の前のことで、たまたま入った電話ボックスにチラシが積み上げてあった。盗撮された映像を複製した地下流通もののアダルトビデオだった。女子トイレや更衣室を撮ったものなら士朗もあえて買いはしなかった。しかし、チラシの中央に襷掛けで書かれた「名門校割礼」という太字に目が吸い寄せられた。士朗と同年代の女子中高生にとって割礼は大きな試練で重要な関心ごとの一つになっている。士朗のクラスでも女子ばかり集まってどこの高校進むのが割礼で少しでも痛い思いをしないですむか情報交換している姿がある。当然そういったことは男子たちの興味を引きつけてしまうのだった。通学定期のためにと渡された金で士朗はそれを買った。言い訳は封筒ごと落としてしまったと言って済ませた。さんざん小言を言われた挙句、半年間の小遣いを減額されたが士朗はその買い物に満足だった。自宅に送りつけられては困るので、コンビニエンスストアで受け取るように手配したそれは資格試験用の参考書として送られてきて、士朗は身分証の提示も求められることなくすんなりと手に入れ

た。母をまんまと出し抜いて、秘密の買い物が思いのほか上手く行き、士朗は自分がずいぶん知恵をつけた気で愉快だった。

淳子が割礼をうけたのは入学式のその当日だった。午前中に入学式を済ませ、午後からは女子生徒だけが残って割礼をうける。クリトリスの全部を切除するという過酷な処置にも関わらず、翌日からは通常通り授業がある。ただ、保健体育だけは傷がふさがるまで座学を前倒しするようカリキュラムが組まれていた。椅子に座ったとき、傷口が圧迫されないために洋式便器の便座のような形をした綿の厚い座布団が貸し出されるので、それに被せるカバーが必要だった。各家庭でタオルなどを裂いて縫い合わせて作るように寸法と作る手順をまとめたプリントが入学説明会で配られていた。淳子はそれと首引きで何とか自分でカバーを作り上げた。母の方針でまず勉強のために時間を多くとるように、家の手伝いはさせないので淳子の裁縫は拙い。料理の方は洋食を作りたがらない母に代って士朗のためにハンバーグなどを作ることもあって、レパートリーは少ないながらも淳子は多少できる。裁縫は一朝一夕には上達せず、出来上がったカバーは実用には問題ないながらもひどく不格好だった。そのカバーを母は見つけ、こんなみっともないものは持たせられないと糸を全部抜いて縫いなおしてしまった。淳子としては家族に割礼のことを触れられたくなかったから隠れるようになれない針仕事をしたのだ。裾がほつれたズボンも自分で直すような日頃の倹約のおかげで母の裁縫は手際が良い。ミシンを使ってものの数分できれいに仕上げてしまった。母は満足そうだったが士朗は姉の悲しそうな顔を覚えている。同じ女でありながら母は淳子の心痛に何の労わりも見せなかった。母の世代ではまだ女子に割礼を施す習慣はなかった。だから母の性器にはまだちゃんとクリトリスがついているはずだった。

母の話では自分が若いころはまだ社会で女の地位は低く、家庭では父親の力が強く皆がひどく抑圧されていたという、若い世代について言えば受験は今よりはるかに過酷な競争で学校の締め付けも強

かったそうだ。だから今の若い世代、特に少女たちは甘やかされ過ぎているというのだ。今の社会で起こっている非行や少年犯罪の問題はこの甘やかしがそもそもの原因で、だから大人になる前の通過儀礼として割礼は当然のことだといつか母は真顔で言ってた。これはなにも士朗たちの母に限ったことではなく、親や教師の多数意見だ。少年少女には試練が必要で、それを与えるのが大人の責任だという。体の中でもっとも敏感で、しかも思春期の少女にとっては声に出すのもはばかられるようなその部分を麻酔もなしで切られる恐怖と苦痛に対して、彼らは何の同情も示さない。かつて自分たちを抑圧していたという前の世代と同じこと、あるいはもっと酷い迫害を当の自分たちが行っている自覚もおそらくは希薄だ。結局のところ、いつの時代も旧世代は若者に通過儀礼を課すのが好きなのだ。

　入学式のあった日の夕方、式に参列したあと割礼が終わるのを待っていた母の肩につかまって淳子は帰ってきた。歩こうにも足を動かすだけで激痛が走るらしく、ほとんど母の肩によりかかって引きずられてきたといった様子だった。高校生にもなればさすがに女の力では肩に寄りかかられれば重い。淳子を部屋に寝かせて母は居間の座椅子にどかっと腰をおろした。傍らのポットから今朝の茶葉がそのままになっている急須にお湯を入れ士朗に持ってこさせた湯のみで飲んだ。割礼を受ける新入生たちの悲鳴が父兄の待合室にまできこえてうるさくてかなわなかったと母が愚痴をこぼしはじめた。淳子の様子を見れば割礼の痛みがそれこそ死ぬ思いをするようなものと男の士朗にも分かる、あまりの思慮と思いやりのなさに士朗は嫌な顔をした。親に向かってのこういう態度は母の癇に触ること思いだしてそっぽを向いたが遅かった。母の顔に険のある表情が浮かび、長い小言が始まりそうだったので見たいテレビ番組はあったが士朗は早々に今を立ち去ろうとした。

「ちょっと、立ったついでにこれ。」

母が後ろから士朗を呼び止めた。投げてよこしたのは鎮痛剤と化膿止めの抗生物質が入った袋だった。無神経が腹立たしく、士朗はき

っと一睨みして母が何か言う前にさっさと立ち去ってしまった。
台所で薬の袋に書かれた用法用量を確認し、必要なだけ錠剤をとり出すと士朗はコップの水と一緒に盆に乗せて淳子の部屋まで持っていった。部屋の引き戸を開ける前はさすがに士朗は緊張した。元が物置部屋なので引き戸に防音材は入っていない。その引き戸に向けて士朗がそっと声をかけると、淳子の弱々しいやっと絞り出すような返事が返ってきた。許しが出たので士朗は六畳の物置を簡単な間仕切りで仕切った淳子の部屋に入った。薄い壁の向こうは士朗の部屋になっている。物が多いのに狭い淳子の部屋はきれいに片付いていた。窓はないが換気扇を回してこまめに換気するので空気が淀むことはない。それでもどこか淳子の香りがした。日ごろ使っている石鹸やシャンプーの香りに淳子の体臭が混じったものだ。冷え症の淳子は湯船で暖まった体が冷めないうちに布団にもぐりこんでしまう。士朗のように不精をしていてはたちまちベッドが臭いだすところだが、淳子はせっせとシーツを換えていた。清潔でありながらどこか胸がうずくようなこの部屋の空気が士朗は好きだった。淳子がいつも快く部屋に入れてくれるので、いつもなら士朗は理由をみつけてはここに入るのを楽しみにしていた。
　掛け布団をまくることもせず、制服のブレザーだけを脱いで淳子はベッドの上でぐったりとしていた。それでも士朗の前では気丈に振る舞ってよろよろと体を起こそうとする淳子を士朗が押しとどめた。
「姉さん、痛む？」
黙っているのがいたたまれず、つい聞いてしまって士朗は後悔した。痛むもなにも淳子の頬にはさっきまで泣いていたと分かる涙の痕があった。淳子は声を出さず小さく肯いて応えた。
「前に痛み止めを飲んだのはいつ？」
大きな声は傷に響きはしないかと士朗は耳元でささやいて聞いた。
鎮痛剤は強い薬なので四時間以上の間隔をあけて服用するようにと注意書きにあった。

「飲んでない。順番が遅かったから。」
口の中が乾いているせいで声を絞り出すように答える淳子の息が少し臭った。その口臭が全く不快ではなく、むしろズボンの下でペニスをうずかせたが、実の姉がこうも苦しんでいる前で不埒だと、それが勃起する前に士朗は淫らな感情を追い払った。士朗は姉の首の後ろに手をまわし、少し頭を持ち上げてやって薬と水を飲ませた。ぬるい水を一口だけすすって淳子はむせこんでしまった。咳をするたびに傷に響いて淳子涙を流して苦悶した。制服のワイシャツが汗を吸って、ブラジャーの形がはっきりと分かるほど透けていた。士朗には淳子をうつ伏せにさせて背中をさすってやることしかできない。

いつもなら長居をしたい淳子の部屋だがこの日ばかりは士朗も早々に立ち去ろうとした。士朗がだらしなくズボンの外に出してきているシャツの裾を淳子が後ろからつかんだ。淳子はついさっき麻酔もなしでクリトリスを切除されるという仕打ちを受けたばかりで、しかもその痛みが一向に引かず、いつまでこの苦しみが続くのか分からない。何も言わなくとも心が疲れ切っていて不安でいっぱいなのは分かる。振り返った士朗に淳子の目がせめて少しの間でも一緒にいてほしいと必死に訴えていた。士朗は淳子が仰向けに寝がえりを打つのを手伝ってやりスカートの裾も整えてやった。パンツを履いていないかわりに切除した傷口にガーゼを貼り付けられているスカートの中が士朗に見えてしまったが、淳子はされるがままだった。淳子がベッドの横に胡坐をかいた士朗の頬に手を伸ばしてきた。小さくて冷たい淳子の手を士朗は両手で包んで握った。淳子が小さく鼻をすすり始めやがてそれが嗚咽になった。士朗のズボンの下でペニスが痛いほど勃起していた。割礼をうける少女は内診台に手足を拘束するベルトをつけたものに自分で上がると士朗は聞いて知っていた。あられもない姿で拘束された姉の姿をつい想像しまったのだ。胸の内は罪悪感で一杯でもペニスは勃起をやめず、士朗は何度も心で淳子に詫びた。強力な鎮痛剤は眠気を誘いすすり泣く声がやがて

寝息に変わった。士朗は淳子の手をそっとベッドに下ろした。立ち去ろうと士朗の背後で淳子が苦しげに呻いた。悪夢でも見ているように淳子はうなされていた。起こしてやるべきかとよほど思ったが、結局、士朗は音をたてないようにそっと引き戸を開けて出ていくことにした。起こしたところでまた痛みに苦しむだけだ。

あと数日で五月の大型連休という午後、例のアダルトビデオの入った小包を大事そうに抱えて士朗は家に帰ってきた。両親は仕事で出ているし、淳子は暗くなるまで学校の自習室にこもって帰ってこない。それでも予定外に家族の誰かが帰ってきたときの用心のため、小物ばかりをまとめて入れてある引出しから父親が検査入院中に病室でテレビを見るのに使っていたイヤホンを引っ張り出し、士朗は部屋に入った。淳子の部屋にはないビデオデッキを内蔵したテレビがそこには置いてあった。興奮していたためにテレビの前に座ってようやく士朗は自分の尿意に気づいた。普段なら玄関からトイレに向かうのが習慣だった。自分がひどく滑稽なようで誰もいないのに士朗は一人で気恥ずかしかった。トイレを済ませ、気を取り直して小包の包装をといて士朗は愕然とした。うっかり他人に中身が知れないよう、外からは分厚い本に見えるように詰め物でかさ増ししてあったが、出てきたのは薄いケースに入ったディスクだった。世紀が変わって、ＤＶＤプレイヤーが電気店に並んでも、まだ主力はＶＨＳだ。ましてや普通の中学生には映像といえば弁当箱ほどもあるビデオテープに納められたものだ。士朗は肩を落とした。減額された小遣いでＤＶＤプレイヤーを買うとなると週末に自転車で遠出して、中古品を探すしかない。それまではせっかく買ったアダルトビデオもお預けだった。

電車代も節約して自転車で走り回り、午前中いっぱいかけてようやく士朗はプレイヤーを買った。モノラルの音声で再生する機能しかないそれの外箱は傷だらけだった。よく見ればその釘で引っかいたような傷はどうも子供のの仕業らしくチューリップなどが描いてある。贅沢は言っていられないので安くて動作に問題がないならよ

しとした。それでも夏休みまで学校帰りにジュースを買う小遣いもなくなってしまう出費だった。店を出たところで濃紺の古風なブレザーを着こんで、凝った交渉をつけた女子高生の二人連れとすれ違った。淳子と同じ高校の制服だった。ついすれ違った二人のうち容姿が涼やかな方の少女が割礼をうける様を士朗は想像してしまう。士朗は多少聞きかじっただけで、割礼の内実を詳しく知らない。想像している姿は脚を大きく開いた少女が白衣の男に股間を覗きこまれている姿といった程度だった。容姿が良いといっても淳子には及ばない。すぐに想像の中の女子高生の姿は淳子に入れ替わってしまう。自分の想像で士朗の心臓が跳ねた。

　士朗は一刻も早く例のアダルトビデオが視たかった。日曜だから淳子の学校の自習室も夕方で閉まってしまう。淳子が帰る前に視ようと思えば全力で自転車を飛ばさねばならなかった。ところが自転車をこぎ出した途端に後輪の様子がおかしい。降りてみればタイヤから空気がすっかり抜けて、それどころか虫ゴムまで抜かれて消えていた。ひどいタイミングで悪質な悪戯にあってしまった。途中の自転車屋で虫ゴムを買って空気を入れる金がない士朗が、自転車を押して家にたどり着いたのは。日もすっかり暮れてからだった。アダルトビデオ鑑賞の楽しみはまた翌日に持ち越しになってしまった。こんな時間からいそいそとプレイヤーをつなぎ始めたらさすがに家族に怪しまれてしまう。

士朗と淳子の部屋の間を仕切る薄い仕切りでは防音効果はほとんどない。普通の声量で壁越しに話をすることだってできる。二か月ほど前に買って以来、何よりも大事に扱い、何度も繰り返し見た盗撮映像のディスクをプレイヤーに挿入して、再生ボタンを押そうとしていた士朗の動きが隣の部屋からの物音で止まった。淳子が部屋に戻ってきた音だ。すぐに戻らなかったのは汗だくになった体を風呂で流していたからだろう。ベッドがきしむかすかな音がしてそれっきり物音一つしなくなった。士朗はつなぎっぱなしになっているイヤホンを耳につけ、テレビ本体のスピーカーから音が出ない設定になっているのを確信し、再生ボタンを押した。青一色だった画面にいつもの映像が現れた。
　やっとの思いでＤＶＤプレイヤーを手に入れた翌日の月曜、提出する課題のことなどすっかり失念していた士朗は居残りでさんざん搾られて遅く帰った。その日は夕飯を終えると士朗は宿題があるといってさっさと部屋に引き揚げてしまった。勉強している間は早く寝ろと母にせっつかれる心配はないのでそのまま家族全員が寝静まるのを待つつもりだった。むろん、勉強など手につかない。日付が変わるころ両親の寝室のドアの隙間から漏れる明かりが消えたのを確認し、士朗はいよいよ楽しみにしていたアダルトビデオを視ることにした。万一にも家族に発見されないようにスピーカーの音量などは何度も確認した。明かりを消しても狭い士朗の部屋はテレビ画面の光で存外に明るい。
　いきなり体育館の隅から全体を見渡した映像が出た。百人以上いる女子の新入生が体育館で六つあるクラスごとに整列させられていた。その少女たちが着ている体操服に見覚えがあり、士朗の心拍数は跳ね上がり口が渇いた。淳子が通っている高校の体操服で士朗は

何度も同じものが物干し竿にかかっているのを見ていた。これを買うきっかけになったチラシの触れ込み通りならこの映像は今年の新入生のはずで、そうなれば淳子が映っている可能性も高いのだ。いつも優しくしてくれる家族の中で一番好きな姉の受難の様で興奮し、ペニスを擦りたてている自分の姿を思うと士朗はおぞましかった。その感情も十代の強烈な性衝動の前にあっけなく屈服し、士朗はついにテレビの電源を切れなかった。胸のうちは罪悪感でいっぱいでも、股間の物はズボンの布地を突き上げて勃起していた。

列の先頭の生徒はすでにブルマとパンツを脱いで手に持っていて、体操服の裾を引っ張って少しでも股間を隠そうとし、恥ずかしそうに猫背になっていた。画面の下に「検査」と字幕がついた。保健室などでベッドの横によく置いてあるカーテンのつい立てが並んで検査をうけるための区画が区切られていた。一クラスに一つずつ割り当てられたその衝立の向うに列の先頭の生徒から一人ずつ入っていく。残った生徒たちは不安そうにそれを見送るのだった。自分と二つしか年が違わない少女たちの瑞々しい下半身がむき出しで、それがずらっと並んでいる映像を士朗は身を乗り出して食い入るように見た。

少女の中にひときわ色の白い女子生徒を見つけ、彼女をもう一度見ようと巻き戻している間に士朗はふと気づいた。この撮影者はカメラを隠し持ったまま自由に歩き回っていた。先刻の映像といい、校内を自由に動き回れる者だ。割礼のために出張してきている病院関係者か教師であれば女としか考えられない。いずれにしても学校内に協力者がいる。それに腹を立てている自分に気付き滑稽だと士朗は思った。いきり立ったペニスをパジャマのズボンの上から握りしめてこれを見ている自分に怒る資格があるわけがない。結局、巻き戻してみて、その色白の生徒は士朗が期待した淳子ではなかった。軽い落胆と同時に士朗は安堵もした。

カメラの主は体育館の中を自由に歩き回って全く怪しまれないらしく、容姿の良い生徒が画面に映ると映像はズームアップしてその

生徒を追う。衝立の前でブルマとパンツを脱ぎ、それを丸めて持ったまま衝立の向こうに消えるまでの様子が克明だった。しばらくすると、その生徒が下腹部を押さえてついた手から飛び出してくるのだ。女子生徒どうしの話に聞き耳をたてて仕入れた情報で、士朗は割礼前に剃毛と浣腸をすることは知っていた。しばらく見ていて衝立の向うから飛び出してくる少女たちはその浣腸をされていて、切迫した便意に追われて一目散にトイレを目指しているのだと分かった。それにしてもこの映像は学校関係者でなければ撮りようがない。医療関係者が仕事もせずうろついていたら怪しまれてしまう。教師、それも女とみて間違いないと士朗は思った。姉の近辺に不埒な者がいると腹を立てている自分が士朗は滑稽だった。当の自分はパジャマのズボンを下から突き上げるペニスを握りしめてこれに見入っているのだ。

映像は再び全体を見渡すアングルに戻った。検査も終わりに近づいて生徒の列はだいぶ短くなっている。一定間隔で衝立のかげから少女が飛び出し、一目散に走っていく様は事情を知らなければ運動会の競技のようだ。校舎内の全部のトイレを男子用まで解放したとして、この人数では戦場のような様相を呈しているはずだ。傷が生々しいうちに大便の大腸菌で化膿しないように浣腸で便を一掃し、翌一日は飲み物だけで過ごさせるのだが、そんな理由までは知らない士朗には単に余分な苦痛をあたえているようにしか見えなかった。現に割礼を通過儀礼と考える有識者や現場の教師は何よりその苦痛に耐える過程を重要視していた。

この日も士朗は体臭のしみたベッドの上に胡坐をかいていつものように盗撮された映像に見入っていた。初めて再生した日から毎日のように見ているので、すっかり頃合いを心得ていて士朗はおもむろにズボンを下げて、中学に入ってからブリーフにかえて履きはじめたトランクスからペニスを出した。何度やってもこの時ばかりは苦い自己嫌悪で士朗は胸がいっぱいになる。今日などトイレでへたり込んでいたところを形ばかりの気遣いをしただけというのに、淳

子は士朗に感謝をしてくれた。淳子の涙で濡れた顔を士朗は思い出してしまう。体育館の映像にノイズが入り、一瞬だけ青一色の画面が出る。学校の医務室らしい部屋にカーテンで衝立がしてあり、その中に内診台によく似たものが据えられていた。内診台と違うのは、全身を拘束できる太いベルトがあちこちに付いているところだ。体操服は上半身だけで、下半身には靴下さえなくスリッパをつっかけて画面に入ってきたのは他ならぬ淳子だった。頭髪が落ちないように頭には風呂場で使うようなビニールの帽子が被せられ、体操服の裾は下りないようにへその下でしぼって輪ゴムで止めてあった。

衝立の中は淳子の他に医師と看護婦がいた。両手を胸の前で握りしめていた淳子がからくり細工の人形のように医師に向かって頭を下げた。胸中が恐怖でいっぱいなのは画面を通しても分かるのに、こんなときまで淳子は律義だった。看護婦にせかされておずおずと進み出た淳子が割礼のための台に腰をかけるとあとは早かった。看護巣は淳子の肩を押して台に寝かせると手際よくベルトで上半身を固定してしまう。脚を開かねばならないがそこは淳子が躊躇した。看護婦がその淳子の脚を持ち上げて大きく開いた状態で固定してしまう。全て慣れた手際で淳子の心痛になんの感情も持っていないようだった。

画面が切り替わり、淳子の股間が大写しになった。初めてこれを見たとき士朗にはこれがどう撮影されたか分からなかった。淳子の股間をこうこうと照らしている無影灯にカメラが仕込まれているのだと気付くにはやや時間がかかった。カメラは小型に違いないが、小さなレンズでも理想的な順光なので画質はすこぶる良い。淳子の性器と肛門が鮮明に映っていた。大陰唇の縁がかすかにくすんだ色をしているだけで、淳子の性器は初々しく、肛門のすぼまりも薄いすみれ色だった。このすぼまりに浣腸器が突きたてられ、おそらくは大量の軟便を排泄したその直後の映像だ。高校生なのだから当然生えているはずの陰毛が剃り落とされていて。ずいぶん昔に見て以来、姉の下腹部として士朗に記憶されているそれとまったく同じだ

った。ピンセットで消毒液に浸したガーゼをつまんだ医師の手が画面に現れ、淳子の股間をぬぐった。初々しい股間がヨード駅で毒々しい紫色に染まり、拘束されて動けない淳子の腿が痙攣する様を映し、再び画面は切り替わった。
医師がピンセットで淳子のクリトリスの包皮をつまんで引っ張った。怯えた目で医師の手元を追っていた淳子の目が固く閉じられて、うめき声が漏れた。間髪入れずメスが包皮の根元に入れられて鮮血が流れた。
「ぎゃあああ！」
淳子の悲鳴だった。士朗の年頃の少年が想像する、少女らしい甲高く澄んだ可愛らしい悲鳴ではない。まるで踏まれた猫のような叫び声だった。全身を台に拘束されているので淳子が動かせるのは首から上だけだ。その頭を必死に振って痛みを訴えても医師の手は粛々と手順を踏んでクリトリスの包皮を切り離してゆく。
画面が切り替わり再び淳子の股間が大写しになる。クリトリスの包皮は完全に取り除かれ、薄桃色の粘膜でできた突起がむき出しになっていた。包皮を切り取った傷口からにじみ出る血は左右の大陰唇が合わさった溝を伝い、黄門のすぼまりに溜まって、さらに尻の下に置かれたステンレスのトレーに落ちた。淳子のかすれた泣き声と荒い息使いに交じって、別の少女の悲鳴が小さく聞こえている。同じ部屋を衝立で仕切り、そこで別の少女が同時に割礼を受けているということだ。むき出しになったクリトリス本体の先端をピンセットでつまんで引っ張られ、淳子の白い桃が痙攣した。
雑然と物が散らかる暗い部屋のベッドの上で、先刻から自分のペニスを握って擦っていた士朗がベッド脇のティッシュを一枚抜きとった。これから画面に何が映るか、すっかり覚えてしまうに十分なくらい繰り返しこれを見てきた。いつものように画面が淳子の股間から全身を映すアングルに切り替わった。時間はやや戻っていてまだ医師のピンセットは淳子のクリトリスをつまんではいない。先ほど股間を大写しした画面でのことと同じことがこの画面でも再生され

る。医師のピンセットがクリトリスを摘み引っ張ると淳子の体が痙攣し、鋭い悲鳴が上がった。士朗のペニスを擦る手の動きが早くなり、ティッシュはすでに左手の手のひらで広げ、射精に備えてあてがってあった。

画面では医師が関の細くとがった柄の長いハサミを掴んでいた。目を固く閉じて全身を強張らせて痛みに耐えている淳子にはそれが見えない。医師は全く躊躇せずそのハサミで淳子のクリトリスを切り落とした。今までの苦痛も耐えがたいのに、いきなりそれをはるかに上回るすさまじい激痛に淳子が狂ったように泣き叫ぶ。もはや悲鳴は人間の声とは思えない。助手の看護婦が淳子の頭を抑えつけた。いくらクッションがあるとはいえ、そんなに激しく台に頭を打ち付けていてはどこかを痛めてしまうと士朗にも分かるような悶絶のしかただった。医師は素早く消毒を施し、ガーゼをあてがった。消毒液は恐ろしくしみるらしく、淳子がまた声をからして泣いた。狂ったような叫び声でことがには聞けないのだが、よく聞けばお母さんと叫んでいるのを士朗は知っている。

画面はまた股間の大写しに変わり、今度はハサミがクリトリスの根元を切り落とす様を詳細に見せた。髭を剃るに剃刀がニキビを剃り落としてしまうように、体の外に出ている突起は根元から切除された。イヤホンからは先刻とまったく同じ悲鳴が聞こえる。消毒が施されてガーゼが当てられる様子を士朗は放心して眺めていた。手には精液を受け止めたティシュが丸めて握られ、ペニスはまだ勃起しているものの、ゆっくりと萎みつつあった。ややしばらく放心していた士朗が丸めたティッシュを隅のゴミ箱に投げた。ティッシュはゴミ箱の縁にあたって床に落ちた。士朗はディスクを取り出してケースにしまい、慎重に元のように辞書のカバーに隠した。この後、別の女子生徒が割礼をうけるようすも映っているが士朗は滅多にそこまで再生しない。

士朗は汗臭いベッドに戻ってごろりと横になった。ゴミ箱に入れ損ねたティッシュのことはすっかり忘れている。このディスクを買

ってから三か月ほど毎日のようにこうして姉の苦悶する姿に興奮しては自慰をしている。事がすんだあとの罪悪感は変わっていないが、その罪悪感にもそろそろ慣れつつあった。そう自己嫌悪しながら、行いを改められない自分をだらしないとは士朗も思っている。しょせん自分はだらしがないのだと割り切ってしまえばあとは楽でいられる。士朗にはそういう狡さがある。全身が汗ばんでいて気分が悪いが射精の後に特有のだるさがあり、士朗はそのまままどろんで結局は朝まで熟睡した。

士朗の目覚まし時計はずいぶん前に壊したきりそのままになっている。淳子が毎朝、扉の前から声をかけてくれるので特に不自由はない。薄い壁を通して聞こえてくる淳子の部屋の目覚まし時計のベルの音で眠りが破られ、そのまままうとうとと気持ち良くまどろんでいるうちに淳子が起こしに来てくれるのだ。今日も心地のいい声で起こされた士朗が廊下に出ると、淳子はすでに後姿だった。すでに制服を着こんでいて出かける準備は整っていた。高校生だから始業時間は当然、士朗よりも遅いのだがバスを使わずにあえて自転車通学を選んでいるので朝が早いのだ。

その日の夕方、淳子は髪に塩素の臭いをつけて帰ってきた。タンポンを試した体に合わず、さんざん苦しんだ翌日だ。いくらなんでも見学にすると思い込んでいた士朗は仰天してしまった。生理の問題に男が踏み込んではいけないという慎みをつい忘れて士朗はどういうことなのか詰め寄ってしまった。まさか、昨晩のように吐き気で真っ青になりながら水泳をしてきたかと思ったのだ。

「大丈夫、入れ方が悪かったみたいで、友達に教えてもらったらずっと楽になった。」

士朗の心配を察してか淳子は微笑んで答えた。要は初めてのことで、奥までしっかりと挿入するのが何となく怖かったがために、膣の入口あたりに挟んである状態だったらしい。そのあたりは感覚が鋭敏で慣れない人が何かをはさんで刺激を与え続けたら気分が悪くなるというのだ。そういう微妙な問題を相談できる友達が姉にいてくれ

てよかったと、士朗は顔も知らないその人に感謝した。
この水泳の授業のことのように、淳子は何事にも傍から見ていると痛々しいほどの生真面目さで努力をする。学校の課題も期限内に提出できなかったことがないと士朗は聞いていた。ずるけることに慣れてしまっている士朗とは対照的だ。割礼を受けた翌朝、士朗が洗面所に行くと淳子が髪をとかしていた。風呂に入れないのでせめて手足をよく洗い、洗面台でシャンプーをしたのだ。淳子の目の下には薄く隅ができていた。さすがに通学用に買ってあった自転車は諦めてバスを使うことにしたが、廊下を歩く姿はやや蟹股でいかにも歩きにくそうだった。うっかり普段の歩き方をすれば傷口から激痛が走るのだ。士朗が後で聞いた話だが、半数以上の女子生徒はその日は欠席したという。あれほどの苦痛を受けた翌日なのだから発熱したとでも言えば誰も怪しまない。心配のあまり、せめて一日は休んだらどうかと士朗は止めた。淳子の顔色を見れば休んだほうがいいのは誰にでも分かった。士朗の気遣いにいつものように微笑んで応えて、淳子は出て行った。

法律で指定された医療機関が発行する、性器切除処置証明証書というものがある。この一通の証書が私たち女にとっては学校の卒業証明と同じ程度の意味を持つ。そもそも性的非行の防止を目的に一部の躾の厳しい家庭や寄宿学校で行われていた女の子の性器切除は法律により強く推進されて、法律が国会を通過してから数年、現在ではほとんどの高校の校則で義務になっている。今では本来の目的の他に年頃になった女の子が受けるべき通過儀礼としての意味づけが強く、性器切除は割礼と通称されるようになった。割礼を強く勧める法律で、必要な費用は各都道府県の予算から出されることになった。その費用の中に麻酔が入っていないのは当局の説明では麻酔薬へのアレルギーなどの安全上の問題とされている。しかし、これはあくまで表向きの話で、学校の先生を中心とする一部から痛みに耐える通過儀礼こそ重要なのだと強い圧力があり、政府がそれに配慮したというのが実情だ。経緯はどうであれ、私たちにとって割礼はこれを通らねば進学も就職も断たれてしまう通過儀礼だった。

私が高校在学中に母校でも新入生は全員が割礼を受けることが校則で定められた。翌年から学校の門に横付けされた大型バスに沈痛な顔で乗り込んでいく一年生たち列が見られるようになった。地元の病院で全員がクリトリスの先端から半分ほどを麻酔もなしで切除されるのだった。私たちはそんな処置を受けずに済んだ最後の学年だった。それでも看護学校の合格通知と一緒に送られてきた入学案内には割礼を受けた証明書を提出とあった。是非も無いことで、高校を卒業した春、私は割礼を受けた。クリトリスの先端の柔らかい部分を硬いピンセットでつままれて引っ張られ、ハサミで切り落とされた激痛は一生忘れようがない。それでも列に並ばされて予防接種のように次々と処置される女の子たちに比べれば、ずっとましな

扱いだった。
　看護学校は病院の系列だから、学生の就職先は決まっている。私が卒業した年、性器切除を専門に扱う別館が新設され、私はそこに配属になった。学校ごとに集団で処置を受けるために、膨大な人数を短時間でこなさねばならず、ベテランが激務を嫌って新人が多く配属されたからだ。それ以来、私は毎日のようにまだあどけない女の子たちが激痛に泣き叫ぶ声を聞いている。処置に必要な器具を揃え、必要書類を整理するといったルーティンワークはもちろん、おびえる女の子をなだめ、必要とあれば少々強引にでも処置を受けさせるのが私の仕事だ。処置に使う台は内診台とほぼ同じ形をして、処置中に暴れることが無いように体をしっかり固定する太いベルトがいくつも付いている。年頃の女の子にとってはこの上に乗り、人前で股を開くだけでも一大事だった。
　入学式から五月の連休前までは各学校が新入生の割礼を予定するので、特に私の職場が混雑する時期だ。そのある日、主任に言われて私が駆け付けると、問題の女の子は採尿用のトイレの中だった。扉はすでに外側から鍵を使って開けられている。若い男の研修医が一歩でも中に入ろうとすると金切り声をあげていた。医師の人手はぎりぎりで、応援の研修医とはいえ、こんな事案にいちいち関わってはいられない。私が代わるように言うと、その研修医はパタパタと忙しない足音を立てて行ってしまった。
　先刻の男の医師から同性で歳も近い私に相手が変わって、女の子も少しは警戒を解いたようだった。私が近づいてしゃがみ、目線の高さを同じにしても金切り声をあげはしなかった。ただ、床に座り込んだまま水洗便器の太いパイプに腕をまわしてしがみつき、震えていた。うっかりパイプに回した手をほどいたら、腕ずくで引きずっていかれると思っているようだ。実際、女の子が心配した通りで、私がここに来たのも説得のためではなく、暫くなだめておけということだった。病院も学校も最後には予定通りにこの女の子に割礼を施すのだ。でなければ看護師二年目の私に任せるはずもない。

うっかり刺激して大騒ぎされてはかなわないので、私はなるべく穏やかな表情で声をかけた。
「いや！絶対に！絶対にいや！」
挨拶も最後まで言い終わらないうちに、女の子はパイプにしがみつく腕に力をこめて激しく頭を振った。両手がふさがっているので女の子の顔は鼻水と涙でぐっしょりと濡れている。小柄で地味な女の子だけに、ことさらに痛々しい姿だった。何をどう話しかけても効果がないのも当たり前で、割礼をうけている同級生の泣き叫ぶ声がここまで響いてきている。両手でしがみついているので女の子は顔を拭うことができない。あどけない丸顔が涙と鼻水でぐっしょりと濡れていた。
しばらく女の子のそばにしゃがんだまま私は何もせず女の子が警戒心を解くのを待ち、頃合いを見てゆっくりと女の子の背中に手を伸ばした。
「いや！」
無理やり引きはがされて連れて行かれると思ったのだろう、女の子が金切り声をあげた。まだ他の生徒が割礼を受けている最中で、次の学校の予定は昼の休憩をはさんで午後になる。まだ時間はあるので私も急ぎはしない。背中をさすってやると女の子の制服のブレザーがしっとりと湿っているのが分かる。一番上に着た紺色のブレザーまで湿らせるほどの汗だった。下着などは汗が搾れるほどだろう。そばにいると濃厚な汗の匂いがした。石鹸の匂いと混じった私が好きな匂いだった。
配属されたばかりのころはこれから毎日、自分より年若い女の子たちが泣き叫ぶのを見続けられるかどうか不安だった。実際、性器にメスを入れられるときの獣のような叫び声に膝が震え、自分が受けた割礼の激痛を嫌でも思い出した。最初のうちは女の子たちの苦痛に自分は胸を痛めているのだと私は当然そう思っていた。新人は雑務が多く、平日は仕事を終えて寮に帰るとあとは寝るだけだ。そんな時、普通でない体のほてりを感じるようになったのは仕事にも

慣れ始めたころだった。疲労が原因でないことは私にもわかった。毛布をかぶって眠ろうとしても体の芯が熱をもったようで、寝返りをうつと起った乳首がパジャマにこすれて体の奥がますます疼いた。オナニーがしたいと思ったのはこのときが最初だった。心に悪影響があるからいけないことだとオナニーは禁止されていて、他の大多数がそうであるように私もそれに従ってきた。自分の責任で自分のことを決めさせてもらえない歳では学校が決めた規範に従うほかはない。その私も少し前に二十歳を迎えていて、少なくとも自分のことで他人に干渉されない年齢になっていた。もちろんオナニーが褒められたことでないことに変わりはない。タバコと同じで悪癖と見られていることは違いない。進学を親の意向で決め、その惰性のまま この仕事をしている私にとっては。心から強く願って自分で決めたのはこれが初めてだった。オナニーがしたいがために私は寮を出た。唐突なことで同室だった同期生は自分が何か人間関係を損ねることをしたかと真剣に悩んだらしい。もちろん彼女に何の落ち度もない、良いルームメイトだったと思う。

寮費に比べればやや家賃のほうが高く、自炊もするので不便にはなったが私は満足だった。新しい住まいに入った最初の晩に私は早速、オナニーを試すことにした。といっても具体的なやり方を詳しく知っているわけではない。とりあえず、楽なパジャマに着替え、戸締りをしっかりして下半身だけ裸になった。あとは股間を自分の指でいじってみるだけだった。指を揃えて性器全体をそろりと撫でてみた。くすぐったいが嫌な気分ではなかった。何度か繰り返すうちに中指の腹でラビアの縁をなぞることを私は最初に覚えた。中指の先がぬめった体液でぬれた。初めてのことなのでひたすら性器をいじるだけのぎこちなくて単調なオナニーではあった。それでもむずむずとした痺れに似た感覚が心地よく私にはいけないことをしているという罪悪感より喜びが大きかった。うっとりと眼を閉じてクリトリスをそっとつまんでみる。特に女にとってはセックスに絡んだ情報は限られているので、看護学校に行かなければ私は自分のク

リトリスの位置を正確に知らないまま終わっていたかもしれない。先端から半分ほどを切り落とされていても、クリトリスは包皮の中でしこっていた。軽くつまんだだけで膣がきゅっと収縮するほどの快感が走った。思わずクリトリスをつまむ指に力を入れると、鋭い痛みがあり、それ以上の強い快感が電気のように背筋に走った。

「ひっ！」

思わず悲鳴をあげてしまって私は焦った。いけないことをしている負い目のせいか、声が部屋の外に漏れないのは分かっていても何となく不安だった。私は手近にあった自分が脱いだパジャマのズボンを口に押し込んで奥歯で強く噛み、またクリトリスをつねった。噴出した汗で上半身だけ着たパジャマが湿っていた。声はこらえられたが涙と一緒に出た鼻水で鼻がつまってしまい、口で息ができないので苦しくて目がくらんだ。それでも、その先にオルガスムスがあることは肉体が教えてくれた。メスを入れていないクリトリスなら優しく扱うだけで十分だったのだろう。私は性感の大部分を奪われてしまったクリトリスを痛みに涙を流しながらつねり続けた。大きな快感の波が押し寄せて視界が白けた後。私はしばらく失神していたらしい。肌寒さを感じて目が覚めると頬を濡らしていた涙はすでに乾いていた。股間がひりひりと痛むので手鏡に写してみると、クリトリスの包皮から血がにじんでいた。つねるのに熱中して爪を立ててしまったのだ。自分の体を苛むような痛みを伴うこれが私の最初のオナニーだった。

　背中をなでられている女の子は小さな肩を震わせてすすり泣きしている。無理やり引きはがされて連れて行かれると思っていたところを優しく背中をさすられて、安心した途端に嗚咽が止まらなくなってしまったようだ。寮を出てから毎晩のようにオナニーをするようになった私は数日のうちにクリトリスだけでなく乳首をつねるようになり、痛みに涙をこぼしながらするオナニーが癖になってしまった。それにも慣れてくるとなにかを思い浮かべながらオナニーをしようと思うのは自然なことだった。最初はなにか男性をイメージ

しようとしたが駄目だった。頭に浮かぶのは昼間に職場で見る女の子たちの苦悶ばかりだった。オナニーがしたいという強烈な欲求の源もここで初めて自覚した。自分がサディストだと思ったことはなかったから最初はさすがに戸惑った。それでも、台にベルトで縛り付けられるときの女の子のおびえた表情や割礼を終えた後のショックと痛みでいつまでもすすり泣く声を聞くとき、自分の体の奥からぞくぞくと寒気にも似たあやしい感覚がわきあがるのを私ははっきりと自覚するようになってしまっていた。こうして優しく背中をさすりながら白衣の天使を演じていても、私は内心でこのあどけない女の子の痛々しい姿に心の内で舌なめずりをしていた。他人の苦痛を喜ぶのが人でなしにすることなら、私こそはその人でなしだ。この女の子は私の今晩のオナペットになる。

私の時間稼ぎはうまくいったようで、騒ぎが大きくなる前に廊下を歩く何人かの足音が近づいてくる。主任の看護婦と男の看護士が二人、中年の女性を連れてきた。男性職員は裏方に回されて割礼を受ける女の子たちの目には触れないのが普通だから、この女の子を無理やり引きはがして連れていく手はずが整ったということだ。私の仕事は終わったのでそっと立って後ずさりしてドアの外に出る。立ち上がったと愛液を吸ったショーツのクロッチがぬるりと私の性器とこすれた。替えの下着を持ってこなかったことを私は悔やんだ。悪いことにロッカーの中にいつもは置きっぱなしにしてあるナプキンを少し前に切らしていた。昼の休みに下り物シートを買いに売店に走らなければならない。

「確認しますがよろしいですね。」

一緒にいた主任が最後の確認をした。肩をすぼめてうつむいているのはこの女の子の母親だ。その母親が小さくうなずいたのが合図だった。親の承諾が取れればもう待つ必要はない。

「やめて！お母さん！たすけて！」

必死に叫ぶ娘から母親は顔をそらした。母親としても心がつらいのは見ていて分かった。男二人でパイプに回した腕を解かれて、引き

ずり出される間、女の子は狂ったように暴れて泣き叫んだ。その女の子が小さく呻いて急におとなしくなった。おしっこが脚を伝ってタイルの床を濡らしていた。失禁だった。年頃の女の子にとってはあまりに恥ずかしい失敗で、もう暴れる気力もなくうつむいて泣いているだけだった。この手のことは珍しいことでもないので構わずに女の子を処置室に連れていく。すぐには止まらないおしっこが廊下に点々と残った。女の子の母親は深々と頭を下げて娘のしたことを詫び、主任に即されて申し訳なさそうにすごすごと帰っていった。

　私は後始末を買って出た。中断していた書類の整理を済まさないと昼の休憩が無くなってしまうが、あえて引き受けたのは心がけがいいからではなく、下心があってのことだ。大急ぎで用具室までバケツとモップを取り走って、戻ったころには廊下には誰もいなく、壁越しに割礼を受ける女の子の悲鳴だけが聞こえている。皆、大変な忙しさで働いていた。私も床にたれたおしっこをモップに吸い取らせてバケツでゆすいではまた床を拭く。おしっこの水滴が点々と処置室まで続いていた。今ごろあの女の子は浣腸を受けているころだ。かさぶたができる前、傷が生々しいうちは大腸菌が怖いのでできれば大きい方はしない方がよい。そこで浣腸でお腹の中のものをきれいに出しきってしまうわけだ。その後、陰毛を剃られ、服を全部脱がされて腰までしか丈のない手術着が一枚だけ渡される。三人に一人はこれだけで泣き出してしまう。あの女の子の様子が見たくて、私は仕事を急いだがおしっこは点々と散らばっていて思いのほか手間がかかった。終わるころには目当て女の子は割礼を受ける台があるカーテンの仕切りの中に入ってしまう。

　処置室と言って手術室とは言わない。割礼は病気の治療ではないからだ。私の職場の処置室は専門に作られた施設だけに広く、割礼のための台が八台も並んでいる。処置前に浣腸などの準備を行い部屋は分けられていないので。台が設置してある反対側の壁際に棚と診察用もベッドが四つ置かれている。このベッドの上で女の子たちは二人並んで脚を広げ、看護婦に下の毛を剃られる。トイレがすぐ

に満員なってしまい、職員が使えなくなるので浣腸の後の排泄は同じ部屋でおまるにする。慣れないうちは吐き気がする臭気が立ち込めるが私はこの処置が好きだった。羞恥で顔を真っ赤にして震えて涙を流しながら排泄する女の子たちに姿をみると胸が苦しいくらいに私の感情は高ぶり、部屋にこもる匂いまで嫌いではなくなっていった。

割礼を受ける台の周りは一台ずつ天井から蚊帳のように垂れた透明なビニールシートで囲まれている。その天井に排気口がありそこからフィルターを通ってほこりや細菌を取り除かれた空気が静かに吹き出る。排気口から出る空気は室温より少し低くなっているので、ビニールで仕切られた内側をゆっくり下がりながら、古い空気を外に押し出して傷口からの感染症などを防ぐのだ。これはどこかの軍が野戦病院のために開発した装置だと聞いた。本格的な手術室のような設備を用意して、一人ずつ個別に処置していては予算も人員もたちまちパンクしてしまう。せめてもの気遣いでビニールの仕切りのさらに外側にカーテンが取り付けられている。ただの布で大きく股を開かねばならない年頃の女の子のために、せめて外からは見えないようにしてやるだけだ。音をさえぎるものは何もないから、学校ごとに連れてこられる女の子たちはクラスメイトが泣き叫ぶ声を屈辱的な浣腸などを受けながら聞かなければならない。あの女の子もそうしているうちに恐怖のあまりパニックに陥ったのだろう。処置を終えた女の子はすぐに車イスに移されて、隣の部屋に運ばれて出血が収まるのを待つ。クリトリスは海綿体だから切ればかなりの出血がある。一泊の入院にしても日帰りにしてもすぐに安静が必要だ。だだっ広い部屋に簡単なベッド並んでいるだけの部屋で、処置を終えた女の子が運ばれてきてはそこに寝かされる。一時間ほど寝かせて出血が落ち着き、ベッドが空いてシーツを交換すると次の女の子がすぐに運ばれてくる。ここで泣いていない女の子はまずいない。中には長い緊張と痛みのせいで吐き気を訴える女の子もいて、ベッドの間を回ってそういう世話をするのが新人の看護婦の仕事だ

った。好きな仕事だったが、二年目に入った私はこの春から担当から外されてしまった。機会があれば手伝いを申し出る私を後輩たちは心がけのいい先輩と思っているらしい。
　モップを持って処置室に入るとすでに室内は別の誰かが掃除をした後だった。女の子の姿が無かったので少しがっかりしたところで思わぬものを見た。一番手前にある台の外側のカーテンが少し開いたままになっていて、そこから透明なビニール越しにあの女の子の足が見える。細くて白い足が分娩台と形は変わらない台に太いベルトでしっかりと固定されていた。他の女の子はすでに割礼を終えて隣の部屋で傷の痛みに呻いているところだ。ちょうど医者がメスを取り上げて割礼に取り掛かるまさにその時だった。メスが触れた瞬間に女の子の素足のつま先がお陰と伸び、むき出しの下半身の筋肉が突っ張った。
「ひぃ！ひぃぃ！」
すぐに今にも死にそうな悲鳴が聞こえた。太ももの内側が電気が流れたように痙攣して、身をよじって逃れることもできず足の指がむなしく閉じたり開いたりしていた。メスといってもまだ珍しい割礼専用に開発された物で刃物には見えない。チューブの先に太いペンのようなものがついた外観で、先端には虫眼鏡でしか見えないほど小さな薄い刃が二枚ついている。その二枚の刃が空気の力でものすごい速さで交互に動くと、ちょうど前歯で食べ物を噛みちぎるのと同じ要領で押し当てた部分を切り取ってゆく。刃は小さいので切り取られた部分はどろどろの液体状になり、チューブを通って吸い取られていく仕組みだ。切った後の傷口は普通のメスよりもきれいになる。そのメスであの女の子が小陰唇を根元から切除されていた。すでに床はきれいに掃除されていたが、やり残しを見つけたふりをして私はずっと女の子の苦悶を見続けた。
　床掃除を切り上げて何かここにいるために別の口実を探そうとしたとき、囲いの中で助手をしていた同僚が私に気づいてしまった。内側からは誰かが閉め忘れたカーテンを動かせないので同僚は私を

手招きしていた。私は心では仕方なく、しかし顔だけは快く応えた。それでもカーテンを閉めるほんの一瞬だけ女の子を間近で見られた。両側の小陰唇を切り取られて股間は血まみれになっていた。太いベルトで拘束された女の子の全身から汗が吹き出して、顔はもちろん涙と鼻水でべっとりと濡れている。薄手の手術着はその汗を吸って体に貼りつき、浴衣のように合わせて着る襟元から心電図のコードが伸びていた。すでに体を震わせながら水から出た魚のように口を開け閉めして何とか息をしている女の子だったが、本当に痛いのはこれからで、クリトリスの切除がまだ残っている。

カーテンを閉めるとき同僚は部屋の隅を指さして、私は分かっていると肯いた。部屋の隅に脱衣籠かありその中に女の子の着ていたものが放り込んである。この女の子の学校は校則が厳しく、小陰唇とクリトリス体の外に出ている部分の全部を切り取ることになっていた。傷が大きくなるので念のため一泊の入院をする。今から洗濯すれば帰りには着て帰れるはずだ。籠も持ち上げるとおしっこの匂いがした。最後に脱いだショーツが籠の中の服の一番上にあって、無造作に投げ込まれたためにクロッチの内側が見えた。代謝がいい年頃がからクロッチの汚れも多い、その汚れがおしっこで滲んでいた。看護学校のインターンで汚物の処理なら散々やったが、その時に嗅いだ患者のすえた尿の臭いとはまるで違う、いかにも健康そうな若々しい女の子の臭いがした。手元からふわふわと立ち昇る甘酸っぱい匂いを嗅ぎながら廊下を歩いていた私の背後から獣のような悲鳴が聞こえた。ついにクリトリスにメスが入ったようだった。

服を汚してしまうのは看護婦という仕事ではよくあることで、リネン室にそのための洗濯機が一台だけ置いてある。狭く窓のない部屋はシーツでの類でいっぱいだった。脱衣籠を洗濯機の上に置き、私はそっとおしっこ吸って重くなったあの女の子のショーツを取り上げた。扉に鍵がないので、廊下を通る足音が無いか耳澄ましながら、そっとクロッチを舐めてみた。酸っぱい匂いと思ったより強い塩辛さだった。私はそのままクロッチを口に含んで吸い、飲み下し

た。塩辛さと生々しい匂いに目まいがした。息をするたびにおしっこの香りがして私の膣壁がみるみる潤い、ショーツが吸いきれなかった愛液で腿の内側が濡れていた。廊下を通る足音で私の心臓が跳ねた。びっくりして現実に引き戻された私は大急ぎで洗濯機に脱衣籠の中身を放り込み、洗濯も始めるところであわてて制服のブレザーとスカートだけを取り出した。危うく一緒に洗濯して台無しにさせるところだった。

昼の休憩時間に入り、人のいなくなったナースステーションで私はまだ仕事を続けていた。割礼を受けたことを証明する書類で、女の子の名前と日時、どのような処置が行われたかはすでに印刷されている。大抵は学校ごとにまとめての処置になるのでこうして事務の手間を省くのだ。その書類を担当した執刀医ごとに分け、ファイルにとじる。執刀医が判を押した後、再びまとめられて県の教育委員会に送られ、そこで公費が支出されたことを示す判が押される。重要なのはこの判だ。公費で賄われる費用の中に麻酔は含まれていない、一部の費用だけを自己負担することは認められていないので、もし麻酔を使えば全額を自己負担することになり、公費の支出は行われない。通過儀礼として当然受ける痛みを避けてズルをしたとみなされて進学や就職で大変な失点になってしまう。外国でいえば徴兵逃れあたりに相当するのだろう。もっとも、ほとんどの高校で負担の公平を理由に費用を自己負担しての割礼を禁止しているから、たとえ女の子たちが本心ではどんなに望んでいようと、麻酔の使うことはまずない。最後の書類をファイルにとじて、イスから立ち上がると、股間がぬるりとした。時計を見ると休憩時間はほとんど残っていない。今から売店に走っても午後の仕事に遅刻してしまう。おしっこの後始末の分だけ仕事がずれ込んだせいだ。仕方なく私はトイレで拭うだけで我慢して、午後の仕事に出ることにした。書類を届けた帰りにトイレでガードルとショーツを下ろすと、蒸れた匂いがした。まさか隣にいて臭うことはないとは思いつつ、こういうときは気持がひるむ。

　午後からはまた別の学校の一年生がバスで連れてこられる。今度は比較的校則の緩やかな学校らしく、クリトリスの先端から半分ほど、柔らかく最も敏感な部分だけを切り取り、傷が小さいので入院

も無い。もっとも、入院するかどうかは学校の判断による。小陰唇の全部を切除するような処置をした後、日帰りで帰し翌日から通常の授業に入る場合もある。もちろん、病院としては万一の事故を恐れて一泊の入院を勧めるが、割礼を行う医療機関を選定する権限が学校にある以上、強い発言はできない。それでも学校側にも入院させるメリットはある。ある程度の名が通った学校であれば世間の注目も集める。切ったばかりの傷口はひどく傷むのが当然で、父兄に付き添われながら真っ青な顔をして家に帰る女の子たちに感情的に反応する人は多い。往々にして非難の声は学校に向かう。そういう人たちの目からたとえ一泊でも生徒を隠しておきたい学校の本絵があった。もっとも、多くは痛みを伴う通過儀礼は必要だとしたり顔で言うその同じ口が、一方で女の子たちが可哀そうだと言っているだけだ。

午前中も使った広い処置室があわただしい。送迎のバスがつく前に準備を整えておかねば予定がずれ込んでしまう。ステンレスのトレーに器具を一式そろえて置く。柔らかいクリトリスの先端もしっかりとつまめる先の細いピンセットが二本と小さな突起を切るのに便利な刃先の細いハサミで一人分だ。人数分の器具をあらかじめトレーに乗せて、回診に使うのと同じワゴンにしまっておく。午前中と違い処置に時間がかからないので、台は一つだけ使う。その一台だけは周囲にビニールの囲いがなく普通のカーテンで仕切られているだけだ。今回のように時間がかからず傷口も小さい処置の場合、このように簡単に済ますことが多い。私の仕事はカーテンの仕切りの中で助手をすることだった。普段の白い制服から手術で使うような緑色の服に着替え、目の下から顎まですっぽり覆うマスクをする。深くかぶった帽子とマスクの間から目だけが見えるこれは割礼される女の子の恐怖をあおってしまう。私は器具に触れないので薄手のゴム手袋はしない。器具が一通りそろっていることを指さし確認して、私はカーテンを閉めた。もうすぐ女の子たちが入ってくるので、器具や拘束用のベルトがついた台などは見せない方がいい。

カーテンの外が騒がしくなった。カーテンの恥を指でそっと動かして隙間から覗いてみると、白いセーラー服の女の子たちが並んでいた。四台が並んだベッドの一つ当たり二人ずつ、列の先頭から順に下半身だけ裸になって上る。そこで女の子たちは大きく股を開かねばならない。その脚の間で看護婦が下の毛を剃っていた。その後、医者が性器を検査して特別な処置が必要でないことを確認すれば準備は終わる。傷が小さい処置なので、手間をかけずに済ませるため、女の子たちにはあらかじめ下剤が処方されていているから浣腸はない。いつもの通り女の子のうち半分ほどはここですでに泣き出していた。細身の女の子がどうしても自分から脚を開くことができず、看護婦が後ろから膝をつかんで開かせた。女の子は抵抗しなかったが、両手で顔を覆って泣いていた。こういう女の子は好みで、私の胸の内で期待感が膨らんでいく。そんな覗き見も医者がカーテンの中に入ってきたので終わりにしなければならなかった。

最初の一人は両手で顔を覆って泣いていたあの女の子だった。近くで見ると美人の部類ではない。それでも短く切った髪をきちんとセットしてあったし制服も着崩していない。印象は端正で見苦しいところがない。午前中の処置で女の子たちが着ていたような丈の短い緑の服は使わない。制服のまま下半身だけ裸になり、素足にサンダルをつっかけた姿で女の子は台の横に立った。シミーズの裾はへその前で束ねて輪ゴムでとめてある。両手で下腹部を隠してもじもじしている女の子に私は台に乗るようにうながした。いつも最初の一人は手間がかからない、他の女の子の叫び声を聞かされてないから恐怖も多少は少ないからだ。この女の子も素直に台に乗ってくれた。医者とはいえ男なのでそっちに向けて股を開くまではさすがに勇気が出ないらしく、女の子はそこで固まってしまった。私がふくらはぎを持ち上げて大きく脚を広げた姿勢で台に固定すると女の子は両手で股間をしっかり隠し、真っ赤になった顔をそむけて震えていた。特に暴れて抵抗しない限り、上半身は拘束しない。安全のために全身をしっかり拘束することが推奨されているが、現場の事情

ではそれだけ余分な人手をかけるとなると難しい。股間を隠している手を私がつかむと女の子は軽い抵抗をした。私か構わず女の子の腕を頭の上で押さえつけた。両手を台に押しつけているので私はちょうど女の子の顔を上から覗き込むことになる。震えている女の子が涙をいっぱいためた目で不安そうに私を見上げていた。

　医者があらかじめ私が机の上に置いておいた問診票に目を通しながら、ピンセットでアルコールに浸した脱脂綿をつまんだ。同じような動作を毎日のように繰り返すので医者は手元を見ないでも器用にピンセットを動かす。医者は手続きとして最後に女の子の名前を確認するが、緊張と恐怖でいっぱいの女の子たちはほとんど返答いない。カーテンの外で準備する際に確認はしているし、出席番号順に同じ処置をするだけの段取りになっているので問題が起こった事はなく、このときも返答はなかったが医者は構わず仕事を続けた。アルコールで毛を剃られた恥丘から肛門まで先ずきれいに拭う。冷たい脱脂綿が触れた瞬間に女の子の体がピクリと震えた。肛門の近くを拭うのに使ったピンセットは大腸菌の心配があるので別のトレーに置き。用意してあったもう一本のピンセットでヨード液の浸みたガーゼをつまんだ。このガーゼでクリトリスの周囲をごしごし擦るようにして拭く。消毒と同時にクリトリスをほんの少しだけ勃起させてピンセットでつまみやすくするためだ。女の子の股間はヨード液で紫色になっている。

　医者は慣れた手つきで包皮の中からクリトリスの先端をつまみ出した。ここから先はいよいよ痛い。私は押さえつけている女の子の両手にさらにしっかりと体重をかけた。

「くぅ・・・。」

クリトリスが引っ張られると女の子が呻いた。泣き叫んでも当たり前の痛みに女お子は下唇を噛んで耐えていた。細い体は台の上で弓なりになって、ギュッととじた目からは涙が流れていた。

「ぎゃああ！」

クリトリスのハサミで切られて悲鳴が上がった。息もできないよう

な激痛で女の子は目をかっと見開いて凄まじい形相だ。新人のころに私はここで処置が終わったと、ついうっかりと押さえつける力を緩めて失敗したことがある。医者は消毒薬の染みたガーゼを傷口に押し当てた。女の子は狂ったように叫びながら身をよじって逃れようとするが、下半身だけはしっかりと固定されているし、切除するときのように正確さも必要でないからここで暴れられる分に問題はない。ただ、暴れる女の子の両手を押さえつけている私にとっては、汗をかきながらやらねばならない重労働だ。もちろん私の顔がマスクの下で紅潮しているのは力を込めているからだけではない。ぞくぞくと寒気にも似たあやしい感覚に私は小さく身震いした。医者が傷口をガーゼで覆ってそれをテープでとめると、ようやく女の子は暴れるのをやめて泣きだした。カーテンの外が騒がしいのはさっきの悲鳴を聞いたほかの女の子たちの動揺が広がっているからだ。身も世もなく小さな子供のように泣きじゃくっている女の子を私はほとんど抱えるようにして台から下ろす。カーテンを引くとすぐそこに同僚が車イスを用意して待っていた。二人掛かりで女の子を車いすに乗せると次の順番の女の子が連れてこられる。一人当たりにかかる時間は三分にもならない流れ作業だ。

次の女の子は最初からぼろぼろと涙をこぼして泣いていた。男性受けしそうなかわいらしい顔をしているが私の好みではない。泣くにしても健気に耐えようと頑張る女の子のほうが私は好きだ。いずれにしろ、耐え切れる痛みではないから泣き叫ぶのは皆同じだ。私はその制服を少し着崩した女の子をせきたてて台に乗せた。幼児のように顔を擦って泣いている女の子は股間を隠そうともせず、振舞いに慎ましさがない。こういうときならば私はただ仕事をこなすだけだ。獣のような叫び声があがってその女の子の処置も終わった。次の女の子は髪をそぎ切りにして毛先を不揃いにしていた。その女の子が同僚に引っ張られて連れてこられた。これも好みではない。何人か同じような私の好みから外れた女の子が続いた。全身の力で押さえつけるので私はすでに汗だくだ。疲れたら同僚と代わること

もできるが、それはしたくなかった。カーテンの外で列を作っている女の子たちの中に、私の好みがまだいた。

若い女の子たちが泣き叫ぶ姿に興奮しているのだから私はサディストに間違いはない。一方で女の子たちの苦悶を見ると、当然ながら自分が受けた割礼を思い出す。恥ずかしく、死ぬほどの痛みを味わった辛い想い出に胸が痛いほどなのに、例の泣きながらする痛いオナニーの最中に思い出すのはいつもそれだった。台の上に拘束されて狂ったように泣き叫んだ自分を思い出しながら私は言いようのない興奮を覚えていた。サディストが同時にマゾヒストであることはあり得るそうだから、私もおそらくそれなのだろう。そして、女の子が泣くなら誰でもいいというわけではなく、私には好みがあった。純粋に苦痛を与えたり、受けたりすることに興奮するわけではない。私は女の子をセックスの対象に見ていた。男に興味がないわけではなく、いずれは結婚も出産もしたいと思っているから、私はバイセクシャルということになる。この仕事につかなければ、自分でも気付かないまま終わっただろう性癖は他人に隠しておきたいものばかりだった。

自分でカーテンを開けて入ってきた品の良い女の子に私は胸がおどった。この女の子は背が高く整った顔をしているのに派手なところがなく、化粧もしていなければ眉も抜いていなかった。肩にかかるほど長い髪は後ろでまとめて、風呂で使うようなビニールの帽子を被せられていた。女の子は両手で下腹部を隠して医者に向かって一礼した。こんな状況でも振舞いがきちんとしていて育ちの良さが感じられた。それでも胸の内は恐怖と緊張でいっぱいなのだろう、先に外しておくように聞いているはずのメガネがかけっぱなしになっていた。太い黒ぶちの四角いメガネは年頃の女の子にしては無骨なものだった。私に言われてメガネをはずそうとした女の子の指が震えていた。青ざめた顔からメガネをはずしたとき、女の子はそれを手から落としてしまった。そうなるだろうと予想はしていたから、私はそれを床に落ちる前に膝の高さでつかんだ。私が台に乗るよう

に言っても女の子は立ったまま動けないでいた。恐怖で体が言うことを聞かないのは当然のことだ。こういうときは私が背中を押してやる。軽く押して励ますのではなく、強く押してやることだ。ここまで覚悟ができる気丈な女の子なら最初の半歩が踏み出せればあとは自分から台に上ってくれる。思った通り女の子は自分から台に上がった。それから、自分で脚を開き、しっかりと股間を隠していた両手を自分からどけた。死ぬほどの羞恥に女の子は両手を胸の前で握りしめて耐えていた。全く抵抗がないので私の仕事も楽だ。医者が問診票に目を通している間に私は女の子の下半身をしっかりとベルトで拘束した。

　気丈な女の子は名前を確認する医者に震える声で健気にも答えた。私は女の子の両手を取って頭の上で押さえつけた。切除の前の消毒の間、目を閉じて唇を震わせていた女の子がぴくりと動いたのはアルコールの浸みた脱脂綿が股間に触れた瞬間だけだった。女の子の性器は大陰唇がふっくらとよく発育していて、小陰唇のはみ出した部分も少ない。小陰唇のはみ出した部分は一番色素が沈着しやすいのでそれが少ないということはそれだけ性器の色は薄い。世の男たちの偏見とは反対に、よく発達した性器のほうがきれいだ。毛を剃られた恥丘も柔らかそうで私は仕事でなければ手を伸ばして触りたいところだった。そのかわいらしい性器がヨード液で紫色に染まった。薄手のゴム手袋をした医者の手に先端の鋭いピンセットが握られた。先ず医者は右手でピンセットを使い、包皮の中に包まれているクリトリスをつまむ。そのまま左手に持ち替えてクリトリスの先端から半分ほどが包皮の外に出るまで強く引っ張る。色素が沈着しやすい包皮と違い、粘膜でできたクリトリスはきれいなピンク色をしている。特にピンセットでつままれるやわらかい先端は乳白色に近い。ここを硬い金属でつままれるだけで激痛が走る。

「うっ・・・。」

クリトリスを引っ張られて女の子が呻いた。これだけで泣き叫んでもおかしくない苦痛に女の子の額に汗が浮くのが見えた。両手を押

さえつけている私の掌も汗で濡れて、滑らないように私はさらに体重をかけて押さえた。同じ作業を何度も繰り返すので医者の手の動きはスムーズだ。医者はハサミを取り上げて、女の子の苦痛には関心を払う素振りも見せずにピンセットで引っ張られたクリトリスを切った。

「ぎゃあああ！」

この痛みの前にはどんなに忍耐強い女の子でも叫び声をあげる。今まで静かだった女の子も獣のような叫び声をあげて、痛みから逃れようと狂ったように暴れた。下半身は太いベルトでしっかり固定されているので、足首より先の他はびくともしない。背が高いだけに力が強く、私は振りほどかれないように女の子の両腕に体重をかけて台に押しつけた。顔を真っ赤にして涙を流しながら苦悶する女の子に医者は容赦なく傷口の消毒をする。女の子は恐ろしい悲鳴をあげて体が弓なりになった。長く続いた恐怖とこの苦痛で口の中が渇いていたのだろう、叫び声をあげる女の子の息が少し匂った。この清楚な女の子の苦痛がこの匂いになって表れているのだから、もちろん、私はこれが好きだ。

ガーゼで傷口を覆ってそれをテープでとめる医者の手つきも慣れたものだ。私はこの十何秒かで精魂尽き果ててしまったように暴れるのをやめた女の子の拘束をといた。感心するしかないほど気丈な女の子は自分の力で台から降りようとしたが、体が思うように動くはずもなく、転がり落ちそうになるところを私が抱きとめた。女の子の汗が匂い、透明なビニールの帽子の内側は雫がついていた。頭にかいた汗が体温に温められて、それが帽子の内側を濡らしていた。あたしは同僚が用意した車椅子に女の子を乗せ、ぐったりとした女の子にメガネをかけさせてやる。ここで私の体力も限界だった。息があがってしまい、両腕がだるく力が入らない。私は後輩と役目を交代し、別の仕事にかかった。下の毛を剃る仕事を期待したが、それはすでに女の子たち全員が済ませて処置の順番を怯えながら待っていた。私の仕事は女の子が脱いだスカートやショーツなどが入っ

た脱衣籠を当人の手元に届けることだった。慎みのある女の子はショーツを丸めてスカートのポケットにしまってある。だらしなくクロッチの汚れまで見えるような脱ぎ方をしてあるのは大抵が清楚で地味なものではなく、少し背伸びが過ぎた大人向けのショーツだった。列になって順番を待っている女の子たちの半分は恐怖のあまりすすり泣きをしている。その声を聞きながら私は忙しく働いた。交代の時間に少しずれ込んで私の書類整理が終わった。夜勤の同僚たちがすでに出勤してきていた。そのうちの一人がさっきまで掛かってまとめたファイルを書庫に持っていってくれようとしたが、私は断った。帰り支度をする更衣室と同じ階にあるのだからついでだと言ったら、同僚は何も言わなかった。居室の扉は安全のため開けっ放しにしてあるので、廊下を通る私からぐったりとベッドに横になる女の子たちが見える。午前中に割礼を受けた女の子たちで、皆、痛さで隣と話をする元気もない。病室と言わないのは女の子たちが病人ではないからだ。

エレベーターは使わずに一階に降り、私は書庫に入った。窓のない部屋は三方が棚になっていて、インクと紙の臭いがする。プライバシーに関わる書類を置くために、この部屋は内側から鍵がかけられる。私は書類を棚に収め、無骨なスチールドアの鍵をかけた。狭い部屋の中央に書類を探すための長テーブルが置いてある。私はそのとがった角の前に立ち、スカートをたくしあげた。ショーツのクロッチは愛液を吸い、それが体温で乾くのを今日一日繰り返している。裏返せば乾きかけて糊のように粘ついた粘液がべっとりと付いているはずだ。角の先端をショーツの上からクリトリスに当てて、私はゆっくりと腰を落として体重をかけた。自宅に帰るまで我慢ができないとき、私はこれが目当てで書庫に来る。無骨な長テーブルの角は丸くない。すぐに鼻の奥がすっぱくなるような痛みが股間に走った、

「うっ・・・。」

涙がにじんで、うめき声が漏れたが私は構わず体重をかけ続ける。

息がつまるような痛みがしばらく続いて、私はいったん体重をかけるのを緩めた。私の背中が汗でじっとりと濡れて息がはずんでいた。軽く息を整えたら私はすぐにまた体重をかけ、痛みに涙を流す。何度か繰り返すと圧迫された尿道がと熱くなるような、少しに用意に似た感覚が痛み混じるようになる。それが気持ちよくて私は大きくため息をつき体を震わせる。クリトリスの半分ほどと性感の大部分を失っている私の股間がにじみ出た愛液でぬめってきた。あとは長テーブルの角をクリトリスにぐりぐりと押し付け、尿道を圧迫してやるだけだ。痛みで涙を流し、鼻水で顔を濡らしながら私はくねくねと腰を動かした。スチールでできた長テーブルの脚が床を擦って大きな音が出たが、目の前に絶頂が迫っている私は気にしていられない。私は上半身を弓なりにして、最後の強くクリトリスを圧迫した。視界が白け、私は息を詰めて嬌声が漏れるのを押しとどめた。汗にまみれた私の体がずるずると崩れ落ち、テーブルのふちにすがってやっと床に倒れる前にとまった。散々にいたぶられた股間はまだじんじんと痛んでいる。荒い息をしながら私は満たされた気分でいた。

バスのアナウンスが間もなく終点と告げた。夕方の混みあった駅前のロータリーを半周して、バスが止まる。乗車口で機械から出てくる整理券の番号と電光掲示板に出る料金表を見比べて運賃を払う方式だが、いつも使っている路線なので絵里の手の中には既に必要な小銭が握られている。東京駅から出た特急はこの駅を過ぎると各駅停車に変わる。つまりは田舎の駅だが、朝夕の短い時間帯だけは人混みができる。バスを降りた絵里は駅のロータリーの入り口まで少し戻った。そこから狭い舗装もされていない小路に入って少し行くと、軍医上がりだった先代が死んでから、二代目の古田という医者が一人でやっている小さな医院がある。看板は皮膚科と内科だが、要は地元の風邪ひきなどが通勤通学のついでに寄っていくところだ。そういうわけで、二階建ての建物は医者の古田の自宅も兼ねていて、診療も朝早くからやっている。絵里は小走りで急ぐので量の多い髪を一本にまとめた三つ編みがぽんぽんと揺れた。

四月の夕暮れはまだ寒く、コートを着ている人も多いが、医院の前まで走った絵里は汗をかいていた。急いだのには理由がある。これからこの医院で絵里は割礼を受けねばならない。知り合いに会ってこれからどこに行くかなど聞かれたくなかった。校則で切除しなければならないとされているのはクリトリスの全部だ。体の外に出ている部分だけではなく、根のように埋まっている神経が二股に分かれる部分まで切除することになっている。クリトリスの一部だけを切除したのでは、強く圧迫したときなど、快感を得ることもある。自慰防止にそれでは不十分というわけだ。大変に苛酷な仕打ちだが絵里は学校の保健室で処置された同級生たちほどの恐怖は感じていない。ここの医者と裏取引があり、処置の前に麻酔を使ってくれることになっていた。絵里が心配しているのはむしろその裏取引の対

価の方だ。高校生になったばかりの絵里だから無論、金銭ではない。具体的になにをするかまで詳しく聞いていなかったが、ニュースなどでいかがわしい悪戯などとぼかした言葉で言われるそれだとは分かっていた。

裏取引が成立するのは少しさかのぼって三月の末のことだ。入学式に先だって新入生の女子だけが朝から学校に集められていた。心電図などの健康診断はすでに済ませてあるので、この日は簡単な問診の後で体温などの確認をし、特に事情がなければ割礼という予定だった。その日は朝から割礼に必要な機材を一式そろえたトレーラーが校庭に並んでいた。配られたばかりの体操服とブルマの上から、これも学校指定で学年ごとに色の違うジャージを着て絵里たちは順番を待った。絵里たちの学年のジャージは青虫のような緑色だった。保健室の中カーテンでクラスの数だけ仕切られ、出席番号の若い生徒から簡単な診察を受ける。聴診器をあてられ問題がなければ、別室で浣腸をしてきれいに便を出し切った後、トレーラーに連れて行かれることになる。

保健室の仕切りの外側で列になって順番を待っていた絵里たちに校庭から絞殺される獣のような叫び声が聞こえた。それも一度きりでなく、たて続けに恐ろしい悲鳴があがった。すでに最初の生徒が麻酔なしにクリトリスにメスを入れられていた。順番を待つ絵里たちの動揺が広がって、保健室の中がざわついた。

「静かに！痛いのは普通のことです！列を崩さないで。」

一年生の学年主任だという白髪交じりの髪を結った教師が生徒たちを叱りつけた。血色がよくない薄い唇の爬虫類のような女と絵里は思った。これからの学校生活を楽しくしてくれる相手でないことは間違いなかった。校庭に停めてあるトレーラーの中から校庭を通って、閉められた保健室の窓越しにはっきりと聞こえるのだから、悲鳴は凄まじい。その声が聞こえるたびに絵里の全身に鳥肌が立ち、背中を冷たい汗が流れた。

時間は無慈悲で絵里の前に並んでいた生徒はもういない。学年主

任が怖い顔で睨んでいるせいもあって、生徒たちは恐怖で真っ青な顔をしていても列を崩さない。名前を呼ばれた絵里は前に出るしかない。後ろには順番待ちの列があってどこにも逃げ場はないからだ。カーテンの衝立で仕切られた中にいたのが古田だった。登校前に風邪薬などを処方してもらうこともあるから、絵里と同じ駅を使う生徒ならこの医者の顔くらいは知っている。古田が軽く右手をあげたので反射的に絵里が会釈した。

「よろしくお願いします。」

絵里の声が上ずってしまった。事前に生活指導の担当からきちんとした挨拶をするように言いつけられていても、ほとんどの生徒は恐怖で声もない。年に何度か通う程度なのに、様子からして古田は絵里のことを覚えているようだった。相手が男で自分を知っているとなると恥ずかしさも増す。

絵里はジャージの上着を脱いで籠に入れ、古田の前に向きあって座った。感情を押し殺して絵里は体操服の裾をまくった。ブラジャーはそっけない白で頭からかぶるスポーツ用だった。見られることは分かっていたので、少しでも恥ずかしくないそっけないものをあえて選んできた。そうしている間にも恐ろしい悲鳴は聞こえてくる。古田の顔が今にも舌なめずりしそうなことに青ざめた絵里が気付くはずもなかった。こういう下着にかえってそそられる男も多いことを絵里はまだ知らなかった。隣に立っている看護婦がブラジャーもまくりあげるように言った。あいては医者で、いちいち女の体になど興味は持たないと自分に言い聞かせ、絵里はブラジャーをまくった。白く小ぶりな乳房の上に、まだ色素の沈着していない陥没した乳首が乗っていた。胸と背中に聴診器をあてられ、絵里は体操服の裾をジャージのズボンにしまいながら古田と向き直った。

古田は問診票に目を通している古田が確認のためにもう一度、口頭で絵里に聞く。

「昨日の晩はよく眠れた？」

古田が問診表から目を離さずに言った。

「はい・・・。」
絵里の返事が消え入りそうになってしまったのは長い緊張で口の中が渇いて粘ついていると気付いたからだ。清潔には気を使っていても、こうなっては誰でも口臭がする。小さすぎる声で古田には聞き取れなかったらしいので絵里は首を縦に小さく振った。
「いやぁ！お母さん！お母さん！」
校庭で泣き叫んでいる声には聞きおぼえがあった。同じ中学でクラスも同じになったことがある。男子と喧嘩になってもそう簡単には折れない気の強い同級生だった。校庭で男の怒鳴る声がして、泣き叫ぶ声は遠くなっていった。誰かがトレーラーまで腕ずくで引きずっていったらしい。絵里の背筋が寒くなり、傍で見ていて分かるくらい膝が震えた。小学校で最初の担任が体罰が好きで、ひどく粗暴な男だったせいで、いまだに絵里は男が怒鳴る声に身がすくんでしまう。校庭からどなり声が聞こえただけで、現場を見たわけではないが今の絵里にはこたえた。絵里は震えるばかりで古田の質問に答えるどころではない。
古田が絵里の顔を覗き込んだ。
「体調が良くないみたいだけど、熱っぽくはない？」
今までうなずけば異常なしと判断される質問の仕方だったが、ここで古田の質問の仕方が変わった。今日のうちに予定通り割礼を済ませるなら、首を横に振らなければならない。古田は身を乗り出して顔と顔との距離が近い。
「ぎゃああ！」
また、すさまじい悲鳴が聞こえた。誰の声かどころか人間の声かどうかさえ事情を知らなければ分からないような叫び声だ。絵里は思わず古田の質問にうなずいてしまった。もう絵里にはこの恐怖から逃れることしか考えられない。後日に割礼となるだけで恐怖が長引くだけとも、そもそもこの医者にこんな嘘が通じるかどうかさえ絵里には考えられなかった。
「ああ、そう。じゃあ、別の日に予約をとるからまた後で。」

絵里がきょとんとするくらい呆気なく嘘が通じた。隣にいた看護婦までいぶかしげな顔をしている。それでも医者がそう判断した以上、今日の割礼は延期になった。四十がらみの古田のしわの多い目じりが少し下がったのを誰も気づかなかった。

　全員の割礼が終わるまで絵里はどこかで時間をつぶさなければならない。割礼される親友生たちの悲鳴を聞かなくて済むように音楽室か視聴覚室と思ったが、初めて来る校舎なのでなかなかその部屋が見つからず、何度も同じ廊下を往復することになった。保健室の隣で診察を終えた生徒から浣腸を受ける。近くにある一階のトイレは特別に解放された男子用まで満員で、順番を待つ列が廊下にまで伸びていた。真っ青な顔で別の階のトイレに急ぐ生徒に絵里は何度かぶつかりそうになった。嘘をついて皆が耐えている通過儀礼を先延ばしにしてしまった絵里にはなんとも気まずかった。結局、音楽室も視聴覚室も春休み中ということで鍵がかけられていた。絵里は屋上へ続く階段の冷たいビニールタイルの上に座って、時間が経つのを待つしかなかった。

　夕方といってもまだ明るいうちに校庭から悲鳴が聞こえなくなった。絵里は座っていた階段から三階へ降りて、各位階の廊下の恥にある時計を見た。古田の言った時刻までもうすぐだ。今日の集団の処置を受けられなかったものは、各人で学校が指定する医療機関で皆と同じ処置を受けることに決まっている。指定する医療機関というのは地元の病院で、今日の割礼に医師を派遣しているところだ。春休みが終わるまでにクリトリスは切り落とされねばならない。絵里は保健室に戻って病院の予約を手続きしなければならなかった。廊下を歩くとまだ便の臭気が残っていた、学級が五つある親友性の女子全員が浣腸をされて次々にトイレを使うのだから、いくら扉があっても臭いは漏れる。途中で絵里はモップで床を拭いている女子生徒を見た。クラスごとの当番で春休み中も登校している上級生がった。トイレまでもたずに漏らしてしまう生徒がやはりいた。漏らしてしまった当人は恥ずかしくて泣いても泣き切れないはずだ。

保健室に行くと医者の古田が一人でいた。他の病院のスタッフも生徒もいない。絵里は時間を間違えたかと思ったが、古田が気安そうに右手をあげたのでそのまま後ろ手に扉を閉め、古田が指さす椅子に座った。

「絵里ちゃんだったね。予約は学校が始まってからになっちゃうんだけど、この金曜日でいいかな。」

名字ではなく名前をちゃん付けで呼ばれるとは思わなかったから、絵里は面食らった。

「いいえ、その、春休み中という決まりで・・・。」

気を取り直して絵里は答える。こんな気の進まない手続きはさっさと済ませたかったから、呼び方など気にしていられない。

「大丈夫、予約がいっぱいってことで学校には話をつけられるから。じゃあ、予約を取るからね。うちの場所は分かるよね。」

古田が軽く言う。古田がやっている小さな医院より、地元の病院の方がなんとなく信用が置けるし、校則でもそう決まっていた。絵里が言い返そうとするより早く古田が勝手に説明を始めた。あの医院は法人として独立しているわけでなく、地元の病院の一部門という扱いなのだと古田は言った。お宅の医院では不安ですとは言えず、絵里は言葉に詰まってしまった。体の中でも特に敏感な部分を麻酔なしで切られるというのに、それがどれだけの恐怖と不安かこの男には分かっていないのだと、絵里は苛立たしかった。

保健室で向かい合って座った絵里と古田が黙ってしまった。なんとか地元の病院の方に回してもらおうと、理由を考えていた絵里に古田の方から切り出した。

「ねえ、ぶっちゃけて、今日のアレは嘘でしょ。」

古田の言葉に絵里の心拍数が一気に跳ね上がる。絵里が何か言おうとするより早く古田が続けた。

「まあ、怖いのは仕方ないよ。それでね、ものは相談だけど、うちで割礼するなら麻酔を使ってあげることはできるよ。」

仮病を見破られていたと、ぎくりとさせられた後の意外な申し出に

絵里は戸惑った。絵里は混乱した頭で何とか考えた。麻酔を使ってしまったら公庫から費用が下りないのだ。そもそも校則違反で、割礼を受けた証明書には証拠が残ってしまう。
「まあまあ、一回分の麻酔くらい落として割ったことにでもすれば、帳簿はつけられるんだよ。ちょっと頼みごとを聞いてくれればね。深刻に考えないで、本番はしないから。」
言いながら絵里の顔を覗き込む古田の目じりが下がっていた。薄ら笑いを浮かべたその顔はいかにも気味が悪く、絵里は思わず目をそらした。本番というのがセックスのことを指すくらいなら知識のない絵里にも分かる。頼みごとの内容は金銭ではなく、体を弄らせろということだ。おぞましさに鳥肌が立ったが、絵里は即座に断れなかった。麻酔、それもごく簡単な局部麻酔でクリトリスを切られる激痛に泣き叫ばなくて済む。何週間も前から頭を離れなかった恐怖も半減する。古田は何も言わなかったがじっと絵里の目を見て決断を即していた。絵里も古田を見る。古田は痩せたつやのない中年で暴力的で威圧的な印象は受けない。古田に撫でまわされることを想像しただけで気味が悪かったが、絵里は一時の辛抱と割り切ることにした。痩せて弱々しく粗暴そうではない古田ならさほど酷いことはしないと絵里は多少無理に楽観することにした。
取引が成立して古田は満足そうに絵里に割礼をする日時を手帳に書き込んだ。話が済んだのなら絵里は一刻も早くここを立ち去りたかった。緑色のジャージのまま帰るのも難なので、更衣室に寄る時間もあり、早くしないと家に帰る前に暗くなってしまう。
「じゃあ、手付ってことで一個だけお願を聞いてもらおうかな。」
椅子から立ち上がった絵里に古田が言った。絵里は背筋が寒くなった。何をされるかと絵里が身を硬くしていると、古田はただそこに立っていればいいと言った。古田に命じられたのは脚を肩幅に開くことと、なぜかかかとをつま先より開いて足を八の字にすることだった。体育の時間に休めの号令がかかったときと逆の足の置き方だ。絵里服の上から触られるだけなら絵里もどうにか我慢できそうだ。絵里

は唇を噛んで、古田の言いつけ通りに何をされてもじっと耐える覚悟を決めた。
　目をつぶって微かに震えている絵里は古田が椅子から立ち上がる音でびくりとした。何度か遭ったことがある痴漢のように、最初は胸か尻をつかんでくると息をつめていたが、絵里は太腿を撫でまわす古田の手を感じた。いやらしい動きでさわさわと撫でまわされる気味悪さに、鳥肌がたった絵里の背中を冷たい汗が流れた。次に何をされるか分からない怖さに耐えられなくなり、絵里はそっと薄目を開けた。
「ひゃ！」
絵里が悲鳴をあげて、思わず後ろに一歩下がってしまったのは古田が自分の前で跪いていたからだ。古田の顔が絵里の股のすぐ下にあった。
「動かないって約束だよ。」
ねっとりとした口調だった。古田は逆らっても得にならないと絵里を言外に脅している。いくらひ弱そうな中年でも、腕力を振るわれることを考えるとやはり恐ろしい。絵里は目じりに涙を浮かべながら一歩前に出て、本のように足を開いた。胸の前で握りしめた絵里の両手が震えていた。
　古田は目をぎらつかせて小さく舌なめずりすると、絵里の股に鼻面を突っ込んだ。絵里は下着とブルマ、その上からジャージを穿いて、股間は今朝のうちにシャワーで念入りに洗っておいた。それでも、今日一日はずいぶん冷や汗を流したし、トイレにも何度か行った。重ね履きをしているせいで股間は蒸れていた。古田の息を股間に感じて絵里の目じりから涙が落ちる。自分でも臭いと分かっている股間を鼻を鳴らして嗅がれて絵里は恥ずかしさで耳まで真っ赤になってしまった。
「あの・・、先生、汚いです・・・。」
消え入りそうな声でやっと絵里が言った。古田は股間を嗅ぐのをやめない。それからしばらく、絵里にとっては何時間にも感じるほど

たっぷりと時間をかけて鼻が慣れてしまうまで、古田は絵里の股間を嗅いだ。

「いい匂いだね。やっぱりかわいい子は甘酸っぱいにおいがするよ。」

はずんだ息をしながら緩みきった顔で古田が言った。

「嘘です・・・。」

絵里は俯いて力なく否定するのがやっとだった。古田が立ち上がって絵里の手をつかんだ。これから古田が本当にいい匂いだった証拠を見せるというのだ。古田は絵里の手を引っ張って白衣の裾に入れた。

「きゃああ！」

ズボンの上からだが、手の甲に勃起した硬い男根の感触があった。悲鳴をあげて逃れようとする絵里の手をしっかりつかんで古田は自分の股間に押しつけた。見た目より古田の力は強く、絵里が必死に抵抗してもびくともしない。

絵里の反応を面白がっていた古田が唐突に手を離した。バランスを失った絵里は床に倒れてしまう。

「さあ、今日のところは可哀そうだから、次ので終わりにしよう。」

古田の猫なで声がかえって恐ろしかった。絵里が全力で振りほどこうとする手を古田は片手で悠々と押さえた。この腕力が暴力になるのが絵里には何により恐ろしい。絵里は幼児のように顔をこすって泣きながら立ち上がりまた足を開いた。今度は古田が後ろに回った。首筋にかかる口臭のある息が絵里はおぞましかった。古田の手がジャージの中に差し入れられ、ブルマとショーツの下の汗ばんだ尻を撫でた。絵里は電車の中で遭った痴漢に同じことをされたことがある。下唇を噛んで絵里は早くこの仕打ちが終わってくれることを願った。絵里の願いは通じず、古田は手を縦にして、中指を尻の割れ目に沿わせた。その指がもそもそと尻たぶの間に割り込もうとするので絵里はとっさに阻止しようとした。

「動かない。」

古田が先を読んでいたように耳元でねっとりと言い、絵里はすくんでしまった。
かかとをつま先より開く奇妙な立ち方をさせた理由が絵里に分かった。尻たぶに力を入れて割り込んでくる指を止めようっとしても、十分に力が入らない。古田の指がたまった汗でぬめる絵里の尻の割れ目に挟まった。そこから古田の指が下がって中指が肛門に触れた。背筋をぞっと冷たいものがはしり、絵里はその場でへたり込んでしまうところだったが、古田が後ろから腕をまわして抱きとめた。古田は中指の腹で絵里の肛門をこね回した。指の腹で押したりこねたりされている肛門からわずかに汁がにじむ、それが汗と混じって古田の指がぬめぬめとよく滑った。腕の中でびくびくと痙攣する絵里の反応を楽しみながら古田はしつこく肛門をいじった。古田は最後に中指を第一関節まで肛門に押し込んだ。痛みこそなかったが、絵里は寒気と吐き気がした。
「げふぅ・・・。」
悲鳴の代わりに出たのは胃の中の空気だった。おう吐せずに済んだのは割礼の前の準備として、事前の指示通りに朝から何も食べてなかったからだ
「うん、かわいい子はげっぷをしてもいい匂いだね。」
古田が鼻を鳴らしながら言ってようやく絵里を解放した。
後ろから抱いて体重を支えていた腕を解かれて絵里は床にへたり込んだ。一刻も早くここから逃げたい絵里は床に座ったままジャージの裾を直し、震える膝で何とか立ち上がった。その絵里がその場で固まってしまったのは、古田がさっきまで自分の肛門をいじりまわしていた指を恍惚とした顔で嗅いでいたからだ。
「それじゃあ、学校が始まって最初の金曜日だよ。帰りに寄りなさい。それから、朝から水分以外はとらないでね。最後にこれ、下剤だけど学校が終わったら飲んでおいて。」
古田は錠剤が入った小さなビニール袋を指でつまんでぶらぶらさせながら言った。古田が嗅いでいた指を口に入れてしゃぶるのを見た

とき、絵里は錠剤をひったくって逃げだした。すでに夕方も遅い時間で、廊下でだれとも会わなかったのが幸いだった。泣きながら廊下を走って何度も転ぶ絵里の様子は誰が見ても尋常ではない。

今日の診察は終了したと札のかかっている入口の前で絵里は何度か深呼吸をしてから扉を押した。先代から務めているという看護婦が一人、患者のための靴箱を掃除していた。短い白髪交じりの髪に強くパーマをかけた無愛想な看護婦はハンドクリーナーの電源も切らずに絵里に奥の診察室に行くように言った。状況からしてこの看護婦も事情を知っているに違いなかった。古田と裏取引をしてここに来るまで二週間ほど、絵里がためらわなかったわけではない。前払いとして古田がしたことで、この医者の性癖が普通とは違うことくらい絵里にも分かっていた。高校一年生になったばかりの普通の少女から見れば変態の部類だった。その変態にもう一度体を触らせるおぞましさを思うと、いっそ裏取引を破棄しようかと絵里は何度も考えた。図書室で局部麻酔について調べてみたら、特殊なものを除いて一本当たり千円もしなかった。たったそれだけの事のためにこんな仕打ちを受ける自分の身が惨めで、絵里は涙が出る思いだった。

診察室の扉の前で絵里は古田と鉢合わせた。古田はなれなれしく絵里の腰に手をまわして診察室に連れ込んだ。古田の顔がいやらしく緩んでいて、絵里はせめてもの抵抗で顔をそむけた。

「やあ、久しぶりだね。絵里ちゃん。」

相変わらず古田の口ぶりはなれなれしい。診察室も入ってすぐに、絵里が顔をそむけた方にもう一つ扉があった。スチール製の気密が良さそうな扉が二重になっていていた、ドアの一部がガラス窓になっているのは緊急時に外から様子が見えるためだろう。絵里の位置からその窓越しに割礼に使う台が見えた。分娩台と形はほぼ同じその台には全身を拘束する太いベルトがいくつも付いていて、処刑用の器具のような印象を受ける。喜色面々の古田が椅子をすすめたの

で、仕方なく絵里は古田と膝を突き合わせて座った。うつむいた絵里の顔を古田が覗き込もうとしたので、絵里は顔をそらした。
「絵里ちゃんにはあの部屋は使わないよ。」
古田が言った。どうしても気になって絵里がちらちらと横目でそのスチールの扉の方を見ていたのを古田は気がついていた。古田が指さした先は処置室で、この診察室とはカーテンで仕切られているだけだ。軽い怪我で絵里も入ったことがあり、確かに割礼に使う台があった。
割礼が事実上の義務になってもその方法に統一された基準があるわけではない。どの部分をどこまで切り取るかは学校ごとの校則で決まる。絵里の場合、クリトリスの体内に埋もれている根の部分まで全てだ。そして、その手順については医療機関もしくは医師の裁量に任されている。割礼と通称されている女子の性器切除をどの診療科が担当するかで学会が割れているため、ある病院では泌尿器科が担当し、別の病院では外科が担当するという事態が起きている。この医院の看板は内科と皮膚科だ。そういうわけで、例えば同じクリトリスの切除でも医療機関と学校の方針の違いから、本格的な手術室を使い入院をする場合と、学校の保健室で済ませてそのまま帰す場合がある。安全に切除を行うため、学会ごとに細部に違いはあるものの大筋で同じような指針は示されているが、このような事情で守られることは少なかった。大量出血や感染症など事故が起こるたびに学校と医療機関に批判が集中するが、割礼そのものの是非を問う者は少数派だ。
古田が向かい合って座った絵里のスカートの裾をつまんだ。絵里はとっさにスカートを抑えようとした両手を胸の前で握って、古田がスカートを少しまくった。こういうことをされると分かっていたから、絵里も学校を出る前に新品のショーツにはき替えてある。スポーツ用の白一色のそっけないものだ。ひざ丈のスカートをまくって覗き込んだ古田が舌なめずりをした。
「あんまり、汗の臭いがしないね？今日の体育は持久走じゃなかっ

た？」
古田の言葉に、うつむいて恥ずかしさをこらえるのに必死だった絵里が動転した。確かに古田の言う通りで、この医者は自分の時間割まで調べてあるのかと、絵里は寒気がした。今日は見学だったと嘘をつこうとした絵里だったが、古田の方が早かった。
「カバンを開けてくれるよね？」
古田は猫なで声だった。こうなってしまっては絵里には逆らいようがない。いまさら取引を反故にできないし、逆らった後に古田がどうするか想像したくなかった。カバンの中にはノートや他の持ち物に臭いが映らないようにビニールのきんちゃく袋に入った体操服と下着などが入っている。体育を担当する教師が厳しいので、その体操服などはたっぷりと汗を吸って濡れていた。
絵里は診察室にある机の上に立たされた。カルテを作る机とは別で、上には何も置いていない。普段は書類などを置いてあるが、古田がわざわざ片付けてあった。キャスターのついた椅子に座ったまま古田が足元にやってきた。古田がスカートの中を覗き込んでも絵里は抵抗しない。これからもっと恥ずかしい仕打ちが待っているのは分かっているのだから、下手に逆らわない方が得だからだ。古田はきんちゃく袋を開けて、中の汗を吸った下着と体操服を着るように言った。絵里がきんちゃく袋のひもを緩めると、蒸れた汗の臭いがした。自分の汗の臭いでこれだから、古田にはもっと臭っているはずでこれを着て体を嗅ぎまわされることを想像しただけで顔が火照った。古田がそういう臭いが好きなのは分かっていた。先ず絵里は制服の上着から脱いで体操服に着替えた。汗の染みた木綿の生地はひんやりと冷たかった。机の上で着替えるのはショーをやらされているようで、下から見上げる古田の視線が気になり絵里の恥ずかしさも増す。なるべく裸を見せたくないので、その体操服を着たまま腕を抜いて絵里は器用にブラジャーを外したが、次は汗の染みた方のブラジャーを着けねばならない。何とか着たままでやれると絵里は思ったが、汗で濡れた生地は滑らず、しばらく机の上で身をよ

じらせた後で、結局は体操服を脱いでブラジャーを着けることになった。体の中では特に見せたくないと絵里が思っている陥没した乳首を古田に見せることになった。その絵里の様子を古田が見上げてにやにやと笑っていた。

絵里がスカートを履いたままショーツを履き替えてしまおうと、スカートの中に手を入れた。ショーツを下ろして足から抜いてスカートのポケットにしまうところで古田の注文が入った。

「さあ、絵里ちゃんのお股に当たっていたところを見せてもらおうかな。」

古田が両手でパンツを広げる動作をしながら言った。脚を通すところから手を入れて、古田に向かってクロッチの内側が見えるように自分で開いて見せろというのだ。白一色の素っ気ないスポーツ用のショーツを握ったまま絵里が固まってしまった。古田が急かしたが絵里はすぐに決心がつかない。古田が苛立ったように机をとんとんと叩いて遂に絵里が自分からクロッチの染みを見せた。古田は絵里の羞恥を楽しんでいて、苛立った様子はわざとらしい演技にすぎない。それでも絵里には効いたのは男の苛立った様子や怒声に声に強い恐怖心があるからだ。絵里が学校に上がって最初の担任が小学校では少ない男だった。粗暴な男で些細なことで腹を立てては平手打ちをした。弱い者いじめは仕返しもできない方に責任があるのだと、被害に遭っていた女子児童を折檻して問題になったこともあった。結局、学校の圧力で被害に遭った児童の両親が折れてしまったため、その男の素行が改まることはなかった。大学では体育系だったという男の腕力で張られては小さな絵里の体は飛ばされてしまう。顔を腫らして帰っても両親は何もしてくれなかった。学校や教育委員会は当てにならず、担任と直に話をつけるには当の両親がその腕力を恐れていた。学級の空気は殺伐とし、絵里は低学年の二年間をひたすら目立たないことだけを心掛けて息を殺すようにして過ごした。今になっても男が大きな声で怒鳴ると身がすくんでしまう。

目尻に涙をためて絵里がショーツを広げて突き出した。古田が首

を伸ばして手招きをして、そこでは遠いと言った。仕方なく絵里は机の上にぺたりと尻と付いて古田の鼻先にクロッチが来るように突き出した。部屋は暖房で暖められていたが、ショーツなしでスカート一枚だけの尻に樹脂製の机の上が冷たかった。絵里は真っ赤に染まった顔をそむけて震えている。学校を出る前に新品に履き替えたというのにクロッチにはうっすらと染みがついていた。新陳代謝が活発な年頃だけに汚れも付きやすい。それに、ここに来るまで知り合いに会いたくないと少し走ったのでショーツは汗も吸っていた。それを古田が目を細めて嗅いでいる。顔をそむけたまま横目でその様を見た絵里は寒気がしてぎゅっと目を閉じた。古田が絵里の手からショーツを取り上げて鼻に押しつけて嗅ぎながら、汗のたくさん染みた方のショーツとブルマを履くように言った。仕方なく、絵里は今まで履いていたのと形は全く同じショーツを取り出した。体育用に同じ物をまとめて買っておいた下着だった。絞れば水滴が落ちるほど汗の染みたショーツは冷たく気持ち悪かったが絵里は黙って従った。スカートを履いたまま下半身を隠して着替えても古田が何も注文をつけなかったのはこれから好きなだけ絵里の股間を見て弄れるからだ。

「それじゃ、そろそろ浣腸をしようかな。」

古田が診察用の寝台を指さして言った。

「あの下剤を飲んでいて・・・。」

絵里は言った。嘘ではない。最後のホームルームが終わってすぐ、掃除当番を適当な理由をつけて代わってもらい、絵里は古田から渡された下剤を飲んだ。

「出なかったでしょ。」

古田が事もなげに言った。その通りで、いつまで待っても便意はなく、絵里バスに乗った後で急に腹が下ったらどうしようかと心配しながらここに来た。古田が言うにはただの胃薬だったらしい。

「自分で下剤を飲まれちゃうと浣腸が楽しくないんだよね。やっぱり、可愛い子がウンチをするところは滅多に見られないからね。」

絵里を手の内で弄んで古田は愉快そうだ。大便をするところを見たいなど古田の性癖は絵里の理解の外だ。青ざめた絵里に古田は机の上に寝るように言った。
浣腸の前に絵里の体を嗅いで舐めまわす気だった。
　机の上で絵里は古田にされるがままになっていた。着たときはひんやりと冷たかった濡れた体操服も体温で温まって、自分で分かるほど汗が臭っている。仰向けに寝かせた絵里に両手を上げさせ、古田は腋の下に顔をうずめて鼻を鳴らした。そのあと、古田は半袖の体操服の袖口を引っ張り、腋の下を直に嗅いでからべろりと大きく舐めた。
「ひぃ！」
着物悪い滑った感触に絵里が思わずかすれた声をあげた。
「ねえ、医者なんかやってると女の子の体なんて見慣れてると思うでしょ。でもね、可愛い子をたっぷり触れることなんてめったにないんだよ。」
乳房をもみながら言う古田の息が弾んで興奮しているのがはっきりと分かった。もう片方の腋も汗の塩味が無くなるまで舐めて、古田は絵里をうつ伏せにした。祖もまま絵里に軽く脚を開かせ、古田はブルマの上から尻たぶの間に顔をうずめた。肛門あたりに古田が臭いをかぐ息を感じて絵里は震えながら羞恥に耐えた。絵里は早く終わってほしいと思っていたが、これからされる浣腸はもっと嫌だった。他人に排泄するところを見られるなら、この恥ずかしさの方がまだ耐えられると絵里は思った。古田が無情にもブルマとショーツを一緒に下ろしたのでいよいよ浣腸をされるのだと、絵里はついに耐え切れず嗚咽を漏らした。
　絵里は靴下まで脱がされて下半身を裸にされ、机の上でぺたりと座っていた。その横で古田が絵里からはぎ取ったブルマを裏返して嗅いだり、ショーツのクロッチについた汚れを舐めたりしていた。絵里はなるべく古田の様子を見ないように顔を背けて俯いている。それでも、古田の興奮した息遣いが聞こえ、絵里はいたたまれない。

もう一つ絵里が耐えがたいのは例の看護婦が入ってきて浣腸の用意をしていることだ。あの看護婦が事情を知っているくらい分かっていたが、こんな姿を見られるのは一人でも少ない方がよかった。浣腸と剃毛の道具を机の端に置いて看護婦はさっさと出て行った。なにか事情があって見て見ぬふりをしているが、古田のやっていることを不快に思ってはいるようだ。四つ這いにさせた絵里に尻を突き出させて、古田は浣腸にかかる。ワセリンを使う代わりに薄いすみれ色の肛門を古田はじっくりと舐めた。絵里は体に力が入って浣腸機を突き立てられた時肛門に鋭い痛みが走った。絵里がすすり泣いていても古田は斟酌せず、四回に分けて浣腸をした。冷たい浣腸液が注ぎ込まれて絵里の白い尻に鳥肌が立っていた。グリセリンを薄めた通常の浣腸液ではなく、ただの真水で量は必要の三倍はあった。絵里が便意に耐える様を古田は楽しもうとしていた。絵里が下腹部を押さえて苦しそうに呻きはじめた。

　机の上で絵里は古田に向かって大きく脚を広げて座っていた。こんな恰好を白と言われて絵里は泣いて許しを求めた。

「先にトイレに行かせてください。」

絵里は便意に耐えながら懇願した。古田は先に剃毛を済ませないとトイレには行かせないと譲らず、仕方なく絵里は股を開いた。古田のことだからトイレの中までついてくるに違いないが、ここで漏らしてしまうのはもっと恥ずかしい。古田はすぐに剃毛にかからず絵里の股間に鼻を近づけて匂いを嗅ぎ、そこを舐めた。

「しょっぱいね。おしっこの味がする。」

古田の言葉に絵里は顔を両手で覆った。古田は絵里が顔を隠すのを許さなかった。古田は絵里に足を開いて座り、両手を後ろについて体重を支え、股間を前に突き出す姿勢を取らせた。剃りにくい体制では剃刀で余計なところを傷つけてしまうかもと脅されて絵里は逆らえない。真っ赤に染まった絵里の頬を涙が濡らしていた。古田はしつこく絵里の股間を舐めた。気味が悪いだけだがはじめて性器を舐められた絵里の背筋にぞわぞわと寒気に似た感覚があった。快感

とはほど遠いが刺激が与えられればクリトリスが多少は勃起する。古田はその半分ほど勃起したクリトリスの皮をむいて強く吸った。息んだ拍子に便を漏らしそうになり、絵里はどっと冷や汗をかいた。

剃毛は簡単だった。絵里の陰毛は薄く、五百円玉ほどの範囲にしか生えていないので、ローションを塗って二回ほど安全剃刀を往復させるだけできれいに剃りおとされてしまった。もちろん、大陰唇や肛門のまわりに毛はない。絵里の小陰唇がやや黒ずんでしまっているのは性器の発育がいいからではない。むしろ自慰の習慣がない絵里の性器は大陰唇の発育が不十分でその分だけ小陰唇がはみ出してしまっていた。小陰唇のはみ出した部分は下着などにこすれて色素が沈着しやすい。

「先生、あの、トイレに・・・。」

古田が悠々と急いだ様子もなく股間のローションを拭っているので絵里は恐る恐る聞いた。気を抜けばすぐに肛門から軟便が吹き出してしまいそうだった。古田が机の下からホーローの容器を取り出して蓋を取った。オマルと言えばアヒルの形をした幼児用しか思い浮かばない絵里はようやくこの机の上で排泄白という意味だと分かった。

「はい、おトイレだよ。きれいに全部出し切ってね。」

古田は楽しそうだった。

「許してください、トイレに行かせてください！」

絵里が悲痛に叫んでも古田は首を横に振った。絵里は泣きながらオマルをまたいでしゃがんだ。絵里がこのまま便をぶちまけてしまったらあの看護婦が掃除をすることになるはずで、自分の汚いものを他人に始末させる恥ずかしさは耐えられない。

机の上のオマルをまたいで息んでもすぐには便が出なかった。絵里は出先の慣れないトイレでも落ち着かずうまく排泄できないときがある。ましてやここはトイレではなく、古田が身をかがめて股間を覗き込んでいた。古田の目の高さが絵里の肛門より低い。すぐに

でも排泄してこの苦しさから逃れたいのに恥ずかしさと緊張のせいでなかなか便は出ない。いくら息をしても息苦しく目眩がし、絵里の気管がぜいぜいと鳴った。それでも、括約筋の限界はきた。絵里は肛門がじわっと熱くなるのを感じ、そのすぐ後に茶色く染まった水が勢いよく噴き出た。

「見ないで！見ないでください！」

絵里は両膝を抱えてしゃがんだまま叫んだ、小さな背中を丸めて絵里は震えていた。肛門から噴き出た水はすぐに止まってしまい、次に派手な音を立てて、空気が漏れた。浣腸をするときに古田がわざと空気を入れたせいだ。絵里は両手で耳をふさいでむせび泣いた。また短く肛門から水が噴き出してついにふやけた便が出た。古田が見ている前で絵里の肛門が盛り上がり、軟便が一気にオマルに落ちた。空気は圧力が加われば縮むので排泄しようと息んでもなかなか出ない。古田が浣腸器に入れた空気のせいで絵里は長く苦しまねばならなかった。何度も息んでようやく肛門から出ると空気を含んだそれは大きな音を立てた。汗を流して泣きながら長い時間をかけてようやく絵里の排泄が終わった。古田が絵里の肛門を拭いその汚れた蒸しタオルを嗅いだ。それを見ている絵里のめは虚ろだった。

精根尽き果ててしまった絵里を古田は少し休ませた。ぼんやりとしていた頭がはっきりしてくると同時に羞恥心も戻ってくる。古田は処置室に入る前に絵里に裸になるように言った。手術着の類を与える気は古田にない。絵里の肛門から勢いよく出た便で茶色く染まった飛沫が古田の白衣にも付いていた。絵里が裸になる隣で古田が白衣を替えた。古田が手を取って連れて行こうとしたが、絵里はその手をつかまず、乳首と毛を剃られた股間を両手でしっかり隠して古田の後をついていった。裸にスリッパをつっかけて歩かされるのは恥ずかしかったが、ようやく恥ずかしめに終わりが見えてきて絵里は少しばかり安堵していた。処置室では看護婦が割礼の用意を終えていた。麻酔を使ってくれると分かっているので絵里は自分からとカーテンで囲われた台に乗った。古田が見ている前で脚を開くの

はやはり恥ずかしかったが、これが最後の我慢だと絵里は自分から脚を開いた。看護婦が絵里の全身を手早くベルトで拘束していく。麻酔を使うなら暴れることもないはずだと絵里が思った時にはすでに身動きできなくなっていた。
「それじゃあ、約束通り。」
古田が小さな注射器を手に取った。注射器にはすでに薬剤が充てんされている。古田が注射器から気泡を除いて絵里の脚の間に立った。針を刺す瞬間は痛いだろうと絵里は息をつめて注射に備えた、この注射一本のために絵里は酷い仕打ちに耐えた。
絵里が呆気にとられたのは古田が注射器の中身を水鉄砲のように空中に出してしまったからだ。
「さて、これで帳簿上は麻酔を使ったことにも廃棄したことにもできるんだ。」
古田が言った言葉の意味が絵里はすぐに分からなかった。
「そんな！約束が違います！」
約束を反故にされたと分かって絵里が血相を変えて叫んだ。
「ごめんね。可愛い子を泣かせるのが好きなんだ。」
古田が悪びれもせずしれっと言ってのけた、自分が裸で仰向けにされたカエルのような姿でいることも忘れて絵里が思わず悪態をついた。
「うん、ちょっと忘れては困るんだけど、麻酔を使ったことにできるんだよ。それとも、あんまり聞き分けがないようなら、普通より痛くしようか？」
抵抗できない絵里に古田が残酷に言った。自分が身動きできないことを思い出して絵里の胸の内が恐怖でいっぱいになる。青ざめて絵里は絶句した。
「看護婦さん！助けてください！助けてください！」
古田が薄手のゴム手袋をして、ピンセットで消毒薬の浸みた脱脂綿をつまむと絵里が金切り声をあげた。隣に立っていた看護婦は絵里と目も合わせず、カーテンの外に出てしまった。こうなることをあ

の看護婦は最初から知っていたということだ。アルコールで股間を拭かれるとひりひりとしみた。それから古田はヨード液が染みたガーゼでクリトリスの周囲を拭き、そこが毒々しい紫色に染まった。古田がピンセットとメスを手に取ったとき絵里は恐怖で声も出なかった。

　古田はクリトリスを包皮ごとつまんでその根元にメスを入れた。クリトリスの根元を一周するようにメスが入ったとき鮮血が絵里の尻の下に置かれたボウルに滴っていた。

「ひい！お願いです！麻酔を！麻酔をしてください！」

絵里は必死で頭を振って懇願した。細かい作業で集中力がいるので、饒舌だった古田が一転して無言だった。

「ぎゃあああ！」

クリトリスの体に埋まっている部分がメスで回りの肉から剥がされて体の外に引っ張り出されたとき、絵里に叫び声は獣のようだった。クリトリスの根のように体の中に埋まっている部分は途中で二股に分かれる。古田がその片方を切り離した。絵里は狂ったように叫んでなんとか逃れようとするが全身はしっかりと固定されていて、頭をぶんぶんと振るだけだ。細かい血管が密集している部分なので、傷口の大きさの割に出血が多い。絵里の白い太ももの内側が電気を流したように痙攣していた。古田は容赦なく残りの片方も切った。

「ぎゃああ！ぎゃあ！」

切除が終わっても絵里は狂ったように叫び続けた。叫び続けた絵里の体力が尽きるころ、古田は生理食塩水で傷口を流し、縫合にかかった。生理食塩水は恐ろしくしみて、たった三針でも麻酔もされていない敏感な部分を縫われるのは地獄の苦しみだ。喉が焼けるように痛んでも絵里は泣き叫ばずにいられなかった。

　絵里のような割礼の場合、普通はまずクリトリスの包皮を先に切除してかかる。傷口が小さくなって縫合の必要がないからだ。縫合するのは通常より大きなクリトリスで傷口が大きくなってしまった場合だけだ。しみる消毒の後、軟膏をべったり付けたガーゼが傷口

に貼り付けられてようやく地獄のような処置は終わった。裸で台に拘束されたまま絵里は泣き続けていた。

「きゃああ！」

鋭い悲鳴と同時に絵里が泣きやんだ。古田が絵里の顔のすぐ横でズボンから弾痕を引っ張り出し、勃起したそれを手でしごいていた。逃げようとしても拘束されて動けない絵里には顔を背けることくらいしかできない。古田が射精しようとしていることくらい絵里にも分かる。このままではその精液を裸の体の上にかけられてしまうと、絵里はおぞましさに震えた。

「絵里ちゃん、そろそろいくよ。」

古田が荒い息をしながら言った。絵里は古田の男根から顔を背け、目を硬くとして体を強張らせた。股間の傷口は焼けるように痛んだが今はそれどころではない。古田が低い声でうなってその後大きく息をついて静かになったが、絵里には何も起こらなかった。絵里が恐る恐る薄目を開けてみると、古田がコンドームを外しているところだった。絵里は混乱して気付かなかったが古田は最初からコンドームを被せていた。しばらくの間、絵里は風呂に入れないし、うっかり精液などかけてはそれがきっかけで事が露見する恐れがある。古田は絵里の弱みを握り、証拠は極力残さず自身の保身にはすこぶる慎重だった。古田はコンドームの口を縛って、精液のたまったそれを絵里の胸の上に落とした。生温かい感触が気味悪く絵里が悲鳴を上げる。この古田は裏取引をするには危険な相手だったと後悔の念が絵里を苛んで、また涙があふれた。

　処置が終わる時間はあらかじめ知らせてあったので、玄関の横に絵里の父が車で迎えに来ていた。絵里は看護婦に支えられて蟹股でよたよたと歩いた。

「娘さん、よく頑張りましたよ。縫合したので来週にでも抜糸をします。予約を取っておきますので日時は追って連絡を。」

絵里の父に古田が愛想よく話していた。古田が絵里の父に渡した大きな紙袋は消毒薬とガーゼの類だ。明日からしばらくはトイレのた

びに自分でガーゼを替える。

「それじゃあ、また来週に。」

車に乗り込もうとする絵里の肩をぽんと叩いて古田が言った。絵里がわっと泣き出して父がうろたえた。

「痛いし怖いですからね、まだ少し混乱しているんでしょう。割礼の後にはよくあるんです。今日はもう休ませてください。」

古田が優しそうな表情で言った。事情を知らない者から見ればこの医者は好人物に見える。

灯油ストーブの上に置かれた大きなやかんから蒸気があがる音がいやに大きく聞こえた。淳子と士朗はやや離れて別々の方を向いて黙っている。重々しい沈黙に耐えきれなくなったように淳子は年末の特別番組をさして面白くもなさそうに見ている士朗の背中に向かって声をかけた。

「ごめん、ちょっと買う物があるから。」

会話が始まる前に士朗は立ち上がって居間を出てしまった。買い物はただの口実でここに居たくなかっただけなのは淳子も承知している。玄関の引き戸が開け閉められる音がしたが、士朗が財布を取りに部屋に戻った様子はなかった。淳子がつけっ放しになっていたテレビを消すと部屋は静かで、ストーブの上のやかんの音が気に障った。淳子はやかんの中の湯をポットに移し、ストーブを消した。大学に入って下宿を始めてからこれが最初の帰省で、居間のストーブは新しいものに買い替えてあった。操作の仕方がよく分からずに、緊急のボタンを押して消火したので部屋に灯油の臭いが漂った。暖房の効率がいいように引いてある薄いカーテンを通して西日が長く部屋に差し込んでいた。この西日が部屋を暖めてくれるので、夕食の買い出しに出た母が戻ってくるまでくらいなら寒い思いはしなくて済みそうだった。久しぶりの娘の帰宅に父も定時で帰る約束になっていたし、そうなれば士朗と二人きりで気まずく過ごすこともない。淳子は鞄から本を取り出した。年明けに講義が始まる前に読んでおきたい古典で、英文だから読むには辞書がいる。母が帰れば台所で手伝いをするので、淳子はそれまでに一章を読み終えるつもりだった。

　二年生も中盤になると受験勉強にも切迫感が感じられるようになる。進学校だから生徒の最大の関心は進学のことになるのは当然の

ことだ。その日で中間試験が終わり、部活動をやっていない淳子が早々に帰ろうとしたとき、担任に呼び止められた。すぐに職員室まで来るようにとのことだったが、問題を起こしたことのない淳子は呼び出しを受けるような覚えがなかった。淳子が通されたのは職員室ではなく応接室だった。この部屋は廊下から入ることができず、校長室の中にあるドアを通らなければならない。もちろん一般の生徒は立ち入り出来ない。淳子が知らない二人が中で待っていた。一人は初老の男で、もう一人は若い女だった。担任は所轄から派遣されてきた警官だと紹介した。

「突然に申し訳ありません。実は隠し撮りの映像にこの学校の生徒が写っていまして・・・。」

初老の男が言いにくそうに言葉を濁しながら説明した。淳子は自分が隠し撮りに被害に遭ったことは理解したが、まだ事態の深刻さが分からなかった。淳子は自分の体が興味の対象になるという自覚が薄い。毛足の長いカーペットの上の大きなソファーに座らされて、淳子は居心地が悪く、早く話を済ませて帰りたいとばかり思っていた。

一通りの説明を終えると初老の男と担任は出て行った。隠し撮りの映像の現物を当人が見ないことには話が進まないので、この若い女の警官はそのためについてきたようだった。応接室だからテレビはあるが、淳子が見せられたのはテーフルの上に置ける小さな画面だった。押収品の中に収められた映像をその場で見るためのものらしい。スイッチが入れられて画面を見る淳子の顔がみるみる蒼白になっていった。よりによって隠し撮りされたのは割礼を受けたときで、下半身をむき出しにして大きく股を開いた自分の姿が鮮明な映像で写っていた。性器にメスが入り泣き叫ぶ自分の姿を見せられて、淳子は思わず目を閉じて顔を背けた。淳子の心痛を考えて、音声は最初から切ってあった。

「あなたに間違いありませんね。」

もう充分だろうと女の警官は画面のスイッチを切りながら言った。

淳子は小さく肯くのがやっとだった。淳子は俯いて震えていて、歳の近い女の警官は次の言葉をかけられなかった。
「まさか！これを他の人に見せたんですか？」
突然ががばっと顔をあげた淳子が叫んだ。その日着ていた体操服で学校は特定できるとして、映っているのが自分だと特定するのに教師の誰かが先にこれを見たかもしれないと気付いたからだ。こんなものを見られたら盲学校に出られないと淳子は目の前が暗くなった。表情の崩れていない画面を選び、静止画で顔の部分だけを抜き出して照会したとのことだった。うつむいて涙を滲ませている淳子を女の警官が肩を抱いて連れだした。
しばらく別室で待たされて、淳子はまた応接室に通された。今度は他の生徒と校長と何人かの教師もいた。集められた生徒は二十人ほどいて、隠し撮りの被害に遭ったうち、個人が特定できるほどはっきり写っていた者だけでこれだけいた。この件の担当者だという初老の男は淳子たちに告訴するかどうか聞いた。淳子はまだ衝撃から立ち直れず、他の何人かはしゃくりあげて泣いていた。若い女の警官が急いで返事をしなくてもいいとなだめるように言った。
「君たちのことだから大人の判断ができると思うが、現実に犯人は分からないままだろう。告訴するなとは言わないが、結果をよく考えるように。それが言いたくてこうして集まってもらった。」
腕組みをした校長が言った。わざわざ被害者を一同に集めたのはこの校長だった。事を公にしないようにとの露骨な圧力だった。不介入の立場上、告訴するよう勧めることはできないが、二人の警官は校長を睨んだ。
「告訴します！」
端にいた女子生徒が決然と言った。校長と何人かの教師が赤くなったのは怒りのためだ。郁子という、この生徒なら淳子も知っていた。教師に向かって露骨に軽蔑を示すことで学内では有名だった。
「あんなの、関係者じゃないと撮れません。きっと犯人は分かると思います。」

郁子は教師たちを睨み返して臆せずに言った。淳子はここにきてやっと事情が飲み込めた。犯人は内部のものにほぼ間違いなく、身内の不祥事を隠したいこの教師たちが保身のために告訴するなと圧力をかけているのだ。告訴の手続きをとるために警官たちは郁子を連れ出した。残った生徒たちはその日はそのまま帰された。校門を出たところで、あの若い女の警官が連絡先を書いた名刺を渡していた。あの場で配っては教師たちがたちまち取り上げてしまうからだ。告訴する決心がついたら連絡するようにとのことだった。

学校の対応は早かった。といっても、事件をもみ消すために被害者の生徒に圧力をかけるという意味だ。疲れ果てて淳子が帰ると母が待ち構えていた。

「さっき学校から連絡があったのよ！あなたって子は！」

何を吹き込まれたのか、母は淳子に落ち度があるかのように責めた。

「分かっているでしょうけど、先生に任せるのよ！先生に逆らった子がいるって聞いたけど、まさかあなたじゃないでしょうね？」

母は身を乗り出して有無を言わせぬ調子で詰め寄った。母と言い争う気力はもう無く、告訴する気はないとだけ言って淳子は部屋にこもってしまった。未成年だから保護者に連絡したまでだと学校は言うだろうが、家族にこそ知られたくない秘密はある。まだ異性と付き合ったこともない淳子にとってはセックスの絡む問題は繊細だ。嫌でも一緒に過ごす家族に踏み込んで欲しくない問題だった。一方で、学校からの圧力にも関わらず郁子は頑として告訴を取り下げなかった。一週間もしないうちに郁子の割礼の様子が盗み撮りされたと学校中で知れ渡っていた。教師のうちの誰かが意図的に漏らしたに違いなく、郁子への露骨な報復だった。同時に淳子たちにとっては。告訴すれば郁子と同じように名前を明かすという圧力だった。

その後、季節が変わっても検挙に結び付く進展は何もなかった。無許可営業の露店でたまたま押収された品の中にその盗撮された映像はあった。これだけで通常なら捜査は行われない。しかし、映っていた体操服を現場の警官が偶然知っていたおかげで学校が特定で

きた。映像のアングルから内部犯の可能性が高く、そうなればこの種の事件では希な犯人の検挙に至るかもしれないと期待が当初はあった。季節が冬に入り、風邪をひかないように淳子はマフラーを巻いて厚着をして駅のホームにいた。下半身をむき出しにした自分の映像が出回っていると知らされてから淳子は他人目をどうしても意識してしまう。外ですれ違う誰かがその映像を見ていて、それが淳子だと気付くなどまずないと分かっていても、つい学校の他は家にこもりがちになった。来年は受験なのだから両親は休日も机に向かう淳子の様子を不自然に思わなかった。この日は模擬試験のために淳子は久々に遠出をした。結果が出るのは後日だが、今回の模擬テストの手ごたえは上々で、淳子は受験勉強が順調なことに満足していた。あたり既に暗いがまだ時間は早い。ホームに入ってきた電車がすし詰めなのはこの路線が官公庁街を通っているからだ。公務員なら残業は少なく、他の路線より少し混雑する時間帯が早かった。淳子がなんとか自分の体を車内に押しこむとドアが閉まった。手すりにも吊皮にも手が届かないので淳子は扉に手をついて揺れる車内で体を支えた。淳子の目の前の窓ガラスは人いきれで白く曇っていた。

外は寒いのに電車の中は熱気がこもっていた。湿気を大量に含んだ空気は人の体臭とスーツについた防虫剤の臭いがした。マフラーをつけコートのボタンを一番上までしっかり留めていた淳子の体はすぐに汗ばんだ。せめてマフラーを外したかったが、混雑した車内では身動きが取れなかった。淳子のコートの裾に手を入れてくる者がいた。体が冷えるとつらいので制服でないなら淳子はズボンをはくようにしている。おかげで滅多に痴漢にあうことはないのだが、この日は事情が違った。しばらく尻を撫でまわして、淳子が声をあげないと痴漢は無遠慮にも淳子の体に手を回し、ズボンのボタンを外してしまった。痴漢の手は淳子のズボンの中に差し込まれ、冷えないように重ね履きした毛糸のブルマの上から尻をさわさわと撫でまわしはじめた。悪いことにしばらくは淳子とは反対側のドアしか

開かなかった。ひどい混雑の中で淳子は身をよじって逃れるどころか、ズボンのベルトを留めなおすこともできなかった。
「うっ・・・。」
下唇を噛んで耐えていた淳子がおぞましさに思わず声を漏らした。もちろんそんな小さな淳子の声に誰も気づく者はいない。大声で誰かに助けを求める勇気はとても淳子にはなく、こういうときは涙を浮かべて耐えるしかなかった。
　もちろん尻を撫でられただけでは済まなかった。痴漢の手が下着の中に入っても、淳子はドアに押しつけられて身動きができず、真後ろにいる痴漢の様子もよく分からない。汗で蒸れた性器を弄られるのは顔が熱くなるような恥ずかしさだった。脱衣所で下着を脱いだときに汗が蒸れていると自分でも分かるほど臭うことがある。そこを知らない男に弄っていた。クリトリスを切除した痕や小陰唇のない膣の周りを痴漢は執拗に触った。見ず知らずの男にこんな場所で性器を触られてもおぞましいだけだ。ましてや淳子はクリトリスを切除されて性感の大部分を奪われていた。男の指が淳子の恥丘の上で動いた。夏場でなければ淳子は陰毛の処理はしない。その陰毛を痴漢が弄んでいるのだと淳子は思ったが、指の動きは一定の速さで同じ動きを繰り返していた。
「カツレイカツレイ。」
痴漢の指が文字を書いていると気付いて淳子は震えた。背後の痴漢も自分の意図が淳子に伝わったと分かったようだった。
「イタカッタマメビラビラキッタ。」
クリトリスと小陰唇を切除したという意味だというくらいは淳子にも分かった。自分の割礼が隠し撮りされて出回っていることを淳子が忘れるはずもない、まさかこの背後の男がそれを見ていたのかと思うと淳子の顔から血の気が引き膝は震えた。
「オマエシツテイル。」
男の指が恥丘にこの文字を書いて、淳子は不安が的中してしまったと思った。胃が締め付けられ食道を逆流してくる酸っぱい液体を淳

子は必死で飲みこんだ。痴漢はまた無遠慮に性器をまさぐりだした。興奮した男の息が後ろから横顔にかかり、淳子はおぞましさと恐怖で身震いした。その拍子に尿道から小水が漏れて痴漢の指と下着を濡らした。失禁といっても少量で周囲に分かる事はないが淳子の胸中は屈辱感と羞恥でいっぱいだった。

電車がホームに入ると同時に痴漢の手がするりと引っ込んだ。やっと淳子の前のドアが開いた。降りたことのない駅だが淳子は構わず駆け出した。ホームで待っていた少女を淳子は突き飛ばしてしまった。淳子の足元で尻もちをついた少女は痛そうに顔をしかめて腰をさすった。

「ごめんなさい！」

それだけ言うのが淳子にはやっとだった。突き飛ばした相手を助け起こすこともせず、淳子は走り去ろうとした。

「ちょと、待って、待ちなさいって！」

突き飛ばされた少女が逃げようとする淳子の腕をつかんで呼び止めた。淳子は必死に謝りながらその手を振りほどいて逃げようとした。

「いいから、怒ってないから！ちょっとズボンを直して。」

言われて淳子が我に返った。ボタンを外されたズボンはずり落ちて、コートがなければ下着が見えていたところだ。

「だいじょうぶ？わたしのこと知ってるよね？」

慌ててズボンを引きあげながら振り返った淳子の前に郁子がいた。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。でも、もう平気だから。」

淳子はまた何度も頭を下げて謝った。

「ちょっと待って、いくらなんでもその様子じゃ一人で帰せないよ。」

立ち去ろうとする淳子を郁子は引きとめた。淳子の唇は青白くなって震えていて、どう見ても尋常の様子ではなかった。そもそもこの場を逃げ出した後でどこへ行くかも淳子は考えていなかった。押し問答している二人の横で、先刻の痴漢を乗せたまま列車はホームを出て行った。

「ちょっとそこまで来て、わたしがバイトしてる店があるから。」
郁子は有無を言わさず淳子の手を引いて歩きだした。
　郁子に連れ込まれた先はカラオケボックスだった。だれかが歌っている音はするが会話に不自由はなく、ここなら誰かに聞かれる心配もない。
「はい、これ。」
そう言って郁子がビニール袋から取り出したのはショーツだった。ここに来る途中で郁子は買い物をするからと淳子を外で待たせた。そこで郁子はこれを買っていた。淳子が一人で帰ってしまわないように郁子は何度も念を押して、大急ぎで買い物を済ませてきた。
「痴漢でしょ。気持ち悪いでしょうから先に取り替えてきなよ。」
郁子がなだめるように言った。渡された下着の袋を握りしめて淳子は泣き出してしまった。心が打ちのめされているときに思わぬ親切を受けて、淳子は涙があふれて顔をあげられなかった。淳子は郁子の肩を抱いて立たせ、トイレの入り口まで連れて行った。淳子は尿の染みたパンツとその上に重ね履きした毛糸のブルマを汚物入れに捨てた。漏らした小水は少量でズボンまでは濡れていなかったから、股間を拭って清潔な下着に替えると淳子はだいぶ落ち着きを取り戻せた。トイレの入り口で待っていた郁子と個室に戻ると温かいココアが運ばれてきていた。
　淳子がココアを飲み終わるまで郁子は何も言わなかった。郁子がビンから直に飲んでいたのはただのソーダ水でなんの甘さも加えられていない。郁子の服は素っ気ないほど飾りがなく、立ち振舞いにも少女趣味の媚びたところがない。淳子にはそれが頼もしく思えた。
「痴漢に遭ったの初めて?」
郁子の問いに淳子は小さく首を横に振って答えた。頻繁にあることではないが、初めてではなかった。
「ただの痴漢じゃないよね。よかったら話して。ぜったい味方になるから。」
郁子は淳子の表情をうかがいながら慎重に話した。淳子はぽつぽつ

と事の顛末を話し始めた。誰かに打ち明けないと淳子は心がどうにかなりそうだった。少し話すと涙がこみ上げてきて、淳子は言葉に詰まってしまった。郁子はけして急かさずに辛抱強く聞いた。

淳子の話を聞き終えた郁子の表情が厳しかった。卑劣な男に怒っているのが淳子にも分かった。今の淳子には親身になって自分のことのように怒ってくれる郁子の存在がうれしかった。郁子の考えでは犯人は例の隠し撮りに直接関わった誰かだというのだ。確かに、映像を見た誰かが街で偶然見かけた淳子に気付くとは考えにくい。

「一つお願いがあるの。このこと、警察に知らせていい？」

郁子が言った。放っておくと次があるかもしれないと郁子は内心では思っていたが、今の淳子にそれは言えなかった。淳子は無言で肯いた。淳子は郁子に頼ってみようという心境になっていた。週開け早々に被害届を出すという約束をして、郁子は淳子を家まで送った。電車ではなくタクシーを使ったので、学生にとってはかなりの出費になった。淳子にすれば教師と衝突することが多い郁は何となく怖い存在だった。今までなんとなく避けてきたことが申し訳なくて、郁子の後ろ姿が見えなくなるまで淳子は門柱の前で見送った。

夕飯も食べずに淳子は一番風呂で体を隅々まで洗った。部屋に戻るとしっかり体を洗い着ていたものは洗濯機の中で洗っているはずが、何か有機的な臭いがした。今まで気付かなかったが風呂で体を洗い、自分の体臭しかしない部屋に戻って淳子は鼻が利いた。持っていたカバンを床に置き、淳子は恐る恐る開けてみた。文房具類の出し入れをしなくて済むように通学につかっているカバンと同じものので、校則で指定された古風な学生鞄だ。不安は的中し、鞄を空けた瞬間に生臭い臭いがして淳子は吐き気がした。鞄の隙間からペニスを入れ自慰をされてしまったらしい。手にべっとりと精液がついて淳子は全身に鳥肌が立った。淳子は泣く泣く鞄ごと全部を捨てた。もったいないのは承知していたが、気味が悪くて洗って干してまた使う気にはとてもならなかった。模擬試験の問題用紙も入っていたが、自己採点と復習は諦めるしかなかった。

警察署での手続きはほとんど郁子がやってくれた。まるで引率のように郁子が段取りをしてくれるので、淳子は形式通りに書類を作るだけでよかった。被害届を出したあと二人は別室に通された。応対したのはあの初老の警官だった。刑事だから所内でも私服で、対応できる女の刑事がいないのを詫びながら二人に椅子を勧めた。
「なるほど、それは確かに郁子君の言う通りだろうな。」
眉間に深いしわを寄せて刑事が言った。映像から教師と病院関係者の共犯だろうということは目星がついていた。淳子に不埒を働いたのはそのうちの医療関係者の方だろうというのだ。隠し撮りが複数の犯行だとすれば一角が崩れれば残りが何人だろうと芋づる式に検挙できるところだ。警官はもどかしそうで、その痴漢の身柄が確保できれば一挙に解決だったと表情が言っていた。
「すみません。」
淳子はつい謝ってしまい、初老に警官が気の毒なほどうろたえてそれを打ち消した。こうして被害を訴え出るだけでも年頃の少女には大変な勇気がいることだ。あの隠し撮りの映像と同じ内容のものがすでに別のところでも押収されていると警官は打ち明けた。ダビングされた物が複数の経路で流通していて、普及し始めたインターネット上でも取引されている形跡があるとのことだった。何度もダビングされた物を押収したとしても、そこから最初の犯人までたどり着くのは容易ではなく検挙の望みは薄くなりつつあると初老の警官は正直だった。同時にそれは拡散してしまった映像を回収する方法がなく、淳子たちにとっては自分を隠し撮りした映像が誰かの手元に残るということだった。
冬休み前の寒い時期に男女とも体育は持久走をやる。淳子の学校は太平洋側で冬場は晴天が続くのだが、その日は朝からひどい雨だった。で郁子のクラスは体育館に集められて、吐く息が白い寒さの中でジャージを着ることも許されず、皆が半袖の体操服にブルマだった。授業は持久走の代わりの筋力トレーニングで男女別に分かれたクラスで半分ずつ体育館を使うことになっていた。膝を抱えて冷

たい床の上に列になって座る生徒の中から体育の教師は郁子を呼んで立たせた。体育教師は郁子のブルマがずり落ちていると言った。言いがかりは毎度のことなので郁子は逆らわずに少しブルマを上に引っ張った。

「しっかり直しなさい！体操服はきちんと着る！」

もとより郁子はだらしない着方はしていない、これは誰が見ても言いがかりに他ならなかった。郁子は動じた様子もなくさらにブルマを引っ張った。小さなブルマをそこまで引っ張れば尻の肉の下の方ははみ出してしまう。教師はそれを分かっていて理不尽を言っていた。郁子はブルマの裾から見えていたショーツをブルマの中に押し込んだ。ショーツを寄せて尻の谷間に挟むようにしないとこの状態ではみ出してしまう。この間、郁子は眉一つ動かさなかった。

教師は郁子に前に出るように言った。これから馬跳びをするのでその見本を見せるというのだ。もちろん、馬の役をするのは郁子の方だ。

「そっちじゃない。みんなにお尻を向けてどうするの！」

女教師は男子がいる方に尻を突き出して前かがみになるように言った。平静を装っていても郁子の顔に朱がさしていた。郁子は下唇を噛んで言われた通り、尻を高く上げて前かがみになった。ブルマを強く引っ張り上げたので、真後から見れば大陰唇の形がはっきりと分かるはずだ。郁子には自分の脚の間から隣で授業をしている男子たちが見えた。何人かがちらちらと横目で自分を見るのが分かり、恥ずかしさで郁子の頬が熱くなった。もともと女子の体に興味がないはずがない男子たちだ。ましてや、自分たちに向けて尻を突き出しているのが割礼を隠し撮りされたともう知らないものはいない郁子では注目は集まってしまう。隠し撮りをした犯人が映像を編集したときに残したくらいだから、郁子の容姿はいい。髪を短く切って、普段から自分の容姿に無頓着に振舞っていたせいでまるで目立たなかったが、こうして注目を集めるようにあってからは大きな目にしまった唇が凛々しくていいと、男子たちの話題に乗るようになって

いた。体育の教師は郁子の背中に手をついて飛び越えるときに爪を立てた。同性なのだから郁子の羞恥心はよく分かっているはずで、分かった上で教師は執拗にいたぶっていた。例の隠し撮りの犯人を被疑者不詳のまま告訴して以来、郁子はずっとこのような仕打ちに耐えねばならなかった。生徒に干渉することと自分の保身とやることは同じなのに教師の間に派閥はある。この体育の教師はその中で校長の腰巾着として忠勤に励んでいた。自分の保身は万全にしておきながら、逆らえない相手をいたぶるのが好きなまさに下衆だった。もし逆らうならこの教師は授業態度を理由に郁子に落第点をつけるはずで、それで留年などしたら教師たちの思うつぼになってしまう。郁子に告訴を取り下げさせて、そのままうやむやのうちに事件を幕引きしたいのは派閥に関わらず教師全体の利害は一致し、郁子を助けるものは誰もいなかった。

いたぶっても屈しない郁子に苛立った教師は郁子と同じ班の四人も前に立たせた。四人はうつむいて郁子の横にならんだ。連続して飛ぶ見本を見せるのだと教師はとってつけた理由を言った。

「はい！馬の姿勢。」

教師は急かした。逆らえば郁子のシンパと看做すという脅しは十分に効いている。四人の少女が尻を突き出した。

「こらー！女子のブルマばかり見てるんじゃない！」

男子を監督していた教師が大声で言った。横目で盗み見ていた生徒をたしなめたのではなく、郁子たちに男子たちの視線を余計に意識させるためだ。見るなと言われれば余計に意識して、つい横目で見てしまうのがこの年頃の男子だ。体育館を仕切ることができるカーテンはあるが、もちろんそれを引くことはない。周囲の誰かを巻き込むことを郁子は決して望んではいない。こうして何の責任もない他人を巻き込むことで教師は郁子の心を苛んでいた。クラスの何人かが堪りかねて告訴を取り下げるように郁子に詰め寄ったことがあった。そういうときは郁子も挫けそうになり、決心が揺らいだことはあった。巻き込んでしまった彼女たちに詫びつつも、郁子は負け

たくなかった。事件をもみ消してほくそ笑む犯人を想像すれば怒りがわき、怒ることでどうにか心を強く保ってきた。郁子の隣でクラスでもいちばん静かな少女が男子たちの方へ向けて尻を突き出して、白い体が羞恥で桃色に染まっていた。耳まで顔を真っ赤にして目尻に涙を浮かべた痛々しい様子に郁子は胸が締め付けられた。その日、教師は教室に帰る郁子たちが手すりにすがらなければ階段を登れないほど運動を強いた。これでまた、恨みを買う理由が増えてしまったと郁子はやりきれなかった。

二年生で最後の定期試験の結果が貼り出されたとき、そこに郁子の名前はなかった。成績が振るわず上位に入らなかったわけではなく、郁子は学校を去っていた。淳子は郁子のことを方々に聞いて回った。電話をかけても郁子は家を空けていて、当面は帰らないというだけしか話してもらえなかったからだ。周囲からは近寄りがたく思われていた郁子と親しくしている生徒は少なく、自宅の場所を着きとめるには苦労した。その途中で郁子が教師たちから受けていた仕打ちを知り、淳子は愕然とした。

夏休み前の水泳の授業で、その日はたまたま生理の初日にあたってしまった郁子は見学を申し出た。教師は待っていたとばかりに郁子に購買部でタンポンを買ってくるように命じた。初日は特に出血の量が多い。タンポンで布石きれるかどうか不安で見学を申し出るのは当然だが、この教師は許さなかった。逆らえば授業態度を理由に減点して落第点をつけると脅されては郁子にはどうすることもできない。他の多くの教科と違って、テストで高得点をたたき出して埋めあわせることができないからだ。貧血気味の重い体で午前中のまだ水温が低いプールに郁子は入った。準備運動でプールの壁沿いに水の中を歩かされただけで郁子は顔から血の気が引き、唇が震えた。体育の授業は二つのクラスの女子が合同でやる。それだけの人数がプールの壁際を同じ方向へ歩くと渦ができ、水面に浮いた落ち葉などがプールの中央に集まってくる。それを網ですくい出してから水泳の練習を始めるのがいつもの手順だった。下腹部が鈍く痛み、郁子が恐れていた事態が起こった。

「そこ！すぐ上がりなさい！」

このときを待っていた教師が怒鳴った。郁子の近くに血がゆらゆらと細く漂っていて、それに気付いた生徒は気味悪そうに郁子の側を

離れた。
　プールは体育館の屋上にあり、会談を下った先はグランドに面して足洗い場になっている。コンクリートの階段を下る郁子の足元がふらついていた。夏場だったが貧血のせいで郁子はひどく寒く鳥肌を立てて震えていた。冷たい水に入ったせいで子宮が収縮してしまい、出血がひどくタンポンで止めきれなかった経血が脚を伝い、郁子のあるいた後に点々と赤い染みを作った。よろよろと歩く郁子も苛立った教師は神経質な声で急かした。
「血を流すから、さっさとそこに立ちなさい。」
教師が顎で指したのは足洗い場だった。この時間なら男子はグラウンドで球技はずが、この日は足洗い場に用具を並べていた。郁子には不運なことに先日の豪雨で古い体育倉庫が雨漏りした。古くなったトタン屋根の上に新しい屋根を張る間に合わせの工事をしたために屋根が二重になっていて、その間に溜まった錆と土埃の混じった水が用具にかかってしまった。そこで生徒を使って用具を全て洗って干す仕事をさせていたところに郁子はちあってしまった。血を流している郁子を見て男子たちはぎょっとしたが、すぐに生理と分かったようだ。教師は厳しい表情を作っていたが、唇の端が少し上がり、明らかにこの状況を面白がっていた。髪から滴る水で顔が濡れていなければ郁子が泣いていることに教師は気付いたはずだ。
　足洗い場の中に郁子を立たせて、体育の教師はバケツで水をかけた。これで血を洗い流すというわけだ。水道から汲んだばかりの水はプールよりさらに冷たかった。その水の冷たさより郁子にはすぐ隣にいる男子生徒たちの視線の方がつらかった。男子生徒たちは視線を落として黙々と作業していた。彼らも郁子の方を見てはいけないと分かってはいた。それでも、生理的欲求に勝てず、意思とは反対につい横目で見てしまう者はいた。
　郁子が受けていた仕打ちを知って淳子は涙を流した。郁子の苦境になにもできなかったことが申し訳なく、居ても立ってもいられない淳子はその日のうちに自宅を訪ねた。玄関で応対した母親の態度

で歓迎されていないことは淳子にも分かった。
「あ、母さん！その人はいいの。今日にでも、こっちから会いに行こうと思ってた人なのよ。さ、あがって！」
その母親の背後に郁子がいた。思っていたより元気な声に淳子は安堵した。
「ごめんね、ちょっと訳ありで母さんがナイーブになってて。」
居間にジュースを運びながら郁子が言った。外から見た様子では自分の家と大して変わらないと淳子は思っていたが、郁子の家の家具は飾り気のないシンプルなものばかりで、色調も地味だった。それで雰囲気に統一感があり、通された居間も質素だがいい趣味をしていた。
「あの、怪我してるの？」
郁子の歩き方が少しぎこちないのを気にして淳子が聞いた。郁子は笑って否定して、先にジュースを勧めた。台所で絞ったフレッシュジュースで、郁子がたまに飲む出来合いのものよりずっと美味しかった。
　郁子は今までの経緯を話した。まず、自主退学の理由は校則で禁止されているアルバイトが学校の知るところとなったからで、決して教師の仕打ちに屈したわけではないと郁子はきっぱりと言った。学校から長期の停学か自主退学かの選択を迫られ、停学を受け入れた場合は留年が確実なことを考えて。郁子は学校を去ることにした。
「わたしね、再建手術を受けたの。アルバイトをしてたのはそのため。」
郁子のいう再建とはクリトリスのことだ。クリトリスを手術で再建することで、割礼で奪われた性感をかなりの程度で取り戻すことができた。もちろん、生徒を性から遠ざけるという理由で割礼を強いているのだから、在学中に再建手術は受けられない。入院が必要な手術だから学校へ秘密にするのは難しかった。
「抜糸して、つい一昨日帰ってきたんだけど、まだちょっと違和感があって。」

歩き方がぎこちなかった理由はそれだった。
「そんな大変な手術だったのに、わたしなんにも知らなくて・・・。」
淳子の声は消え入りそうだった。郁子は朗らかに笑って顔の前で手を振った。隠したのだから知らないのは当たり前で、遠くの病院まで見舞いに来るほどのことではないと郁子は言った。
「もう一回割礼されるみたいに思わないでね。麻酔もするし、痛み止めももらえるからどうということはないの。」
郁子は笑って言ったが、実際はメスを入れる部分が敏感なだけに、しばらくは鎮痛剤なしに眠れない日が続いていた。それを正直に話したら、淳子は泣き出してしまいそうだった。
郁子の母が落ち着きなく何度も居間を覗きに来るので、近日中にまた会う約束をして淳子は早々に退出した。娘が自主退学を強いられ、クリトリスの債権施術を受けた直後では他人を警戒してしまうのは無理のないことではあった。割礼を受けない者と同様に、再建手術を受けた者への風当たりは強い。もともと、少女の早熟化を防止する目的なのだから、自身の行動に責任をとれる年齢になったならクリトリスを再建することに問題はないはずだった。しかし、現実にはクリトリスの再建手術を受けたと公言してしまえば有形無形の不利益を覚悟しなければならなかった。少女が通過儀礼としての割礼を受けなければ将来に貞淑な家庭人になれないと本気で考える人々は少数ではなかった。クリトリスを再建したと聞いて、大多数の人はその女性が風俗産業に従事していると考えるのが現状だった。もちろん、極普通の女性が周囲には秘密にして再建手術を受ける場合もあるはずだが淳子のような普通の少女が知っているはずもない。割礼は少女たちへの迫害でしかないのだと郁子は言った。淳子も自分たちが強いられる過酷な通過儀礼に理不尽を感じないわけではなかった。
「あなたは怒る練習が必要ね。」
郁子は言った。怒ることで心を強くもつことができ、理不尽を前に

屈することがないのだと郁子は言った。そもそもの元凶の教師や隠し撮りの犯人への怒りより、ひどい仕打ちに郁子が一人で耐えていたことの悲しみの方が淳子には大きかった。郁子の苦境を親身に思えば、まず怒りがわくのが当然だったと淳子は落ち込んでしまった。
「怒るより泣き出しちゃう優しい人もわたしは好きだけどね。」
郁子が言ったのは淳子の心を察したからだが、もちろん本音で思っていることでもあった。後悔しているのは理不尽に屈して割礼を受けたことで、教師と対立したことも自主退学も郁子は後悔していないと言った。郁子が進学を諦めたわけではないと言うのでお互いに受験を予定している大学を教え合ったら、偶然にも同じ大学が一校あった。入学式は一緒になるかもしれないと笑ったが、郁子は大学受験の他に大学入学資格検定の対策も立てて勉強せねばならなかった。

淳子の部屋の壁際に勉強机があり、その壁にコルクの板が貼り付けてあった。メモや時間割の表をピンで留めておくためのものだ。郁淳子はポケットから郁子に渡された名刺大のメモを貼り付けた。郁子の字は筆圧が高く角張って、まるで男の字だった。郁子の自宅とポケットベルの番号が並べて書いてあり、郁子はこれを掴ませながら何かあれば些細なことでもすぐに連絡をよこすように言った。教師の横暴から身を守るには学校の外に味方がいる方がよく、郁子はクリトリスの再建手術を通じて割礼を受けない少女たちの権利を擁護する団体に人脈ができ、多少の力にはなれると言った。いざとなったら郁子を通じて学校の外に味方がいると臭わせるだけでも教師たちには威嚇になるはずだ。
「いい、連中はきっと後悔するわよ。学校ぐるみで隠ぺいしたんだから、犯人があがればその一人を処分すれば済む話じゃない。」
郁子の言う通りで、教師たちは保身のために、これからますます必死でもみ消しにかかるはずだ。盗み撮りの件は忘れたような顔をして、目立つことはしないようにと郁子はくぎを刺した。
「だいじょうぶ、何かあったら警官さんにも連絡するわ。」

淳子が言うと郁子が渋い顔をした。警官は仕事上の必要があって気を使っているのだから、心から味方と思って気を許しすぎないようにと郁子は釘を刺した。

「でも、犯人が捕まるまでは多分、味方よ。何かあったら子細漏らさずしらせるのは間違いじゃない。」

脅かしすぎたかと郁子はつけ足して言った。

行き詰まりの様相を見せていた事態は急転した。春休みもそろそろ終わりに近い日の朝に郁子は携帯電話のベルで起こされた。通話料が高く十代の少女の持ち物としてはまだ珍しいものだった。布団にもぐったまま携帯電話を手にとると液晶画面には淳子の自宅の番号が表示されていて、郁子は飛び起きて通話のボタンを押した。先に番号を知らせてあったが、こんな早朝にかかってくるとはただ事ではない。

「お願い、話を聞いて欲しいの。私、どうしたらいいか分からなくて・・・。」

家族に聞かれたくない話らしく淳子の声は聞きとりにくいほど小さかった。時折、しゃくりあげて鼻をすする音が聞こえるのは淳子が泣いているからに違いなかった。

「待って！今すぐ出るから！待ち合わせは・・、いいや！迎えに行くからそのまま家にいて。」

郁子は強く言ってそのまま電話を切った。大急ぎで身支度をし、行き先を聞く母親を無視して郁子は駅まで自転車を飛ばした。運の悪いことに駅のホームから電車が出ていくのが見えた、淳子が心配で次の電車を待てない郁子は駅前のロータリーで客待ちをしていたタクシーに飛び乗った。運転席で船をこいでいた運転手は郁子のただならぬ様子に驚いていた。

早朝なので淳子と二人きり話せる場所はそうなかった、開いているのは駅前のファーストフードの店くらいで、そこは朝の早い通勤客が朝食をとるので込み合っていた。結局、しばらく歩いて淳子の家の近くの小さな公園のベンチに二人は腰をおろした。ベンチがテ

ーブルを挟んで向かい合っていて、屋根も付いているので気候のいい季節なら子供を遊ばせながら若い母親たちが談笑している場所だ。座ってからしばらくは二人とも無言だった。淳子は沈痛な表情でコートのポケットから取り出してテーブルに置いたものを見て郁子は顔色を変えた。郁子の頬が青白いのは明け方の寒さのせいではない。
「これどうしたの？」
郁子が問いに淳子は無言だった。淳子の目じりに涙が溜まっているのを見て郁子は無理に聞き出すことを諦めた。
「駅にチラシがあって、そこに電話して取り寄せたって言ってたわ。たぶん、いっぱいダビングされる前のやつだと思う。開けてみて、中にそのチラシがまだ入ってるから。」
郁子が薄いプラスチックのケースを開けると確かにディスクと一緒に電話番号が書かれたチラシが入っていた．
「ねえ、もしかしてこれを持ってたのって知ってる人？」
質問してから郁子は後悔した。どうやら郁子の勘が当たってしまったらしく、狼狽するおろおろと狼狽する様が気の毒で、言いたくないことは無理に言わなくていいのだと取り繕おうとしたとき、淳子が小さく肯いた。
「これから警察に行こうよ。これは証拠品だから、警察に預けて、あなたはもう関わらないほうがいい。私も一緒に行くし、言いたくないことは言わなくていいからね。」
郁子は淳子の肩に手を置いて励ましつつ言った。淳子の顔に少し血の気が戻り、今度は聞きとれる声で返事をした。
　朝の冷気で冷え切った体を駐車場の自動販売機で買ったココアで温めてから淳子たちは警察署の受付へ向かった、署員はまだ出勤していなかったが、当直がいて二人を暖房のある一室に通した。部屋が暖まり、淳子たちがコートを脱ぐころ、あの初老の警官がばたばたとやってきた。
「やあ、お待たせしてしまって。」
汗を拭きながら淳子の向かいに座った警官は穏やかに言った。前に

学校で見たときとは違ってこの日は制服だった。郁子はすすめられた椅子に座らず、淳子の背後に椅子の背もたれをつかんで立っていた。低いテーブルの上にプラスチックのケースを差し出す淳子の手が震えていた。警官は早速、ケースを開けて中のディスクと一緒に入っていたチラシを確認した。

「このチラシは買った人が捨てずにとっておいたんだろうね？」

警官がチラシの端をつまんで言った。

「はい。」

つい不用意に淳子は返事をしてしまった。これで警官は淳子がこの持ち主を知っていると確信したはずだ。後ろに立っていた郁子は思わず顔をしかめた。

「中身を確認させてもらっていいね？」

警官の言う中身とはディスクに収められている映像のことだ。脈拍が速くなり、嫌な汗が出たが淳子はうなずいた。ここで協力を渋ってはなんのために勇気を出してここに来たか分からない。

しばらくして淳子たちのいる部屋に前に学校で見たモニターが運び込まれてきた。一緒に持ち込まれた何枚かのディスクは他の場所で押収されたものだった、勝手にコピーを繰り返して売られたいたものだからパッケージはばらばらだ。中の映像をスチール写真にしてケースの全面にプリントしたものがあった。場面ごとの小さな写真がびっしりと配置されたそのパッケージに、淳子は自分の姿を見つけ寒気がした。警官が覗き込んでいる画面に自分の下半身を剥きだしで泣き叫んでいる自分たちの姿が映っていると思うと淳子はいたたまれない。既に映像は拡散していて多数が見てしまった後なのだから、いまさら恥ずかしがっても仕方がないと自分に言い聞かせて淳子は耐えた。音が再生されないのはせめてもの救いだった。淳子が持ち込んだディスクの映像は鮮明で小さな画面を覗き込んでいる警官の表情が真剣になる。コピーによる映像の劣化が見られないことからこれがオリジナルに違いないと警官は言った。既に同様のディスクが何枚か押収されていて、淳子が持ち込んだディスクと同じ

ものと鑑定結果が出れば保管されていたメモが大きな意味をもつ。直接に犯人に結びつく物証だからだ。
「これはどこで見つけましたか？」
警官の質問は二人とも予想していた当然のものだった。淳子の唇がキュッと結ばれた。
「申し訳ありません。知り合いとしか言えないんです。」
一呼吸置いて淳子は一気に行った。向かい合った警官に淳子は深々と頭を下げた。これ以上はどうか追及しないでくれという懇願だった。顔を伏せている淳子には分からなかったが、初老の警官の顔に険のある表情が浮かんだことを郁子は見逃さなかった。淳子が顔をあげたときには警官はいつもの穏やかな微笑に戻っていた。背後に立った郁子は淳子の肩に手を置いた。
警官は卓上のモニターを回して淳子の方に向けた。淳子が何かを言う前に警官は持ち込まれたディスクの中の一枚を再生した。
「これを見てほしいんですよ、普通のビデオじゃないのは分かりますか。」
警官が言うように、画面に映っていたのは前にも見せられた盗撮の映像だったが、画面の大半は文字で、淳子たちが泣き叫ぶ映像へのコメントだった。これを見て興奮し、マスターベーションに使っていると分かるコメントに淳子の顔から血の気が引いた。
「これね、パソコンの画面を録画したんですよ。つい最近始まった、動いている絵を配信できるサービスでしてね。これはプロバイダーに依頼して削除してもらいましたが、次々に同じものが出てきましてね。」
インターネットは家庭に普及しつつあったが、高校生が触れる機会はあまりない。淳子にプロバイダーが何かは分からなかったが事態は理解できた。
「この映像の大元、最初に誰が撮ったかですよ。そこが分かるところも手の打ちようがある。映像を削除させられるんですがね。」
警官はそう言って淳子の反応をうかがった。背後に立った郁子に強

く握られ、淳子の肩に痛みが走った。学校を去ってから郁子には警官の嘘が分かった。一度拡散した情報は回収も制御も不可能だ。

「ごめんなさい、本当に言えないんです。でも、その人はほんの出来心で買ってしまっただけなんです。信じてください。」

郁子が抗議するより前に淳子が言って、また深く頭を下げた。淳子が啜り泣きをはじめたので警官はようやく諦めて、低調な態度で二人を送り返した。駐車場の隅の貯水タンクの陰で淳子は郁子にすがってしばらく泣いた。

ことの発端は瑣末だった。いつものように士朗が辞書のケースに隠したあのディスクを再生しようとレコーダーに挿入したとき、短い停電があった。ディスクが所定の位置に収まる前に急に電源が切れたため、ディスクが不正な位置から取り出せなくなってしまった。乱暴に扱って中のディスクを傷つけたら後悔してもしきれないと士朗は専門家に任せることにし、わざわざ二駅も離れた電気店にそれを持ち込んだ。春休み中ということもあって常に自分が家にいるのだから家族の誰かが受け取ることはないだろうと、士朗は修理が終わったら宅配便で送り返す手続きをした。実は故障ではなく、単に一度電源を抜いて、もう一度つなぎなおせばディスクは出てくるだけのことだった。当然、電気店のスタッフが電源をつないだ途端にディスクは出てきた。客のプライバシーにかかわるのでディスクの内容は詮索されない。こうして士朗が予想していたよりずっと早くレコーダーは送り返され、配送された荷物は淳子が受け取ることになってしまった。

荷物を受け取った淳子は士朗の帰りを待たずに開封した。空気を挟んだ透明なシートで梱包されていて、中身が電化製品だと分かるようになっていた。この春休みが終われば三年生でいよいよ受験勉強で弟をかまってやれなくなるかもしれない。その前に久々に部屋を掃除してやり、ついでにこのレコーダーもテレビにつないでおいてやろうと淳子は想いたった。士朗の部屋は予想以上のひどい状態

で、淳子は汗の染みたシーツなどをすべてはがし、脱ぎ捨ててあった靴下などと一緒に洗濯機に放り込んだ。男子学生の持ち物だから気をつけて洗うような品物はない。あらかた片づけを終えると掃除機をかける前に方々の埃を落としておかなければいけない。古くなったタオルを乾いたまま使って淳子は埃を払った。本棚に入れっぱなしになっている辞書類の上にたまった埃を払ったとき、英語辞書のケースが軽いことに淳子は気づいた。引き出してみると白い何も書いていないプラスチックのケースだった。中で動いて音がしないように新聞紙を詰めてあった。こんな隠し方をするなら淳子にもそれが何か分かった。いつもなら成年向けの雑誌などを見つけても淳子は苦笑いしつつ元の位置に戻してところだが、なにも書いていないパッケージが気になり、この日はケースを開けてみた。中に入っていた紙きれは士朗が公衆電話で見つけたチラシで、それでこれを買うことになったものだ。チラシに書かれた盗撮や名門校の文字に淳子の全身に鳥肌が立った。間違いであって欲しいと思いながら、淳子は電気店から返ってきた士朗のレコーダーをつないだ。ディスクは鏡面を保護する簡単なケースに入れられてレコーダーの上にあった。震える手で再生ボタンを押した淳子の目に映ったのは自分が通う学校の体育館に並ばされた体操服姿の少女たちだった。

冬休み中、士朗はほとんど家を空けていた。元旦も朝から出かけようとする士朗に事情を知らない母が癇癪を破裂させた。士朗はしぶしぶ家族と一緒に仕出し弁当屋の御節と雑煮が並んだ食卓についた。

「ちょっと二人で初詣に行ってきます。女一人じゃ危ないし、士朗も勉強の息抜きが必要でしょう。」

淳子が言った。士朗はこの場から逃げられない。ここ数日、勝手に出歩いては夕方遅く帰る日が続いていた手前、淳子に頼まれれば断れない。勉強の息抜きと聞いて両親は苦笑いをした。士朗の勉強しかたといえばずっと息抜きをしっぱなしのようなものだった。女学生らしい清楚ながら華やいだ服装の上から温かいコートを着た淳子

の後を士朗はジャンバーのポケットに手を突っ込んでとぼとぼとついて行った。
　淳子は神社に向かわず、士朗を河川敷に連れて行った。遊歩道が整備されていて、土手に花が咲く季節なら散歩をする人も多いが、寒い元日の午前中では人は淳子たちだけだった。淳子が急に振り返り、士朗の手をとった、驚いている士朗に構わず淳子は手をつないだままゆっくりと歩いた。
「ごめんね。いたたまれないのは分かってる。連れ出されても居心地が悪いだけよね。でも、聞いて欲しいことがあるの。明日には下宿に帰るし、今日だけ付き合ってね。」
淳子は士朗をいたわるように言った。あの日も淳子は士朗を責めなかった。あの盗撮のディスクを前にして、床に力なくへたりこんだ士朗の前に立ったまま、淳子は両手で顔を覆って泣くだけだった。謝ろうにも言葉が見つからない士朗はいっそ淳子になじられた方がましだった。次の日からも淳子が士朗に接する態度は変わらなかった。ただ、士朗のほうが淳子を避けるようになった。本当に深く傷つけられたのは淳子のほうだと士朗にも分かっていた。どう謝ればいいかも分からず淳子を避け続ける自分を士朗は呪った。結局、士朗がもっていたあのチラシが最後の鍵になった。チラシに書かれていた先払い式の携帯電話の持ち主が分かったからだ。その持ち主は契約だけして携帯電話を売り渡していて、その売った先の人物が淳子の学校で割礼をした病院の関係者だった。後の展開は早かった。病院の独身寮に家宅捜索があり、看護助手が使っていた私物のパソコンから名簿が発見された。映像に収められていた主だった少女たちに個人情報で、この看護助手はそれを売っていた。電車の中で淳子を襲った痴漢もその買い手で間もなく逮捕された。警察は既に情報源としての価値を失った淳子たちには興味を示さず、捜査の進展は一切知らされなかった。病院の関係者が芋づる式に逮捕される顛末は郁子が調べて知らせてくれた。予想した通りだったが学校側にも事件に関わった者がいた。予想の上を行ったのはその事実と犯人

を校長以下の職員が全て知っていたことだ。職員を金銭で買収する資金は経費の流用で賄われ、捜査すべき容疑がまた増えた。学校関係者への処罰は県の教育委員会に付託され、下された処分は最も重いもので自主退職する条件での停職、軽いものでは訓告だった。積極的に犯行に加担したはずが、非公開の協議の間に単なる管理不十分お問題にすり替わっていた。郁子は怒り、割礼の反対する団体の後押しもあって、関係者全員の罷免と真相究明を求めて裁判に訴えた。淳子も原告に名を連ねているその裁判はまだ続いている。

「わたしね、彼氏ができたの。次の休みに連れてこようと思うけど、お母さんが何か言ったら味方になってちょうだいね。」

淳子が急に立ち止まって言った。どう返答していいか分からず士朗は突っ立ったままだ。確かにひどく傷つきはしたが、郁子の誠実な支えで乗り越えられて、今を楽しんでいると淳子は言った。傷ついたまま立ち直れないほど自分は弱くないと言った淳子は士朗の知っている優しさが過ぎて気弱な姉ではなかった。

「だから、もう士朗とのこともけじめをつけたいの。何かしてほしいと言ってるわけじゃないの。どれだけ後悔していたかはよく分かってる。避けないでほしいだけ。ぼつが悪いのは分かってる、でも、終わりにしたいの。今度彼氏を連れてくるときは弟としてきちんと紹介させてね。」

うつむいた士朗の顔を覗き込んで淳子が言った。顔と顔が近い。優しく微笑まれて士朗はうなずいた。許されたことで士朗の目に涙がたまり顔を上げられない。

「ごめんなさい、姉さん。ごめんなさい。」

士朗は鼻をすすりながらこれだけ言うのがやっとだった。

「さて、それじゃあ。初詣に行きますか！林檎飴おごっちゃおう！」

湿っぽくなった空気を払うように淳子が朗らかに言った。

炊飯器ほどの大きさがある円筒形の容器についた弁を昌介が開けた。小さい空気を吸う音がして、ステンレス製のいかにも頑丈そうな容器の中の気圧が戻った。昌介は一か月も負圧をかけ続けた容器のふたを開けた。容器の中は番号を振ったシャーレがいくつか並んでいて、その中上に小さな肉片が乗っていた。薄手のゴム手袋をした昌介が振られた番号の一番若いシャーレを持ち上げた。シャーレがわずかに傾くと、肉片はガラスの底を滑ってシャーレの縁に当たって止まった。肉片は切り取られたばかりのように生々しいが実は固く軽い。この肉片は標本を作る最後の段階だった。標本といってもホルマリン漬けのことではなく、これは時間をかけて脂肪と水分を樹脂に置き替えて作る新しいやり方だった。この標本はプラスチックの模型と同様に素手で扱って観察することもできる。昌介が手袋をしたのは手の脂がつくと後々それが酸化して汚れになるからだ。それに、この標本作りを命じた教授は自分のコレクションに他人の手垢がつくのを何より嫌っていた。当人は隠していたが、昌介は教授がコレクションの中から気に入ったものを箱からとり出しては手で弄び、唇に押し当てているのを知っていた。肉片はこの大学病院で切除された少女たちの性器だった。近隣に学校が多いのでこの大学病院でも大量の割礼を行っている。

　昌介の背後でドアが開いてノックも無しに教授が入ってきた。教授は自分のための研究室なのだから当然といった態度だ。思わず舌打ちしそうになったが、昌介はそれを顔に出さない。学生時代からの付き合いで、昌介はこの教授の前で感情を押し殺す訓練はできていた。

「作業は進んでるか？ちゃんと手袋はしているな。」

教授は昌介の前の机を検分して言った。自分のコレクションが心配

で教授はこうして抜き打ちで検査にやってくる。
「これから仕上げます。」
事務的に返答して昌介はマスクをかけてリューターのスイッチを入れた。リューターの外観は歯医者が患者の歯を削る道具によく似ている。昌介の持っているのはそれに比べれば安い道具で、プラモデルの愛好家などがよく使うものだ。昌介が持っているリューターの先端は研磨用のパフがついていた。これで肉片の表面に残った余分な樹脂をこそぎ落とすと標本はほぼ完成する。最初に運ばれてきたときは血のついた生の肉片だったそれを昌介はホルマリンに漬けて固定し、形を整え、幾つかの手間のかかる工程の末に水分と脂肪を完全に樹脂と入れ替えた。その後、密閉容器に入れて負圧をかけることで、有害な成分を揮発させてあった。ここまで漕ぎつけるのに二カ月もかかっていた。リューターのスイッチが入ると大きな音がした。昌介はプラスチックの模型のようになった肉片を磨きにかかった。卓上型の小さな冷蔵庫から取り出した缶コーヒーを飲み終わった教授はいそいそと出て行った。産業界との連携の旗振り役をしている教授は毎夜のように担当者との折衝と称しては歓楽街に出向いていた。
ざらついたパフを高速で回転させて押し当てると、表面についた樹脂がこそぎ落とされ、肉片は元の質感を取り戻した。クリトリスの体外に出ている部分だけだからこの肉片は小さい。肉片はクリトリスと包皮が一体のまま切り取られていて、このやり方では傷口が大きくなり、割礼を受ける少女に余計な苦痛を与えることになる。割礼の手順は執刀医に任されるが、普通は包皮を先に切除することでなるべく傷口を大きくしないように努める。あえて包皮ごと切り取ったのは、教授が自分のコレクション用にリクエストしたからに違いなかった。この大学病院で割礼は泌尿器科が担当する。同じ外科とはいえ、昌介のいる放射線科とは接点はあまりない。それなのに、ここに切り取られた性器が集まるのは教授が論文の査定で大きな発言力を持っているからだ。一日に大量の人数をさばかなければ

ならない割礼は激務で若手の仕事になることが多い。研究職を希望する若手の医師にとっては、あの教授の口利きは是非とも欲しいものだった。そのためのいわば賄賂として、泌尿器科の若い医師の何人かは少女たちから切り取った性器を提供していた。昌介は磨き終わった肉片を元のシャーレに戻した。こうしないと、どの肉片にどの番号を振られていたか後で分からなくなってしまう。この番号でいつ誰から切り取られた性器かが分かるので、コレクションする教授にとっては重要なことだった。猜疑心の強い教授のことだから、自分への不満から昌介がサボタージュする事態も想定して、何か手を打ってあることは十分考えられた。教授の心証を悪くしたくないのは昌介もこの切り取られた性器を差し出す医師たちも同じだった。

昌介は肉片を磨く作業を終えて、リューターのスイッチを切った。大きな作動音が消えて、室内が急に静かになる。時計を見ればもうすぐ日付が変わろうとしていた。最後にこの肉片にシリコン系の接着剤を吹きかけながら数日かけて乾燥させると標本は完成だ。早く帰って休みたいが、作業を持ち越すとあの教授がうるさかった。接着剤が乾燥する前に埃をかぶらないように、肉片はアクリルの箱に入れておく。先ず、その箱の中身を片付けないといけなかった。アクリルケースの中には大きなシャーレが並んで、すでに完成した標本が乗っていた。肉片はさっき昌介が磨いていたものよりずっと大きい。この大学病院から病院さほど遠くない女子校の生徒のものだ。校則の厳しい名門校で知られるその女子校はクリトリスの体内に埋もれている根の部分まで切除し、大陰唇の裏側を小陰唇ごとそぎ落とすという過酷な処置を生徒に課していた。しかもその後で、経血と尿の出口をわずかに残し左右の大陰唇を縫い合わせてしまう。そうすることで、少女の性器は大陰唇がめくれることのないシンプルな割れ目に変わる。当然かなりの確率で、大陰唇どうしが癒着して膣口をふさいでしまうことはあった。そのような場合はさらに酷いことに左右の大陰唇を切り離す処置をしなければならなかった。この一連の処置を麻酔も使わずに行うのだから、割礼される少女が何

度も失神することも珍しくないと、昌介は聞いていた。
昌介は最も若い番号を振られたシャーレから取り上げた。同じ歳の少女から同じ手順で切り取られたのに肉片には顔と同じくらいそれぞれに個性があった。士朗が手にもった性器は色素の沈着が少ない明るい色をしていた。クリトリスの包皮と小陰唇の大陰唇からはみ出していた部分にだけは色素が沈着してすくんだ色をしていたが、その他はきれいな桃色だった。粘膜でできたクリトリスの本体のきれいな桃色が見られるように、士朗は包皮の一部を切り開いて標本を仕上げてあった。切り取られたばかりの肉片に言えて爪で叩けばカチカチと音がするくらい標本は硬い。士朗はアクリルの箱から完成した標本を全て取り出して机に並べ、それから棚の上のダンボール箱から大きさの合う標本箱を必要な数だけ取り出した。士朗は机からラベルのシールを取り出して、並べた標本の左端から一番若い番号を振ったそれを手元に引き寄せた。振った番号の後半部は割礼をした日付なので、昌介はまずそれをラベルに書きこんだ。それから教授が作っておいたリストを見ながら、この切り取られた性器の持ち主だった少女を探し出し、学校名と名前などを書き込んでいく。丁寧な字で書きこまないと後で教授がうるさかった。最後に昌介は接着力の弱いテープで名簿に貼り付けられていた証明写真を慎重に剥がして、ラベルに貼った。写真の裏側には剥がれおちたときのために教授の字で必要事項が書き込んであり、いちいちやることが細かかった。標本箱に作ったラベルを張りつけながら、今回は特にきれいな少女ばかりがそろったと思った。切り取った性器を差し出す医師は少しでも心証をよくするために、教授の好みも勘案して自分が執刀した少女の中でも容姿のいい者を選ぶ。毎回、一目できれいと分かる少女ばかりだが今回は特に粒ぞろいだった。校則が厳しいので制服の着方は端正で、髪も丁寧にまとめてある。もちろん、皆が髪を染めるようなことはなく品が良い。割礼前の検診のときに撮影した写真だから少し緊張した表情で写っているところも良い。共助と昌介の趣味はこの点でよく似ていた。こんな写真が簡単にそろ

うのは、患者を取り違える事故があって以来、カルテには必ず顔写真がつくようになったからだ。

ラベルを貼り終わった標本箱の上にシャーレに入ったままの標本を置き、番号を確認してようやく作業は終わった。机の上には先刻、磨き終わったクリトリスの標本が並んでいたが、士朗はこれの仕上げを明日に持ち越すことにした。標本箱は封がしてあり開けることはできない。教授は自ら出来上がった標本をアルコールで丁寧に拭き、一つずつ箱に収めるのを習慣にしている。かつての軍隊で当番兵が士官のところに運ぶ飯盒の中にふけを振りかけることがあった。部下をいびるばかりの指揮官はこの報復にあうことが多かったという。教授は昌介がその手の悪さを自分の大事な標本にすることを警戒していた。不誠実な人間ほど他人の悪意には想像力が働き、猜疑心強いものだが、教授はまさにその典型だった。日付はとっくに変わってあと四時間もすれば空が白み始めるころだ。寮に帰る前に換気をしようと冷房を止めて窓を開けると排気ガスの臭いがする暑い風が入ってきた。朝が近いというのに湿度も温度も下がっていない。冷房で冷やされていた壁の鏡があっという間に曇った。換気は逆効果だと昌介は窓を閉め、冷房を弱くかけっぱなしにして部屋を出た。あかりを消すとき、昌介は机の上にならんだ標本を見た。小さな顔写真の少女たちは皆、品がよく可愛らしい。この少女たちが大きく脚を開いて縛り付けられ、激痛に泣き叫ぶ様を昌介はつい想像してしまう。割礼をする処置室の隣にはマジックミラー越しに中を見ることができる小部屋がある。もちろん、割礼を受ける当人の了解を取り付けたうえで研修医に見学させるための設備だ。医局が違うというのに教授がしばしばその部屋に出入りしているのは昌介も知っている。当然、割礼を受けている少女はそのことを知らないはずで、教授が職権を盾にして泌尿器科の若手にごり押しをしたに違いなかった。教授の振舞いに怒りを覚えるには昌介はここの水に馴染みすぎ、ただ羨ましいと思うだけだった。内心では軽蔑している教授と性根は変わらない自分を恥じる気持ちさえ、最近の昌介は薄くなっ

てきている。鍵をかけて寮に急ごうとしたが昌介はズボンの前が突っ張って歩きにくかった。急いで帰って寝なければ明日がつらいと思っていたのに、このときになったようやく昌介は明日が非番だと気付いた。同じ単純作業の繰り返しで昌介は曜日の感覚まで無くしてしまっていた。医局の序列では一番下の昌介では非番とはいえ建前通りに休むわけにもいかない。それでも、午後から出て、今晩のやり残した標本の仕上げをしておけば教授は何も言わないはずだ。急いで寝る必要がないならば、昌介には行くところがあった。幸いにして財布の中身はまだ少し余裕があった。

大学病院の門から見える位置にある駅の駐輪場まで自転車をこいだだけというのに、昌介はべっとりと汗をかいてしまった。自転車に乗って、風に当たっていても汗が全く乾かない。この一帯は学校が多いので、風俗店のある歓楽街までは二駅ほど離れている。建前上、風俗店は日付が変わってから日の出まで営業できないことになっているが、これから昌介が行く界隈では何軒が営業している店がある。特殊浴場として届け出ていないもぐりの店かというとそうでもなく、何か地元の当局と裏の協定があることを臭わせていた。深夜料金のタクシーを使うのはもったいないと、昌介は下りた駅からしばらく歩いた。昌介はパステルカラーの丸い文字の看板を掲げた店に入っていく。

「いらっしゃいませ、初めてですか？」

カウンターにいた若いスタッフが低い声でぼそぼそと言った。短期のアルバイトが多いらしく、来るたびにスタッフは入れ替わっているが、愛想のないのは同じだ。昌介も挨拶も返さず必要なことだけ言った。

「新人入りましたけど、写真指名しますか？」

目も合わせずにスタッフの男が言った。昌介は三千円を入浴料に上乗せして写真とプロフィールを見た。写真を見るといっても、照明を強くして顔の中央が光って見えないように撮影してあるので、美人かどうかの参考には全くならない。それでも、事前に写真で品定

めしようと思えば割増料金をとられた。新人の源氏名はマキと言った。写真で見る限り体系は細身らしく、少なくともたっぷりと脂肪をつけていることはなさそうだった。プロフィールの身長も昌介より低い。昌介は小さく華奢な体が好みだった。それから最も重要なことは、マキが割礼を受け、クリトリスと小陰唇を切除されているということだった。昌介がわざわざここへ来た理由はそこにあったからだ。割礼が事実上の義務になって以来、風俗嬢のプロフィールに割礼でどのように切除されたかが加わった。もちろん、一般に人気が高いのは割礼を受けていないか、あるいは小さく切除されたのみで性感を残しているケースだ。昌介の嗜好はその反対ということになる。昌介は写真を前にして少し迷った。マキは髪を明るい茶色に染めていて、それが昌介には不潔に見えた。他の写真を見ると黒髪は一人もいなかった。髪を短くしている分だけマキの方が良いと、昌介は指名をした。無愛想なスタッフに待合室に通されて、昌介はそこでマキの体が空くのを待った。

手の爪を検査され、口に口臭予防のスプレーをされてから昌介は個室に通された。曇りガラスで仕切られた隣の浴室から水音がしていて、どうやら客ごとに湯を張り替えるという宣伝は本当のようだ。一定量の湯が出ると自動で止まる蛇口らしく、水音が止まるとすぐにマキが入ってきた。受付でコスチュームを指定できるので昌介は私物の制服を指定してあった。新人のマキがこの春まで来て学校へ通っていたものだという。その制服姿を見て昌介は唖然とした。ついさっき、仕上げてきたあの標本のもとになった少女たちと同じ制服だった。もちろん、マキがその学校の出身とは昌介も思わない。毎年、有名な大学に多数の卒業生を送り出している名門校だけに、制服のレプリカにも需要がある。複雑なデザインの校章などに一目では分からない程度の変更を加えた偽物が売られていた。マキの足元は素足にサンダルだった。客が帰るたびにシャワーを浴びて着替えるのだから、靴下までいちいち揃えてはいられない事情は分かるが、これは昌介の興をそいだ。

「おはようございますぅ、マキです！」
マキがスカートの端をつまみ、軽く膝を折って言った。首を少し傾けてマキは笑顔を作ったが、興がそがれるだけなので昌介はなるべく見ないようにした。昌介ひどい態度たったがマキの表情は変わらない。もちろん、金千と引き換えにサービスをするだけと割り切っているだけのことで、マキの気立てとは関係がない。
「おさわりしますかぁ？」
タオルを敷いたベッドの縁に腰かけたまま黙っている昌介に、マキがスカートをたくしあげて、中のパンツを見せて言った。そのパンツがレースのついた薄手のもので、確かに色香はあったが、制服姿に合うものではなかった。昌介が首を横に振ったのでマキは怪訝な顔をした。わざわざコスチュームを指定するのは着たまま触る楽しみのためだ。それを昌介はさっさと脱いで風呂に行こうと言った。
先に風呂場に入った昌介に続いて、裸になったマキが入ってきた。マキの若い体は細身で小柄でこれは昌介の好みに合っていた。熱いシャワーで汗を流されるのは心地よく、昌介の機嫌も多少は良くなった。
「気持ちいいですかぁ？じゃ、座ってくださいね。」
マキがシャワーを止めながら言った。昌介はやっと声に出して返事をして、股の下が手を入れられるように溝になった椅子に腰を下ろした。
「あの制服はどこで買ったもの？」
昌介がからかう調子で言った。やっとまともに口を利いたというのに、出てきた言葉がこれだった。
「ばれちゃいました？ごめんなさい。」
股を開いて座った昌介の脚の間で、湯で割ったローションを泡立てていたマキが小さく舌を出して、照れ笑いをしながら言った。マキは思っていたより素朴らしく、やや気楽になった昌介は機嫌よく言葉を交わした。マキが言うには着てきた制服は客がくれたものだった。この春まで高校生で、校則が厳しい学校だったから、クリトリ

スと小陰唇を全部切ってあるのは本当だとマキは言った。国内の高校へ進学しなかったなど割礼を受けずに済んだ性感を残した風俗嬢に人気が集まる。しかし、昌介の場合は逆で傷跡ついた性器を見て触り、割礼の苦痛に想像を巡らせて楽しむためにここに来ていた。そんな話をしながらマキはせっせとローションで昌介の勃起した男根をしごき、陰嚢を揉みほぐすように洗ってから最後に肛門を擦った。股間の洗い方は丁寧で、昌介はマキが気に入り出した。

「おにいさんって少しエスですか？」

マキがローションを胸に塗りながら言った。エスとはサディストの頭文字のことだ。乳房は小ぶりでなかなか形がよかった。割礼について踏み込んで聞き出そうとした昌介は後悔した。気を悪くせずに答えてくれそうな相手だと踏んだだが、普通は進んで話したいことではない。

「実はそうなんだ。割礼にすごく興味がある。」

いまさら取り繕うこともできないので、背中にローションを塗った乳房を擦りつけているマキに昌介は居直って言った。これで険悪な雰囲気になったら高い料金を払ったかいがないと昌介は思った。

「いいですよ。やっぱり興味あるお客さんいますから。聞いてください。」

背中を洗い終えたマキは昌介の腕を股に挟んで股間を擦りつけながら言った。昌介の腕にマキの縮れた陰毛が擦りつけられた。陰毛とたわしに見立てて、これをたわし洗いという。体で体を洗うのはけっこうな重労働で、マキの息が少し弾んでいた。言いにくいだろうことをあえて聞いて申し訳ないとか、昌介はつい言い訳をした。

「そのかわり次も指名してくださいね。」

マキがはにかんだ笑いをして言った。素晴らしく気立てがよくて優しいと思ったら、しっかりと商売をしていた。昌介が苦笑いするとマキもつられて笑った。

昌介は空気の入ったビニールのマットに寝かされて、その上にマキが体を重ねた。二人ともローションにまみれていて、上に乗った

マキの小柄な体はなめらかに滑った。マキの小ぶりな乳房が昌介の体の上で潰れて、擦れてしこった乳首の感触がくすぐったかった。色はやや濃いが小さめの乳首だった。股間を観察するのはベッドに行ってからで、まずは通常のサービスを楽しむようにマキは言った。さすがに玄人だけにマキは性癖の変わった客のあしらいは方よく心得ていた。マキは滑って転ばないように手を取って昌介を立たせ、シャワーでローションを流した。シャワーをあてながら尻の間を手でこすられるとくすぐったいようで心地よい感覚に昌介の勃起した男根がぴくりと動いた。マキがその尿道口に短いが強く吸うキスをして、昌介に湯船につかるように言った。マキに渡された使い捨ての歯ブラシで昌介が歯を磨きながら湯船につかっていると、後からシャワーで自分の体のローションを流し終えたマキが向かい合って湯船に入ってきた。昌介が口をすすぐとマキの顔が目の前に迫ってきた。化粧品の匂いがして昌介は息を止めた。この後キスをするのは昌介にも分かるが、前に何度かこの状況でひどく煙草臭い息を嗅がされたことがあった。幸い、マキに喫煙の習慣はないらしく、おそらくは液体歯磨きのほのかなミントの匂いがして、温かな唇と下は心地よかった。マキは昌介の尻の下に膝を入れて、腰を抱え込むように持ち上げた。浮力があるので大した力は要らない。昌介の勃起した男根が水面にでると、マキはそれを口にくわえた。マキは男根に唾を絡めて、それ音を立ててすすりながら唇で扱いた。口の中でマキの舌が尿道をほじる様に動き、昌介は小さく呻いた。尿道の付け根が熱くなると、マキはぽんという小気味いい空気音を立ててフェラチオを止めた。続きはベッドに行ってからと、昌介を先に湯船から出し、マキは口の中に溜まった唾と尿道からにじんだ体液の混じったものをそっと吐き捨てた。

浴室の出口で昌介が待っていると、マキがタオルで体を拭いてくれた。二人とも手早く水滴をタオルに吸い取らせた。タオルを敷いたベッドに腰掛けた所介の肩をマキが押して寝かせ、乳首を舐めはじめた。こうしてまず客の全身を舐めまわすことから始めるのが普通

だが、昌介はむくりと体を起してしまった。
「足を開いて見せてほしい。」
昌介は目を合わせずに言った。自分の性癖を教えるようで、この期に及んで昌介は気恥しかった。この客は割礼に興味があると先に分かっていたので、マキは素直に仰向けになって股を開いた。いまさら股間を見られることに大した羞恥は感じないはずだが、マキは胸の前で両手を握っていた。恥じらいを演出するのも客を喜ばせるには重要で、マキはこのような所作を自然に身につけていた。大きく開いたマキの脚の間の体を入れ、所介は股間に顔を近づけた。部屋がうす暗くてよく見えないと、昌介が照明のスイッチを探していると、マキが枕元のリモコンのダイヤルをひねった。頭上の照明が明るくなり、所介はまぶしくて何度が瞬きをした。明るい光の下で見ると割礼の傷跡はよく見えた。本来ならクリトリスがあるところには小指の爪ほどのケロイド痕があった。所介が大陰唇をめくってみると、小陰唇は完全に切除されていた。もっとも色素が沈着しやすい部分が切除されているので、マキの性器はわずかにくすんではいてもきれいな色をしていた。マキの大陰唇は正常な厚みを保っていた。もし、最初にきて表れた制服が本物で、マキがそこの出身なら、大陰唇の裏側が海綿体ごとそぎ落とされているはずだった。クリトリスを切り落としたケロイド痕を昌介が指の腹で撫ででもマキは無反応だ。次に大陰唇の縁をそっとなぞると、ようやくマキの体がぴくりと痙攣した。クリトリスを無いのだから、この大陰唇の縁がマキの体で最も敏感な性感帯だ。昌介が時間をかけて縁を何度もなぞると大陰唇の厚みが増してきた。書介が大陰唇を指でつまんで揉むとマキの膣口からわずかばかりの愛液がにじんだ。
「あんっ！あんっ！」
マキが鼻かかった声をあげたが、もちろん営業上の演技だ。無用の気遣いで、昌介は自分の唇の前で人差し指を立ててマキを黙らせた。
ぴたりと閉じた大陰唇の隙間から目薬をたらしたほどの愛液を滲ませたマキの性器を前にして昌介はそれを舐めるのをためらってい

た。もともと昌介はクンニは好きで、汗と尿が混じった股間の匂いや味も相手が好みの範囲に収まる容姿ならかえって好ましく感じた。マキの体は細身で、顔立ちはそれなりに整っている。問題はマキではなく他の客が男根を挿入していて、その体液を舐めさせられると想像すると気味が悪かったからだ。ビデを使ったところで、膣の奥まで洗えるわけではない。

「うちは本番ないですから大丈夫ですよ。」

不安そうに聞いた昌介にマキが答えた。挿入は禁止ということだ。ふと、プライベートでのセックスはどうなのかという考えが頭をよぎったが、想像力の働かせすぎだと思い直して書介はマキの股間に舌を這わせた。日に何度もシャワーを浴びる生活だから当たり前で、マキの股間は匂いも味もなかった。

「通ってた学校は校則が厳しかった？」

早々にクンニに飽きた昌介が聞いた。もちろん、聞きたいのはマキが受けた割礼のことだ。

「すごく、眉毛とかも剃っちゃいけないの。割礼もすごかったよ。」

マキはあまり嫌がる様子もなく応えた。昌介は性感の大部分を奪われてしまっているマキの性器をいじりながら詳しく話を聞き出そうとした。マキの母校の校則で決められた割礼の内容は、クリトリスの体外に出ている部分を全部と、小陰唇の完全な切除だった。平均的な高校よりこれは過酷な処置だった。一般に偏差値の高い公立高校などは校則も緩やかで、クリトリスの先端のみを小さく切るだけで割礼をすますことが多い。進学校ではない私立高校と厳しい校則を伝統にしている名門校は過酷な割礼を生徒に強いる傾向がある。マキの場合は名門校ではなさそうだったが、そこは昌介も詮索しなかった。

「割礼する部屋ってね、すごく寒いの。それでね、浣腸とかもするからみんな震えちゃって、同じ部屋でみんな浣腸するから、臭いで気分が悪くなっちゃって。」

経験者だけにマキの話は生々しい。少女たちの苦痛を想像すると昌

介の男根は痛いほど勃起した。
「ものすごく痛くて、泣きすぎて喉がつぶれちゃって。やっと終わったと思ったら、まだ皮しか切ってなかったの。最後にクリトリスを切られて、わたし、失神しちゃった。」
話しているマキのすべすべしていた太腿に鳥肌が立っていた。マキの言葉が本当で、思い出すだけで寒気がするほどの苦痛を受けて証拠だった。
「ね、おにいさん。時間もないし、もう抜こうよ。」
無意識のうちに自分で男根をしごいていた昌介を見てマキが言った。抜くというのは射精をさせてくれるということだ。時計を見ると確かに残り時間はわずかだった。
　仰向けに寝た昌介にマキが舌で奉仕をした。時間がないので全身を舐めまわすのは省き、マキは陰嚢を少し舐めるとすぐに男根を咥えた。時間内で射精させようと、マキは汗をかきながら男根を激しく吸って強く唇でしごいた。みるみる昌介の尿道の付け根が熱くなり、射精は近かった。時間内に射精して満足できなければ延長料金をとれるかもしれないところをマキは全力で奉仕した。次回にもう一度指名をされることを狙ってのことではあるが、もともと気立てはいいマキだった。昌介が股間を見ながら射精したいと言えばマキは男根を咥えたまま体を回して、昌介の頭を跨いだ。昌介の上に膝をついて四つん這いになったマキが重なる姿勢だ。昌介の目の前にマキの股間があった。マキが強く男根を吸うと割礼の傷跡を残した性器の上でくすんだ色の肛門が収縮した。マキの太ももの内側が汗でべたつく感触を頬に感じながら、昌介はマキの口の中に射精した。マキは精液を全て口の中で受け止めた。昌介が目眩のような恍惚感を味わっている間にマキは尿道に残った精液を全て吸いだした。そして、昌介が体を起こす前にマキは手元のティッシュペーパーを抜き取って口の中のものを吐きだした。大急ぎで体をシャワーで流して、服を着て、なんとか制限時間内に収まった。マキの見送りは廊下までだった。これから大急ぎでベッドのタオルを取り替えて、マ

キは次の客を迎えなければならない。軽い脱力感とともに昌介が店を出ると空が白みはじめていた。近くの飲食店が出した生ごみの匂いが混じった空気は明け方だというのにまだ暑く、せっかくシャワーで流した昌介の体もすぐに汗ばんだ。

昌介が寮に戻ると東側の窓のカーテンの隙間から朝日が差し込んで、部屋はひどく暑くなっていた。昌介は窓を開け放ち、歯を磨いて髭をあたった。ひどく空腹だが昌介は冷蔵庫を持っていないし、この気候では菓子パンの類でも室温では置いておけない。あと二時間もすれば寮の食堂が開くが、疲れと眠気でとてもそれを待っていられそうになかった。

昌介が目を覚ますと時計の針は正午を回っていた。寝る前に部屋を肌寒いほど冷やしてから空調を切ったが、室内には熱気がこもっていた。まだ猛烈に寝むかったが、駆け出しの研究者では休日だからと一度も研究室に顔を出さないとはやりにくい。特に医局の長があの教授ではそんな空気は濃厚だ。昨晩の高い出費でさびしくなった財布の事情もあって、食堂の不味いもり蕎麦で昌介は昼食を済ませた。茹で置きの麺を湯でほぐしと水で冷やすだけで、熱くないので早く食べ終わるのが取り柄の蕎麦だった。

研究室には誰もいなかったが、さっきまで空調がかかっていたらしく空気は冷たかった。部屋が暑くなる前に昌介は空調のスイッチを入れた。机の上に並べたままになっていた標本は片付けられていて、どうやら先に教授がここへ来たらしい。あのような標本を隠すでもなく堂々と置いておけるのはこの医局で教授に逆らう者がいないからだ。その机の上に教授の名刺があり、裏面に昌介宛の書置きがあった。大学病院の職員たちは緊急の呼び出しに備えて、常にポケットベルを携帯している。昌介がベルトに留めたポケットベルを見ると教授からの着信が確かにあった。朝早く寮に帰った昌介が熟睡していたころだ。これ以上、教授の心証を悪くしたくない昌介は急いで教授の自宅に電話を入れた。案の定、教授の声は不機嫌そうだった。しばらく小言を聞かされ、話は唐突に本題に入った。

「割礼、見たくないかい？生で。」
教授が意外なことを言った。昌介が返事をする前に教授はさらにまくし立てた。痛みに対して人間がどう反応するか、そのデータの蓄積のために性器切除を観察することになった。患者がどのような苦痛を感じ、それをどう取り除くかは医療の重要な分野だから、このような仕事は当然ある。苦痛の種類や度合いを検査で数値化することはできないから、実際に苦痛を受ける人の反応を観察し、データを蓄積するしかないのだ。予防接種の現場に出向いて幼児を観察することはもっとも一般的なデータの集め方だ。しかし肉体的な苦痛だけではなく、恐怖心や羞恥心など精神的な苦痛に対する反応を観察するには、幼児より少女の方が適している、また、性器切除と予防接種の注射では苦痛の度合いがまるで違うのだ。
「表向きは仕事だ、堂々と見られるぞ。返事は後でいいからファックスを見とけ。」
教授は言うだけ言うと一方的に電話を切った。話が一方的なのはいつものことで、昌介も諦めている。排紙トレイにあった一枚の用紙を見て昌介の小さな不満はすぐに消し飛んだ。割礼をうけることになった少女のカルテで、取り違いを防止するためにカラー写真がついている。緊張した表情で写真に納まっていたのは長い黒髪の品のいい少女だった。名前は真須美といった。
　翌日、昌介は狭い小部屋で録画用のカメラを準備していた。出入り口の扉の他に窓は一つだけで、それは少女たちが割礼をうける処置室に向いている。窓にはまっているガラスはハーフミラーで処置室側からはただの鏡にしか見えないようになっている。もちろん、本来この小部屋は楽しみで覗く用途ではなく、医師や研修生が割礼を見学するためのものだ。当人の了解がとれればこの狭い小部屋に研修生がすし詰めになることもある。もっとも、当人の了解といっても大抵は名目的で、実際は学校か親の承認であることが多かった。見た目は普通の鏡にしか見えない窓を通すことで、台の上で脚を開かなければならない少女たちの心痛を多少とも軽減するためだ。テ

レビ番組の撮影にも使われる大型のカメラの側面には様々なつまみがついているがとても素人に調整できるものではない。露出などは予め調節済みなので、昌介の仕事はケーブルをつないで所定の位置に据えるだけだ。昌介はまず壁からケーブルを引き、音声の入力端子につないだ。これで処置室の天井にあるマイクから音声をとるのだ。パイロットランプが点灯していて電源が入っていることを確認してから昌介は処置室側の壁を叩いた。壁を叩く音を処置室のマイクが拾い、カメラの側面の表示が正常に録音されていることを示した。準備を終えて明りを消すと、ハーフミラー越しに隣の処置室がより鮮明に見えた。カメラはやや見下ろす位置から分娩台に似た割礼のための台に向けられている。開いた脚の間に立つ執刀医の頭越しに真須美の苦悶する様を記録できる位置だ。

事務室で鍵を借りてここにくる間に昌介はこれから割礼を受ける真須美を見た。備え付けの老眼鏡をかけて書類を作っている母親の横で、真須美は俯いたまま座っていた。長い髪が顔にかかっていたが、形のいい唇が固く結ばれているのが見えた。前日に見たカルテによれば、今年の春に中学校にあがったばかりの真須美だった。あまり早い時期に性感を奪ってしまうと膣の発育が妨げられるので、あまり推奨されないが、義務教育のうちに割礼を受けさせたがる親はいる。性に目覚めると勉強の妨げになると信じているからだ。自慰の習慣が記憶力を減退させると本気で信じているケースも多い。カルテの写真は学校の制服だったが、今日のように私服だと真須美は年齢より大人びで見える。体の発育もいいほうで、性器も割礼して問題ない程度にはなっていそうだった。自慰をしなくとも下着と擦れるとか、尿をした後に拭きとるなど日常の刺激でも膣の発育には重要と考えられている。あまりに早く陰核を切除すると、将来の難産の原因になる恐れがあるのだ。高校生になる前に割礼を受けさせるには先に膣の発育を検査することを勧められる。医師が指を膣に挿入して触診するのだが、これだけで思春期の少女には大変な負担となる。

処置室に真須美が入ってくるのが見えた。思わず昌介は身を乗り出して窓に張り付きそうになった。カメラで自分の後姿を撮影しまっては映像にならず、仕方なく昌介はやや下がった位置に立った。

事務所で見たときの淡い萌黄の品のいいワンピースは脱がされ、真須美が着ているのは白い手術着だ。割礼用なので丈はへそが見えるほどしかなく、前を甚平の様に合わせて着る。手術着の他は下着も身につけていない真須美はむき出しの下腹部を両手で隠し、助手の看護婦に背中を押されながら小股で歩いた。真須美の白い頬に涙のあとがあるのは先立って陰毛を剃られ、浣腸を受けたからだ。年頃の少女にとっては死ぬほどの羞恥だ。普通、手術着は処置室の壁と同じような緑色が多い。血液の色である赤の補色だというのが主な理由だが、白では吹き出した鮮血とのコントラストが強く、凄惨な様相となる。昌介のいる病院で割礼用に白い手術着が採用されたのは単にコストの問題だった。白ならば手術着自体が安く、漂白剤を使っても色があせることもないために使える期間が長い。膨大な数の少女が割礼をうけるので、このような経費もばかにならないのだ。

真須美は助手の看護婦にせかされて台に乗った。患者が自分で動ける限りは手術台には自分で登るのだが、この瞬間は患者にとってはつらい。ましてや健康な性器を麻酔なしで切除するのだから真須美の心痛は察するに余りある。青ざめた真須美が震えているのが昌介にもはっきりと見えた。看護婦は真須美に足を開かせ、台にしっかりとベルトで固定した。真須美は昌介の見ている窓のほうに向けて大きく足を開いている。剃毛された恥丘は柔らかそうで、大陰唇がふっくらとよく発達しているので真須美の性器は小陰唇のはみ出しも色素の沈着も目立たない。ズボンの中で昌介の男根が痛いほど勃起していた。ファスナーをおろして男根をとりだそうとした昌介だが、扉に鍵がかかっていないことを思い出し、諦めてズボンの上から強くそれを握り締めた。怯える真須美は花が雨に打たれているようで昌介の嗜虐心をひどくかきたてた。

両足を固定されているので真須美はもう逃げることもできず、看

護婦は手慣れた様子で全身をベルトで台に固定した。台は分娩台とほぼ同じ形をしている。失禁などに備えて尻の下に容器が据えられているのも同じだ。ただ、全身を縛りつける太いベルトが中世の拷問装置のような禍々しい雰囲気を醸し出していた。首から上は固定されていないので、真須美は頭を起こして不安そうに自分の足の間からトレーに並んだメスやピンセットを怯えた目で見ていた。看護婦は真須美の頭を台についた枕の部分に据えた。痛みのあまり首を強く振ると筋を痛めてしまうことがある。痛みをこらえるなら頭を台に圧しつけたほうが良い。真須美の長い髪はまとめられ、風呂場で使うような薄い透明なビニールの帽子がかぶせられている。この帽子と手術着は真須美が身につけているものの全部だ。執刀医が薄いゴムの手袋をして器具に手を伸ばしたとき、既に真須美の顔は並だと鼻水でぐっしょりと濡れていた。

浣腸も剃毛も既に済み、真須美が受ける性器切除はクリトリスの体の外に出ている突起部分を切除する短時間で終わる処置のため、点滴や心電図がつながれることはなく、アルコールで性器が消毒され、ヨード液が塗られるとすぐに切除が始まった。

「おねがいです！やめて！おねがい！」

自分の股間にメスが迫ってくる恐怖に耐えきれずついに真須美が叫んだ。

「すぐ終わるから大丈夫よ。はい、頭を起こさないで。」

看護婦があやすように言ったがもちろん気休めだ。性器に麻酔なしでメスを入れて大丈夫な痛さで済むはずはない。

「ひぃ！」

固いピンセットでクリトリスの包皮を引っ張られて、真須美はかすれた悲鳴をあげた。真須美の白い腿の柔らかそうな内側がぴくぴくと痙攣していた。

「ぎゃあ！痛い！痛い！」

包皮にメスが入ると真須美は獣のような叫び声をあげた。壁の向こうの声が鮮明に聞こえるのは昌介の頭上にスピーカーがあり、処置

室側の音声を伝えているからだ。マイクを使って逆に処置室側に指示を伝えることもできるようにもなっている。真須美は首を狂ったように振るが、その程度で台にしっかり固定された体は動かない。看護婦が首の筋を痛める前に真須美の頭を押さえつけた。包皮が切除され血まみれになったクリトリスの本体が露わになった。真須美の口から蟹のように泡が噴いている。
「ぎゃあああ！」
そのクリトリスが固いピンセットで引っ張られ、根元から切除されると真須美は怪鳥のような叫び声をあげ、白目をむいて失神した。泡立った真須美の唾液が飛び散って助手の看護婦が顔を背けた。吐しゃ物を喉に詰まらせ窒息することがあるため失神は危険だ。看護婦は真須美の口をこじ開け、吸引用の管の先のノズルを押しこんだ。胃液や唾液が泡だったものズルズルと大きな音を立ててチューブに吸い取られた。喉の奥をノズルで突かれ真須美は激しくむせ込んで意識を取り戻した。
「いや！もうやめて！やめて！」
意識を取り戻した真須美が泣き喚いた。恐怖と痛みで真須美は錯乱している。看護婦がいくら言葉でなだめても無駄だった。傷口の消毒薬がかけられる痛みでまた大きな悲鳴が上がり、割礼は終わった。股間に貼りつけられたガーゼがみるみる血で染まっていくのが見えた。精根尽き果てて自分で台から降りることもできない真須美はストレッチャーに乗せられて処置室を出た。恐ろしい叫び声が止んで、急に静かになると執刀医や助手の看護婦もいつものルーティンワークを終えただけといった様子で手早く器具をまとめて退出する。処置室のクリーニングは後からくる別のチームの仕事だ。
　明りをつけ記録用のカメラからケーブルを外して片付けながら昌介は窓から真須美がいなくなった処置室を見た。トレーの上に切除された血まみれのクリトリスが乗っていた。あれは教授が欲しがるはずで、今回の執刀医が男だったこともあり、きっと遠慮なくよこせと要求するはずだ。またそれを標本にするのは昌介たちの仕事だ

った。ズボンの前を突っ張らせたまま廊下を歩くわけにはいかず、昌介は学生のころに試験勉強で暗記した手の骨の名前を端から順番に思いだして興奮を鎮めようとした。あのテストはひどい失敗で、回答欄の半分も埋まらなかった。単位を落とすのは確実だろうと昌介は骨の数が足らない奇形児の手だと書き添えて提出した。もちろん結果は不可だった。おかげで取らないつもりだった法医学の講座で単位の埋め合わせをせねばならず、志望していた分野とは無関係な講座に時間をとられる羽目になった。苦々しいことを思い出したが、おかげで昌介の興奮はだいぶおさまった。

廊下ですれ違う同じ医局の同僚たちの様子に昌介は違和感を覚えていた。もともと昌介は親しい人付き合いは好まない質で仕事の他では親しく話しかけてくる相手もいないのだが、今日はことさらに態度がよそよそしい。気のせいだろうと昌介は深刻に考えず、先刻の真須美の膝のあたりが厚く角質化していたのを思い出していた。涼やかな容姿にしてはきれいな脚ではなかった。あれは長く正座をする人に見られる座りたこだったのだと昌介はようやく思い至った。おそらく琴か茶でも習っているのだろう。雰囲気から育ちの良さは見て取れたが、どうやら本当に真須美は良家の子女だったらしい。昌介はそんなことをぼんやりと考えながら重い機材を台車に乗せて元の倉庫に返しに行った。高価な機材なだけに貸し出しも返却にも書類が必要で、その手続きに昌介はだいぶ時間を取られた。

昌介が研究室に戻ると終礼が始まっていた。教授がうるさいので先ずは遅刻の言い訳をしなければならない。

「ちょうど、今、君の話をしていたところでね。」

いつもの教授なら小言の一つか二つが返ってくるが今日は違った。

「ペインコントロールの件で、データ集めに人を出すことになってね。君にやってもらう。」

教授の言葉に昌介はぎょっとした。

「どういうことですか?」

上ずった声で聞き返しながら昌介が同僚を見渡すと、目が合ったも

のはさっと顔をそらした。
「どうもこうも、現に今日やってもらったたじゃないか。熱心な仕事ぶりだったし。」
動揺している昌介に教授は平然と言った。放射線科はがん治療の中核だし、その性質上、終末医療に関わる部分も多い。患者の苦痛をどう軽減するかはもちろん重要なことだ。そのためのデータを蓄積するのも重要な仕事には違いない。しかし、研究の分野としてはそれあくまで傍流に位置する。ましてや他の医局と協力してのデータ集めに人手を割かなくてはならないとしたら、これは貧乏くじ以外の何物でもない。割礼を生で見られると餌に釣られて、昌介はまんまと教授のたくらみにはまってしまった。今回のことで昌介がこの仕事に自分から熱心に取り組んだと既成事実を作ってしまった。
終礼が終わると当直の者の他はそれぞれ帰っていく。頭を抱えたままの昌介に誰も声をかける者はいない。必要なデータがそろうまでどれだけ時間がかかるかまだ分からない。一つだけ確かなことはキャリアを積むうえではほとんど報われない単純作業が延々と続くことだった。その間に同僚にどれだけ水をあけられるか、昌介は想像しただけで胃がずしりと重くなった。必要な仕事ではあるから若手が手分けして担当するならともかく、よりによって昌介は専任に指名されてしまったのだ。教授は見返りを期待していいと言った。わずかばかりの餌で尻尾を振る犬並みの扱いだった。教授としては次の機会に処置室で割礼に立ち会わせる段取りでもしてやるつもりなのだろう。その程度で人心を買えると思われていたのだ。屈辱で昌介の中にむらむらと怒りが湧き上がってきた。怒りは正気を失わせることもあるが、失った気力を取り戻す力もある。明日、今度こそ一歩も引かずに教授と直談判すると昌介は決心した。昌介が主な働き手になるのはもはや仕方ないとして、他の若手にも相応の仕事を分担させるつもりだった。もちろん、教授にはこの理不尽の見返りとして、今度は処置室で割礼に立ち会う機会を作ってもらうのだ。
寮に帰ってから昌介は今日の記録をダビングして持ち帰るのを忘

れたことに気付いた。記憶を呼び起こして勃起した男根を処理しようとしても、気が散ってしまいどうにも上手くいかず、昌介は性欲がくすぶったまま寝てしまった。自慰で得られる満足などしょせんはたかが知れていた。割礼の様子を撮影した映像を見ながら自慰をしても、射精して興奮が鎮まってしまうといつも多少の空しさが残ってしまうのだ。昌介が風俗店に通うのは割礼の痕のある性器が見て触りたいからだが、後にはいつも満足と同量の不満が残った。高い出費が割に合わないと思いながら昌介は懲りずに通ってしまっている。先に割礼を受ける叫び声を聞かされながら順番待ちをさせられていた少女が真っ青な顔で震えながら台に上り、性器にメスを入れると鮮血がほとばしると同時に獣のような叫び声が上がる。他の何も代わりに昌介の願望を十全に満たしてはくれない。翌朝に目が覚めると男根は小便をするのに難儀するほど勃起していて容易に治まらなかった。忙しい朝では処理することもできず、もちろん昌介はそんな気分ではない。これから教授と談判が待っていた。

昌介が運転するトレーラーの車内に西日が差しこんでいた。暑さのせいで閑静な住宅街の道沿いに植えられた草花もしおれかけている。このトレーラーは割礼のための設備が搭載されたものだ。学校などで割礼を行うときはこれを校庭に並べて使う。もちろん放射線科の昌介が仕事で触ることはなく、無許可で持ち出してきたのだ。学生時代に免許を取ったきり、ペーパードライバーでいた昌介には車体の大きなこの車の運転は難しく、既に二か所ほど大きく擦った傷を付けていたが、元の職場に戻る気がない昌介頓着していなかった。

「適材適所だよ。」

昌介の抗議に教授は眉一つ動かさずに応えた。既に昌介は研究者としての資質を見限られていた。研究成果より政治的にうまく立ち回る方向で将来を切り開けと教授は言った。意味するところは手駒になれば見返りはやるということだ。

「察したまえよ、みなまで言わせるな。」

屈辱で震えている昌介に教授は嘆息しながらとどめの一言を放った。
細い路地に入ったところで昌介はトレーラーを停めた。使い走りで何度か来たことのある教授の自宅だった。昌介は勝手口側にある水道の元栓を閉め、トレーラーの運転席に戻って誰か人が出てくるのを待った。
勝手口を開けて出てきたのは制服を着た教授の娘だった。部活から帰ってシャワーでも浴びようとしたらしく、開襟シャツの裾はスカートから出ていたし、足元は裸足にサンダルをつっかけていた。点検などの便がいいように水道の元栓は勝手口の外側に付いている。しゃがみこんで水道の元栓を開けようとしていた教授の娘の背後に昌介が忍び寄った。エーテルのしみたハンカチで口と鼻を覆われ教授の娘はくぐもった声を上げて暴れた。サスペンス映画でよくつかわれる小道具のクロロホルムに比べると、エーテルを吸い込んでも意識を失うまで時間がかかるが、その代わりに毒性は弱い。致死量を吸い込んでしまう心配はまずないため、昌介は教授の娘を後ろからしっかりと抱き抱え、大きな悲鳴を上げられないようにハンカチを強く口に押し当てた。体格差のある男の力に勝てるわけもなく、小柄だが肉付きのいい教授の娘の体からぐったりと力が抜けた。もともと勝手口は裏通りにあって、昼下がりでちょうど表に人通りがなくなる時間帯だったのが教授の娘にとって不幸だった。すぐに戻るつもりで勝手口の鍵は開けっぱなしになっていた。この邸宅は窓を破るなどして侵入すれば警報装置が作動し、自動的に警備会社に通報されるようになっている。しかし内部から鍵を開けたなら、当然そのような装置は作動しない。昌介は教授の娘を家の中に引きずり込んだ。他の誰かが家にいないか昌介は警戒したが、家の中は静まり返っていた。
　エーテル麻酔の持続する時間は短い。この麻酔が主流だった時代では開腹手術の最中に患者が目を覚ましてしまう酷い事故もしばしばあったほどだ。後ろ手にビニールテープで縛られた教授の娘が薄眼を開けた。しばらくは意識がもうろうとして焦点の合わない目で

ぼんやりと昌介を見ていた教授の娘だが、次第に意識ははっきりとしてきた。少女が驚いて悲鳴を上げるより、昌介の手が口をふさぐほうが早かった。
「大声を出さないほうがいいよ。今夜はだれも帰ってこないんだろ。佳織ちゃん。」
緊張を押し殺し、昌介は気味の悪い猫なで声を意識して言った。佳織のスカートのポケットに入っていた携帯電話を見せながら言ったのはしばらく家族が帰らないことを知っていると示すためだ。佳織の携帯電話は最新式で、家族や自分の予定を入力し、液晶画面に呼び出してはメモ帳代わりに使えるものだった。佳織と呼ばれた教授の娘はおびえて震えながら肯いた。この娘の名前を昌介が知っているのは以前に何度か使い走りでここに来たことがあり、留守だった教授に代わって佳織が応対したことがあったからだ。一通りの礼儀作法は教えられていたらしく、昌介は丁寧な言葉で対応されたが、佳織は笑顔一つ見せず、それどころか鼻の下に臭いものでも付いているような顔だった。言葉とは裏腹に目の前の相手を父親の使い走りと低くみているのは明らかで、口にこそ出さなかったが嫌な娘だと昌介は思った。根に持っていたわけではないが、その感情を昌介は忘れていなかった。
「ちょっと、おじさんに教えてくれるかな、まずはお父さんの結婚記念日とか」
二人がいるところは教授の書斎で、奥に鍵の付いた扉があった。零から九までの数字が並んだキーボードで暗証番号を打ち込み開錠する仕組みになっていた。佳織が昏倒している間に昌介は教授の誕生日からロッカーの番号まで自分が知っている範囲の数字は一通り試してあった。
この状況で佳織は震えながらも目をしきりに動かして逃げ出す隙をうかがっていた。
「先生、もう知らないんです。」
結婚記念日も妻の誕生日も鍵を開ける暗証番号ではなかった。いら

だち始めた昌介に佳織は阿るような態度で言った。おそらく佳織は昌介の名前も覚えていないに違いなく、それでは相手の感情を逆なですると無難に先生と呼んだのだ。書斎は家の中央にあり窓はない。土埃は本を傷めるのでこう設えると都合がいいのだ。佳織は後ろ手に縛られ、書斎から廊下に出る扉は椅子とテーブルで塞がれていて飛び出すことはできない。冷や汗をかき震えながらも佳織はまだ昌介と駆け引きするだけの理性を残していた。そんな佳織に昌介のいらだちは増した。昌介が舌打ちするのを見て、佳織はしくじったと機敏に察し、力なくうな垂れて見せた。昌介は深呼吸してまた数字を打ち込み始めた。ここでいらだちに任せて鍵を破壊すると、警報装置が作動しかねない。結果が出てみれば簡単で、暗証番号は最初に試した教授の誕生日の数字を一つずらしただけだった。昌介の単なるキーの押し間違いで扉は開いた。

「さて、佳織ちゃん。お父さんの秘密の部屋を見せてあげようか。」昌介が舌なめずりしながら言った。佳織は昌介を物盗りと思っていたらしく、事態が飲みこめていないようだった。昌介は床に座り込んだ佳織の二の腕をつかんで乱暴に起たせた。強い力で捕まれる痛みに佳織は顔をしかめたが、悲鳴を上げることはなく大人しく昌介に従った。

昌介は先に佳織を奥の部屋に入れ、自分は後から続いてドアの前で立った。入り口近くにあった照明のスイッチを入れると、三方の壁沿いに置かれたスチール棚に標本箱がびっしりと並べられているのが見えた。

「それじゃあ、お父さんのコレクションと一緒に記念撮影だ。」昌介が言った。棚から標本箱を引っ張りだそうとして昌介は迷った。ドアの前から退いてしまうと、佳織が全力で外に走り出したときに止められる自信がなかった。電話線を引きぬくなど警備会社に通報される方法を佳織が知っていることは考えられる。佳織が抜け目なく隙をうかがっていることは昌介も承知している。仕方なく昌介は佳織の両手を自由にした。油断さえしなければ体格差のある相手で

直ぐに組み伏せることができると踏んだ。佳織も慎重で、両手が自由になっても昌介に逆らわない。昌介が油断するまで佳織は耐えるつもりだった。猫なで声で余裕を演出して見せても昌介が内心ではひどく緊張していることが佳織には分かっていた。自分が先に冷静さを失わなければ脱出の機会はあると佳織はあきらめていなかった。昌介がどれでもいいから標本箱の一つを取り出すように言った。佳織は汗で頬に貼りついた肩まである髪を後ろに払って、標本箱に手をかけた。髪の毛などを気にするのは怯えていてもまだ佳織が冷静でいる証拠だ。最近の流行でわざと先端を不揃いに切った佳織の髪は色素が薄い。脱色したのではなく、母方の血筋に西洋人がいるせいだ。いつか教授が自慢していたが、佳織の通う高校は名の通った進学校で校則も厳しい。髪を脱色する自由はもちろんない。標本箱の中身に気付いて佳織はかすれた悲鳴を上げた。桐でできた高価な標本箱に並んでいたのは切り取られた性器だった。

重量のある桐の標本箱が床に落ちて、全面に張られたガラスが割れた。愕然とした佳織の唇から血の気が引いていた。

「お父さん趣味だよ、ここにあるのはね、ほとんどおじさんが作ったんだ。」

佳織が動揺しているのに気を良くして昌介はさらに弄るように言った。昌介が隣の箱を取り出すように言っても佳織は逡巡した。床に砕けたガラスが飛び散っていて、土足で踏み込んだ昌介と違い、佳織は素足なのでうっかり踏めば怪我をする。昌介は部屋の反対側の棚から標本箱を取れと言った。今のところ昌介が自分に怪我を負わせる気がないことが分かり、佳織がいくらか冷静さを取り戻した。

「胸の前で標本箱を持て、顔を隠さずに笑うんだ。」

昌介の言う通りに佳織はむねのまえに標本箱を持った。笑えと言ったのは昌介が佳織をいたぶっているからで、もちろんこの状況で笑顔など作れない、佳織が目にいっぱいの涙をため、笑顔とはほど遠い引きつった表情で歯を見せた。佳織の歯列はきれいだった。目鼻立ちの整った佳織は容姿の良い部類に入るが、昌介にとっては気に

入らない小娘で食指が動く相手ではない。これまでのことで、佳織も相手の目当てが自分を強姦することではないと分かっていて、そのつもりで逃げる隙をうかがいつつ従順に昌介の言葉に従っていた。
佳織に標本箱を持たせて昌介は同じような写真を何枚か撮った。病院から無断で持ち出してきた物の中にカメラもあったのだが、それは隣りの書斎に置き、昌介は佳織の携帯電話で撮影をした。カメラを内蔵した高価な最新機種だった。便利だと勧められて以前に昌介も携帯電話を買ったことがある。あまりの通話料金の高さに閉口して、昌介は最初の一月で解約してしまった。それよりはるかに高価な品を高校生が持っていた。最後の一枚と思い佳織に棚から標本箱を抜き取らせると、簡単な紙でできた標本箱だった。欧米なら立派な研究機関の所蔵品が紙の箱におさまっていることは良くあるが、高温多湿の日本の気候には向いていない。教授は本来の箱が用意できるまで一時的に整理しておいたらしい。見ればつい最近に昌介が仕上げた標本だった。
「とっりますよー！はいチーズ！」
撮影するたびに携帯電話から明るい声が出る。盗み撮りを防止するためにシャッターを切ると必ず音が出るのだが、それを佳織は声に設定して使っていた。
「さて、佳織ちゃんのおまんこはどこにあるのかな。」
いたぶるつもりで昌介が言うと、佳織はひどく狼狽した。まさか昌介も教授が自分の娘の性器を保管しているとは思っていなかった。
佳織はあわてて取り繕い、平静を装おうとしたが遅かった。唇の端が上がり、昌介は気味の悪いうすら笑いをした。今までのような内心の緊張をかくした上辺だけの余裕でないことは佳織にも分かった。隙を見て逃げ出し助けを呼ぶはずが、佳織はここでしくじった。
「パンツを脱いでみろ。」
昌介は地声で言った。内心の動揺を佳織に見透かされていた心地がしていたが、この時、初めて昌介は佳織より心理の上で有利に立ったと感じた。

「いやぁ！」
佳織が金切り声をあげた。先刻までなら大声に動揺したところだが、今の昌介には家の中心にあるこの部屋で叫んでも外に声は漏れないと冷静に考えられた。神経質な教授のことだから自宅での仕事場に外の音が入らないような部屋割をしたに違いない。その逆に中からの声も外に漏れないのだ。震えている佳織の前に立って昌介はいきなり頬を張った。使う暴力はこれだけで足りた。佳織は制服のスカートを両手で押さえて泣いていた。そのスカートの中に佳織が隠したい秘密があることは間違いなかった。その秘密が何であるか昌介に見当は付いている。最後の気力を奪うように昌介は佳織の反対側の頬を張った。床に倒れこんだ佳織は割れたガラスの上に手をついてしまい、鮮血が流れた。
床にガラスの破片が落ちていないところまで昌介が佳織を引きずっていき、性器を見せるように言った。
「お願いです！何でもしますからそれだけは！」
佳織が床に額をすりつけて哀願した。昌介は一言も応えずに顎をしゃくった。逆らえば余分に痛い思いをするだけと佳織はあきらめるしかない。佳織は震える手をスカートの中に差し入れて、淡いクリーム色のショーツを脱いだ。スポーツ用に汗をよく吸う記事で作られたショーツが佳織の手から流れる鮮血で汚れた。佳織はスカートの前を押さえて床にへたりこんだ。
「脚を開いてスカートをまくるんだよ。」
昌介が残酷に言った。
「お願いです！何でもしますから、誰にも言わないでください！」
佳織が泣き叫んでも昌介は動じなかった。今にも死にそうなくらい荒い息をしながら、佳織は尻を床について膝を立て、脚を開くとゆっくりとスカートをまくった。シャツはスカートの外に出していたので性器を隠すものは何もない。髪と同じ色のやや密集した佳織の陰毛はきれいなたまご型に整えられ、その下にある性器には昌介が思った通り、クリトリスと大陰唇からはみ出した小陰唇がまだつい

ていた。
　昌介に向って股を開いた屈辱的な姿のまま佳織はすすり泣いた。昌介が携帯電話のカメラを自分に向けるのを見て佳織がついに破れかぶれの抵抗に出た。
「いや！返して！返してよ！」
金切り声をあげて佳織が昌介の腰に体当たりをしたが昌介にはは予想の範囲で半歩だけ後ろに下がって踏みとどまった。佳織は必死で昌介の手から携帯電話を取り返そうとするが、身長差がありすぎた。昌介に突き飛ばされて、佳織は床に尻もちをついた。昌介のシャツに佳織の手から流れた鮮血が付いていた。苛立った昌介が歯をむいて威嚇すると佳織の目は怯えきった小動物のようだった。撮りますよと陽気な声に続いてカメラのシャッターの音に似せた電子音が携帯電話から出た。そのたびに大きく脚を開いた佳織の体が感電したように痙攣した。何枚か撮影した後、昌介は撮影した写真を添付したメールを無差別に送信しようとした。登録してあるメールアドレスの全てに同じメールを送信できる機能なら当然付いているが、説明書なしでこういった操作に昌介は多少手間取った。
「お願いです！それだけはしないで！お金があるところを知っていますから。」
携帯電話の画面に昌介の意識が向いているその時が逃げ出す最後の機会だったが、佳織はなりふり構わず泣いて訴えた。案内に沿ってキーを押すだけだから、初めての機械でも時間さえかければ昌介にも使えた。昌介は佳織がまだ割礼を受けていないこと、教授が割礼で切り取られた性器をコレクションしていることを文章にし、証拠の写真を添えて、後はキーを一度押せば携帯電話に登録してある数十件のアドレスに同時に送信されるようにした。
　佳織は床に突っ伏して泣いていた。佳織が通う中高一貫の進学校でも割礼は校則で義務となっていた。高等部に進級すれは早々に割礼を受けさせられる。校則は厳しく、課せられる割礼の内容は過酷だ。クリトリスの体内に埋もれた根の部分までと小陰唇の全てを切

除する規則になっていた。佳織が学校にいられるということは割礼を受けた証明書を偽造したに他ならない。そして、教授の立場ならそれが可能なのだ。公文書を偽造したのだから犯罪に当たるだけではなく、当然の通過儀礼を忌避した佳織は社会的な烙印を背負うことになる。少なくとも今いる学校から放校処分が下されることは確実だった。もちろん、父親の教授もこの件で地位の全て失う。この手の不正が行われているのは関係者にとっては公然の秘密で、昌介も噂なら聞いていた。だから、佳織が動揺を見せたとき、昌介はこのことにすぐ気付いた。

「うつ伏せになって手を後ろで組むんだ。逆らうとどうなるか分るね。」

佳織は昌介の言葉に泣きながら従った。佳織に奪い返されないようにしっかりと携帯電話を握って、昌介は佳織を拘束しにかかった。佳織が自分から組んだ腕にポケットから出したテープを巻きつけるだけだから片手でも簡単だ。両手を拘束してから昌介は携帯電話を置き、今度は佳織の体をテープでぐるぐる巻きにした。

芋虫のように拘束された佳織の横で昌介は携帯電話を拾い上げた。

「お願いです、何でも言うことを聞いたでしょ、秘密にしてくれたら何でもします！」

泣いて訴える佳織の端正な顔が涙と鼻水で濡れていた。泣いても昌介が慈悲をかけてくれそうにないことぐらいは分かってえいたが、こうなっては佳織には他にできることがなかった。大学病院の備品を勝手に持ち出し、既に将来を棒に振っている昌介には取引は無意味だった。昌介は無造作に送信ボタンを押した。

「うわあああああ！」

佳織が声を張り上げて泣いた。まさに佳織が破滅した瞬間だった。

「返して！私の携帯返して！」

佳織が泣き叫んだ。もう携帯電話を取り返したところで送信されてしまったメールは回収できないが、もう佳織にはそれを考える冷静さなど残っていなかった。この携帯電話を昌介は持ち去ることにし

た。先刻、送信したメールと同様の物を教授の職場である病院と佳織の通う学校、後は県の教育委員会に送信するためだ。
昌介が勝手口から表に出ると、夕刻ではあったが日の長い時期なのであたりは明るかった。来たときよりも人通りはあったが、平然と歩いて乗ってきたトレーラーまで歩く昌介を誰も怪しまない。高級住宅街だから医者を職業としている住人も多く、ネクタイを締めた男が病院のロゴの入ったトレーラーに乗りこんでも特に怪しまれなかった。それでも早々にこの場を立ち去る必要はあった。佳織の携帯電話に登録されていたアドレスはほとんどが友人たちだろうから、そろそろ誰かがメールを見て、当局に通報しているころだ。昌介は無駄にエンジンをふかす下手な運転であわただしくトレーラーを発進させた。昌介の教授への復讐はこれで済んだ。将来を棒に振った高すぎる代償に早くも後悔の念がわいたが、もはや引き返すには遅かった。昌介が当局の手に落ちる前にもう一つ遂げようとしているのは、長年の願望通り、可憐な少女に自分の手で割礼を施すことだ。そのための場所もすでに昌介は選んであった。

万引きなどの瑣末な犯罪より、猪の食害を相談されることのほうが多い駐在所の警察官が、エンジンをかけたまま林道の路肩に停まっている不審な軽自動車を発見したのは夏の早朝のことだった。この警察官は出勤の前に林道の突き当たりに一人で住んでいる老人の様子を見るのが日課であるだけで、この林道は普段はほとんど人通りがない。窓から様子お伺うと運転席の男は疲れ果てて眠っているようだった。この男が昨晩、女子中学生を襲い、性器を切除した手配犯の昌介とは警察官はまだ気づかない。風采の上がらない髭の伸びた男が大学病院の医者のイメージに合わなかったからだ。頭に白いものが混じった警察官はこの寒村に赴任してきて以来、捕物の経験などない。体力の衰えもあって抵抗でもされれば一人で不安があり、夜勤明けに出動させては後で嫌味の一つも言われるだろうと思いながらも、念のために応援を呼んだ。応援の警察官が到着するまで車の中の男はよほど疲れきっているのか、すぐそばで警察官が見張っていることに気づかず眠りこけていた。応援が駆けつけるまでの間に、ナンバーからつい先刻に盗難されたと通報があった車と判明した。警察官の人数がそろうまで一時間もかかったが、その間も軽自動車はエンジンの音を響かせるだけで動かなかった。

刺又を持った若い巡査が車を取り囲み、最初にこの車を発見した警察官の上司が窓を叩いた。いつもどおりの職務質問だが、平和な田舎で緊迫した状況を経験してこなかったがためにこの警官たちは失敗をした。先にパトカーなどで進路をふさぐべきところ、生身の警察官で取り囲んでしまった。目を覚ました昌介は狼狽し、アクセルをいっぱいに踏み込んだ。エンジンはかけっぱなしだったが、普段は運転をしない昌介はギアをニュートラルから二速に入れてしまった。それでもアクセルを一気に踏み込んだせいでエンジンは止まった。

らず、車はのろのろと進んだ。ここで若い警官が車の前に立ちふさがって両手でボンネットを叩いたが昌介はかまわずアクセルを踏み続けた。エンジンの回転数が上がり、ある点を過ぎたところで車は白煙を上げて急加速し、その若い警察官を跳ね飛ばした。若い警察官は激しく路面に叩きつけられ、現場に怒号が飛び交った。林道の先は行き止まりなのだが、混乱の中で発砲が命令され、銃声と同時に車の窓ガラスにひびが入った。制御を失った軽自動車は林道を飛び出し杉の木に正面からぶつかって止まった。駆け寄った警察官は車内に飛び散った昌介の脳漿を見ることになった。近くの杉林の中でガソリンが尽きて昌介が乗り捨てたトレーラーが見つかるのはその日の昼ごろだった。

普段なら、犯人の射殺で終わったこの事件の話題も大きく取り上げられたはずだが、その日の昼のニュース番組は名門女子高で起こった割礼逃れ事件の話題が中心だった。昌介に秘密を暴露された佳織の事だ。名前だけは伏せられていたが、名門校で実父が大学病院の教授で、書類の偽造に加担していたとなると個人が特定されるのは時間の問題だった。教育委員会がその日のうちに調査に乗り出し、学校は処分の検討に入った。少女の性器をコレクションしていた父親の教授は行方をくらまし、香織はその日のうちに自主退学を余儀なくされた。

昌介がたまたま発見されなければ、次の被害者が出ていたことは確実で、犯罪の重大性は昌介の起こした事件のほうがずっと大きいはずだった。後に昌介が次の被害者を物色中に疲れはて、ほんの少し休むつもりが眠りこけてしまったらしいことが分かった。盗難車の車内から香織を昏倒させたエーテルの小瓶が発見されたからだ。土地鑑のない昌介が先が行き止まりと知らず、部活動で早朝に登校する女子学生を待ち伏せて、眠らせた上で例のトレーラーに連れ込む気でいたのだ。それでもマスコミが大きく取り上げたのは香織の方だった。もちろん、マスコミの言い分では視聴者に要望に迎合しただけのことだった。

時間はやや遡り、前日の夕刻のことだ。香織と同じ学校の中等部に通う智子の携帯電話にメールの着信があった。差出人は香織となっていた。香織の携帯電話が昌介の手にあるなどもちろん智子は知らない。話好きの香織がメールで連絡をするのは珍しいが、文面はいつもの調子で智子は何も不審に思わなかった。香織が撮りためた写真にキャプションをつけて保存していたことと、送信済みのメールを削除していなかったことが智子にとって不運だった。香織がラクロス部に所属していること、その後輩に容姿の良い智子がいることが昌介に知られてしまった。そのせいで、送信済みのメールから香織の文章を真似ることにも昌介は成功してしまったのだ。

昌介が成りすましている香織からのメールの内容は練習が終わったら、そのまま埠頭の近くにあるカラオケボックスまで来て欲しいとあった。智子は学内の強化選手で中等部に通いながら部活では高等部の選手と一緒に練習をする。毎日のように居残りの練習をしている智子と違い、ミニスカートのユニフォームが気に入って体重を落とす目的でラクロスをしている香織は早々に帰宅してしまう。そんなわけで、智子にとって先輩とはいえ香織は気楽に付き合える間だった。こうして遊びに誘ってくれることもたまにあることだった。香織の携帯電話に保存されていた智子の写真を見つけたとき、昌介は自分がとんだ失敗をしたことに気づいた。登録されていたメールアドレス全部に香織の秘密を暴露する内容を送信してしまった後だった。慎重に行動しているつもりでもすでに昌介は冷静さを欠いていた。昌介にとっては幸いなことに、香織は学校の友達とその他の電話番号やメールアドレスを分けて登録してあった。そのことを知らない昌介が一時とはいえ大いに狼狽した。メールにあったカラオケボックスが以前に行った事のある店だったことは智子にとって二重に不運だった。

智子を呼び出したカラオケボックスへの近道になる埠頭近くの倉庫街で昌介が待ち伏せていた。カラオケボックスが臨時休業なのは確認済みで、往復どちらでも智子がここを通ってくれれば成功とい

う算段だった。元来が小心者の昌介が緊張と興奮で判断力を失っているだけで、冷静に考えて成功の見込みより失敗する見込みのほうが高い計画だった。昌介は病院から持ち出したトレーラーを倉庫脇の道に停め、タイヤの近くにしゃがみこんで様子を伺った。ここ界隈は貸し倉庫ばかりでもともと人気は少ない、古い倉庫の中には借り手がつかないまま錆びるに任せているものもある。賃貸料が安いので資金に乏しい若者が出店している酒場がいくつかあるが、開店まではまだ少し時間がある。倉庫の影から夏の制服の少女が見えた。制服を着て、こんなところに一人で来るとしたら、昌介に呼び寄せられた智子に間違いなかった。罠というには稚拙すぎる昌介のたくらみに陥ってしまったのは、智子の思慮の浅さではなくいくつも重なった不運のせいだった。

智子がトレーラーの脇まで来たところで、昌介は立ち上がって呼び止めた。予め、車の故障を装うと決めてあった。そのために、昌介はいかにも車の下を覗き込んでいるようにしゃがんだ姿勢で待っていたのだ。

「ちょっとごめんなさい、手鏡を持っていたら貸してくれませんかね。」

内心の緊張を押し殺して、昌介は智子に声をかけた。病院のロゴが入ったトレーラーで昌介が白衣を着ていたことから信用されたらしく、智子は快くカバンから手鏡を出した。車の下にさ手鏡を差し込んで少しの間だけ持っていてくれと昌介は智子をトレーラーの後ろに誘導した。

「怪我をしたんですか？あたし絆創膏を持ってますよ。」

手鏡を車体の下に差し込むためしゃがんだ智子が章介の白衣についた血に気づいた。ガラスで出をきった香織につけられたものだ。昌介が白衣の下から隠し持っていた鞭を取り出したのを見て智子の表情は恐怖で凍りついた。もっと十分に油断させてから不意を襲うつもりだったが、血に気づかれたことで昌介は焦って性急な行動に出た。

昌介が隠し持っていた鞭は一般に想像されるような皮製のよくしなる物ではない。見た目は竹刀ほどの太さと長さのある丸い中空の棒だ。グラス繊維製で非常に軽くできている。これで鞭打てば骨折などはしない代わりに、どんな気力も萎えてしまうほどの激痛が走る。性器を切除する際に恐怖に駆られた少女が死に物狂いの抵抗をすることがある。職員に危害が及ぶこともあり、そのためにこのような鞭まで用意されているのだ。もっとも、これを使用してしまうと、それが適正であったと公に釈明せねばならず、あとの手続きが煩雑になる。それを嫌ってたいていは数人掛で組み伏せてしまうことが多い。智子に立ち上がる間を与えず、昌介は力いっぱい鞭を振り下ろした。

「ぎゃ！」

背中をしたたかに打たれて智子は火傷した猫のような叫び声をあげた。智子はアスファルトの地面の上に倒れ、背中をそらしてうめいた。こうなってしまえば日ごろいくら鍛えていても智子に抵抗のすべはない。昌介は念を入れて二回三回と鞭を振った。智子が体を丸めて震えているだけになってから、昌介はその小さな体を引きずり起こし、トレーラーの中に引きずり込んだ。

トレーラーの中は二つに仕切られている。もともと天幕の中に野戦病院を設営するために考えられた配置で、狭い中に器具が効率よく配置されている。ドアから入ってすぐが切除を受ける少女に処置を施す場所で、ここで手術着に着替えさせ剃毛する。天井から下がった分厚いビニールのカーテンで仕切られた向こう側に、四肢を拘束する禍々しいベルトのついた台がすえられている。少女たちの恐怖心をあおってしまうにも関わらず、あえて透明なビニールで仕切るのは何か事故が起こったときに外にいる助手たちが気づきやすいためだ。智子は狭い処置室で顔をかばって震えていた。

「お願い！ぶたないで。」

昌介がうなって威嚇すると智子は泣きじゃくった。トレーラーの出入り口は内側からはいつでも開けられるが、そこは昌介が仁王立ち

になっていて、小さな体の智子ではどうすることもできない。
「そこの緑の服に着替えろ、素っ裸になってから！」
緊張と興奮で息を切らしながら昌介は命令した。智子は泣くばかりだったが、昌介が鞭を振り上げるそぶりを見せるとびくりと体を痙攣させ、震える指で開襟シャツのボタンを外しにかかった。
トレーラーの中を二つに仕切ってあるので大変に狭い、割礼の前の処置のための部屋は三方に棚があり、そこに手術着などが収納されている。後は体を伸ばして寝られないほどの小さな寝台と椅子があるだけだ。このビニールの寝台で剃毛などの処置をする。そういう処置をしてみたかったが、昌介は智子を油断無く見張っていなければならなかった。昌介の背後にあるドアは内側からはいつでも開くので、うっかり逃げ出されれば昌介に捕まえられる相手ではない。なにしろ、智子はラクロス部で活躍を期待されている選手なのだ。
智子は開襟シャツの下に学校指定の体操服を着込んでいた。汗でぬれてしまった下着の代わりで、胸の膨らみがほとんど目立たない程度なので少しの間ならブラジャーなしでも差ほど困らなそうだった。智子は体操服を脱ぐのに躊躇したが、昌介は歯をむき出して威嚇した。智子は泣きべそをかきながら昌介に背を向け、体操服を脱いだ。日焼けした智子の体もユニフォームで隠れている背中は少女らしく白い。その背中に赤く鞭の痕がついていた。しばらくすればこの赤く貼れた痕はなかなか消えない青痣になる、体操服を首から抜いたので、汗を吸っていた智子の短髪はくしゃくしゃに乱れた。汗と石鹸の匂いがした。智子は泣きじゃくっていたが、昌介は許さず、裸になるように怒鳴りつけた、智子は壁に向かいスカートの中に手を入れ、ショーツを脚から抜き取った。機能一点張りで何の飾りも無いスポーツ用の薄い灰色のショーツだった。震える手で智子がスカートのホックを外すと、ひだのある膝丈のスカートは床に落ちた。湿度の高い季節で智子の体からでる湿気を吸って、スカートの生地もだいぶ重くなっていた。脂肪の薄い小さいが形のいい智子の尻は白かった。

昌介は壁の棚から緑色の手術着を下ろさせ、智子に着るように言った。性器切除用なので丈はへそが隠れる程度しかない手術着は消毒された状態でビニールの袋に密封されている。簡単に破れる薄い袋なのだが、怯えきった智子の震える手には力が入らなかった。苛立った昌介が手を伸ばすと智子は手術着の袋を両手でつかんで顔をかばった。昌介は鞭をもってないない左手で乱暴に袋をつかんで引っ張って破いた。

「ひぃ！叩かないで！」

智子はかすれた悲鳴をあげて、震えて泣いた。しばらくそのまま身をこわばらせていた智子はそっと薄目を開けると鞭を持った昌介が苛立った様子でにらんでいた。昌介の握っているグラス繊維性の鞭は黒く、長さも太さもあって威圧感がある。軽いのでどんなに強く打っても骨折などはしないのだが、痛みはどんな気力も萎えてしまうほどひどい、一度その痛みを経験すればこの鞭を見ただけで身がすくむようになる。智子は昌介に背中を向けて手術着を着た。昌介は智子に正面を向かせ、手術着の胸元を鞭のはだけさせた。手術着の裾を両手で引っ張って股を隠そうとしていた智子は鞭が自分のほうへぬっと差し出されると、目をつぶって体をこわばらせ、抵抗はしなかった。肌の色とほとんど見分けのつかない未発達で陥没した乳首が小さな乳房の上にあった。

かわいらしい少女に自分で割礼を施すという長年の願望が叶おうとしているのに、昌介の胸中には満足はなく焦燥ばかりだった。人生を棒に振った代価に見合うように、綿密に計画して十全に願望を満たすつもりが実際にはその逆か起こっていたからだ。それも、誰かの妨害ではなく、昌介自身が理由だった。割礼の前には大腸菌による炎症を防止するために浣腸が行われ、陰毛が剃られる。しばらく大便をせずにすめば、その間に傷口が乾き、炎症の危険は下がるからだ。思春期の少女にはこれだけでも大変につらい。昌介にとっては割礼をより残酷にする儀式で、その祭司役を務めるのが願望だった。少女たちの苦痛に関係なく機械的に勧められる処置に昌介は

様式美に似たものを感じていた。智子の容姿が小さな写真で見るより幼く可愛らしかったので、つい興味から胸を見てみたくなった。裸をさらさせて辱めるという要素は昌介の考える様式美の中に含まれない。少女たちの羞恥はあくまで事務的な流れ作業の結果であるべきところ、つい自ら禁を破ってしまって昌介は悔いた。トレーラーを停めた隣は開き倉庫で、鍵を壊した上で中に浣腸と剃毛の用意はしてあった。いざ決行となって、昌介はあがってしまい、とっさにトレーラーのほうに智子を引きずりこんでしまった。扉を閉めてしまえばトレーラーの中から外は見えず、防音されているので内部の叫び声が外に聞こえないが、外の音も内部からは聞こえない。うっかり智子を外に出したら通行人がいるかも知れず、浣腸はもう諦めるしかなかった。

昌介はこのときになって智子を台の上で拘束する手順を考えていないことに気づいた。ベルトで台の上に体を固定するには持っている鞭を一度手放す必要があった。その間、智子が無抵抗でいるか分からず、もし抵抗されれば一人で拘束するのは難しい。智子のほうは昌介の意図がまだ分からない。最初は物取りと思い、トレーラーの中に連れ込まれてからは強姦されることに智子は怯えた。その後で口封じに殺されるかも知れないと思えば智子は背筋が凍った。

「これから割礼をするからな、いい声で泣いてくれよ。」

言ってからまた昌介は後悔した。淡々と儀式を執行するようにやろうと決めていたのに、また泣けと余計な一言を言った。智子は愕然として怯えた目で昌介を見た。強姦よりもよほど事態は深刻で、智子はこの悪部が覚めてくれることを願っが、鞭で打たれて腫れた背かなの痛みがこれが現実だと分からせた。昌介は無慈悲に鞭の先で智子を小突き、隣に割礼を施す部屋に歩かせた。智子を拘束する段取りは決めていなかったが、いまさら昌介は後に引けない。香織を昏倒させたようにエーテルの容易をしなかったことを悔やんでももう遅かった。

昌介の恐れていたことが起こった。医者の習慣で必要な器具を予

めトレーに並べておいたのが災いし、智子がメスも持って抵抗をしてきた。
「ここから出して！警察にも言わないから！お願い出して！」
メスを両手で握り締めて、智子は金切り声を上げた。刃先が鈍ったら交換する使い捨てのメスで刃渡りは鉛筆を削る小刀より小さい。それでも当たり所によっては重症になるし、わずかでも出血すればひるんだ隙に智子には逃げられてしまう。もともとの昌介は小心者で、格闘技などの荒事は練習したことすらない。相手の目的が強姦ではなく、割礼とは智子の理解の外だった。割礼に性的な興奮を覚える者は男女を問わずいて、現場を盗撮した映像なのが闇市場に出回っているのだが、智子のような中学生が知ることではなかった。昌介に智子の命を奪い意図は無いが、智子にとっては強姦魔よりよほど危険な変質者を相手にした命がけの抵抗だった。メスを持った智子の両手がぶるぶると震え、卵型の小さな顔の割りに大きな目は真っ赤に充血して涙が流れていた。
　昌介は智子と向き合った荒い息をしていた。このような抵抗にあったときの段取りは何も考えてなかったため、狼狽していることを智子に悟られないように昌介は虚勢を張って威嚇することしかできなかった。ついに智子がメスを持って突進してきた。こうなると昌介に虚勢を張る余裕は無い。昌介は無様に狼狽して逃げ腰で鞭を振り下ろしただけだった。犬に吠えかかられた弱虫の子供のようだった。
「きゃ！」
それでも、智子は手首を押さえて床にうずくまった。まったくの偶然で昌介の鞭が手首に当たり、智子は最後の頼みの綱だったメスを取り落とした。天井が低い室内で大きく振りかぶれなかった分だけ早く振り下ろせたためで、そうでなければ智子のメスのほうが先に昌介に体に届いていたはずだった。もちろん、偶然で昌介が狙ってやったことではない。刃物を持って突進された恐怖が収まらない昌介は立て続けに床にうずくまった智子に鞭を振り下ろした。

「ぎゃあ！ぎゃああ！」

怪鳥のような叫び声を上げる智子が静かになった。昌介が小さな体を足蹴にして仰向けにすると、智子は白目をむいて失神していた。昌介が智子の体を持ち上げようとすると、床が小水で濡れていた。昌介が見たかったのは避けられない通過儀礼に怯える少女で、自分はその通過儀礼の執行者になりたかったのだ。智子は怯えてはいたが、犯罪者を前にした恐怖のためだった。放射線科の遺志であった昌介に性器切除を執刀する機会はない。その願望を満たすために人生を対価にしてこの犯罪に手を染めたのに、それは満足を与えてはくれなかった。理不尽にも苛立ちは智子に向かい、智子の体を台に担ぎ上げる前に昌介はもう一度鞭を振り下ろした。失神した智子は何の反応もせず、苛立ちが増しただけの昌介は手近にあったガーゼのポットを床にたたきつけた。この手の破壊衝動で、本心で破壊したがっているのは自分自身で、いわゆる八つ当たりは代償行為なのだ。ステンレス製のポットは派手な音を立て、床にガーゼが散らばった。

智子が失神している間に昌介はその体を台にしっかりと固定した。太いベルトで主な冠絶を全て固定されてしまえば、たとえ目を覚ましても智子に抵抗はできない。トレーラーは防音されていて割礼を受ける少女の叫び声さえ外には漏れない。順番待ちをしている少女たちを恐怖のどん底に突き落とす悲鳴は、処置をする側の都合でドアを開けっ放しにすることが多いからだ。周囲に住宅が多ければ、ドアを閉めて叫び声が外に聞こえないようにする、昌介は散らかった器具と智子の私物を手術着の入っていた袋にまとめ、トレーラーの助手席に放り込んだ。その上で、器具を整えなおした。これで昌介の望みどおり、見た目は津上の割礼と同じになった。ようやく昌介は自分の体が汗に濡れて臭いを放っていることに気づき、手術着に着替える前に全身をよく拭いた。棚に少女用の手術着が何着も収められているので、それにアルコールを染みさせ体を拭くと、汗が引く上に消臭にもなった。脱ぎ捨てた服とタオル代わりにした手術

着が目障りだと思っていたところ、処置のための寝台の下に使われていない収納を見つけた。足で引き出せるように作られたゴミ箱で、昌介はそこにまとめて自分の服まで捨てた。緑色の手術着に血を付けて逃走するわけにもいかず、後で服をゴミ箱から引っ張り出す羽目になるが、昌介はそこまで考えていなかった。

全て準備が整ったあとでも智子は目を覚まさなかった。そのうち、智子が大きないびきをかきはじめたので、昌介は台の角度を変えて智子の体を起こした。弛緩した筋肉のせいで舌が気道をふさぎかけていたのだ。目を覚まさない智子は大きく脚を開いた姿勢でぐったりとしていた。昌介は小水で濡れた智子の股間に鼻を近づけてみた。汗と小水の匂いに混じって、清潔感のある石鹸の匂いもした。肛門の辺りはさすがに糞便の匂いがしたが、ひどい悪臭というよりは乳製品の匂いを強くしたようだった。昌介はキャスターのついた小さな椅子を引き寄せると智子の脚の間に座った。ズボンの中から勃起した男根を出すと、昌介は智子の股間に舌を這わせながらそれを手でしごきはじめた。割礼の手順には含まれないので、昌介には智子が失神しているうちに済ませたいことだった。雑菌を持ち込まないように特に注意が必要なこの部屋で自慰など論外なのだが、不衛生な服のまま何度も出入りした後では今更だった。健康状態のいい智子の小水はあまり匂いはしなかったが、部活動で汗をかいた後だけに塩味は強かった。尻の谷間は汗がたまりやすく肛門は特に塩辛かった。塩気がもっとも強かったのは、大陰唇をめくった裏側にびっしりとついていた恥垢で、昌介は鼻を鳴らしながら最後まで残さず舐めとった。智子の陰毛は産毛のように柔らかく薄かった。昌介にとって、これを剃り落とすのは智子が目を覚ました後でなければならなかった。

長い失神から目覚めた智子が最初に目にしたのは自分の股間を煌々と照らす無影灯だった。ぼんやりした頭で周囲を見まわした智子は恐ろしい器具を乗せたトレーを前に立っている昌介を見た。

「きゃああ！いや！たすけて！」

智子は悲鳴を上げて暴れて逃れようとしたが、すでに失神している間に裏返した蛙のような姿で拘束されていてどうすることもできない。

「殺さないで！なんでもしますから！殺さないで！」

智子は懇願した。

「殺しはしないよ、割礼をするだけだよ。」

割礼を受ける少女に声をかけるときは勤めてやさしい口調を心がけるのはマニュアルにもある。抵抗の手段を完全に封じて、ようやく昌介にもそれを思い出して実行する若干の余裕ができた。智子にとっては事態が好転したわけではなく、絶望して泣くことしかできない。章介が言った殺しはしないという言葉を信じて、この災厄が一刻も早く過ぎ去ることを願うしかない。もう余計なことは言わないと自分で決めていたので昌介は無言だった。

昌介がわずかに陰毛の生えた恥丘にジェルを塗りつけただけで、智子か金切り声をあけて泣き叫んだ。剃毛のための潤滑剤でもちろん痛みは無い。智子が鼻水をすすりながらしゃくりあげる声を聞きながら、昌介は剃刀を使った。毛を剃れればいいので、これは市販されている髭剃り用の安全剃刀と同じものだ。少ない陰毛はすぐに剃り終わった。智子の白い滑らかだった尻に鳥肌が立っていた。陰毛を失うと智子の性器はいっそう幼い印象だった。わずかにはみ出した小陰唇に色素が沈着していなければ幼女のそれと見分けがつかないほどだ。

「いや！いたい！いたい！」

アルコールで恥丘から肛門まで念入りに拭われて智子が泣き叫んだ。敏感な粘膜にアルコールはしみるが、本来なら泣き叫ぶほどの痛みではない。恐怖のあまりほんのわずかな痛みでも智子は幼児のように泣いた。ヨード液が塗られ、智子の股間が紫色に染まると、いよいよ切除にかかるときが来た。ここまでに一連の作業で、そもそも専門外の昌介の手つきはぎこちない。直接に手で触れず、薄いゴムの手袋をしたうえでピンセットで股間を拭うのだが、昌介は何度か

ガーゼを落としていた。手際の悪さは切除される智子にとっては苦痛がそれだけ長引くことを意味した。
　昌介はピンセットとメスと手に取り、大きく息を吐いて落ち着いて切除にかかろうとした。
「いや！お願いです！エッチしてもいいですから！誰にも言いませんから！切らないで！」
智子が金切り声を上げて昌介の集中力は乱れた、もとより強姦する気ならこんな手間はかけていない。苛立って怒鳴りつけようとしたが、ここは無言で機械のように切除を行い宇野が割礼だと昌介は思い直した。ピンセットで大陰唇をめくると膣口が見えた。処女膜があることを昌介は知っている。膜の一部が破れていたが、性交ではなく激しい運動のせいだった。智子の様子からして性体験があるとは昌介も思わなかった。昌介は小陰唇をピンセットで引っ張り、根元にメスを入れた。教授が集めていた標本のように陰核から小陰唇までつながったまま切除したかったが、昌介のそんな技術は無い。
「ぎゃああ！ぎゃあ！」
智子の悲鳴は火のついた猫のようだった。熟練した医師なら最小限にメスを入れるだけで小陰唇を切り離せるが、昌介には無理だ。メスが入るたびに智子がすさまじい叫び声をあげた。切除に集中している昌介には智子の表情が見えない。録画の容易をすべきだったと昌介はいまさら悔やんだ。両方の小陰唇を切り離して昌介が顔を上げると、智子は酸欠に陥った金魚のように口を開け閉めして、泡立った唾液が頬を伝って流れていたがまだ意識はあった。
　昌介が陰核の包皮を切り離しにかかると、智子の叫び声の間に笛のような呼吸音が混じった、苦痛があまりに大きく、喘息の患者のように気管が狭窄しているためだ。呼吸が満足にできず、智子は水から挙げた魚の様だった。包皮を切除し終わったところで、昌介は智子の口に歯科医が使うような吸引用のチューブを差し入れだ。吐しゃ物が喉に詰まって窒息する事故を防止するため、こんな装置も備えられている。泡だって粘度を増した唾液と少量の胃液が吸い出

された。智子の短い髪と手術着は汗で濡れて水でもかぶったようだった。差し込んだチューブで口をこじ開け、喉の奥に詰まったものがないことを確認してから昌介は智子に酸素マスクをかぶせた。もちろん、失神させないためだ。再び切除にかかろうとすると小陰唇と陰核の包皮を失った智子の股間は血まみれで、これから切り落とす陰核の本体がピンセットでもつまみ難いほどだった。昌介は生理食塩水の容器をとり、智子の股間を洗った。
「ぎゃあああ！」
いくら浸透圧を体液に近づけてあるとはいえ、切ったばかりの生々しい傷を洗われればひどくしみる。智子があげたひときわ大きな悲鳴は酸素マスクのせいでくぐもって聞こえた。
　智子の股間で出血は続いていたが、べっとりとついていた血が流されて、作業はしやすくなった。血を洗い流して赤く染まった食塩水は智子の尻の下に置かれた容器に溜まった。
「ひいい！！おかあさん！おかあさん！」
むき出しになった陰核をピンセットで引っ張られ、智子は泣いた。陰核には深い根があり、その根をなるべく深く切除するために強く引っ張るのだ。十分に引っ張ったところで、昌介は陰核の根元をメスで切り離した。悲鳴はあがらず、智子の全身の筋肉がマラリヤの患者のように痙攣した。昌介が顔を上げると智子はだらりと舌を出して失神していた。薄い胸がわずかに上下していなければ死んでいると思ったところだった。昌介がアンモニアを嗅がせると智子はむせて失神から覚めたが目はうつろで呼びかけにも反応しなかった。
仕方なく、昌介は傷口に止血用のジェルを塗り、ガーゼを当てて処置を終えた。このジェルは血小板を主な成分にするものだが、わずかではあるが血栓を作る危険があるので、出血がひどい場合以外は使用されない。専門家が執刀した傷口のように昌介の技術ではきれいに切除できなかった。また、衛生管理も粗末にせざるを得なかったので、抗生物質を含むこのジェルを遣ったほうが安全と昌介は考えた。感染症や大量出血で大事に至っては昌介の目的にそぐわない

のだ。
人気の無い別の場所に移動してから、昌介はいくらか意識のはっきりしはじめた智子を下ろした。高架下のコンクリートの地面に智子は下半身むき出しの手術着のままへたりこんだ。痛みで立ち上がることもできず、夏だと言うのに智子は全員に鳥肌を立てて震えていた。
「自分で助けを呼べるだろう。ここは分かるな、学校から遠くない。」
そう言って昌介は智子に携帯電話を渡した。智子がいつも通っている学校が頭上を通る高速道路のすぐ近くの出口付近にあるから、よく知っている場所で助けを呼ぶのは簡単だった。渡された携帯電話が香織の持ち物だと気づいて智子は愕然とした。智子にもようやく香織に成りすました昌介におびき出されたと事情が理解できた。
「先輩はどうしたの？」
震えながら智子は聞いた。昌介は携帯電話の中身を見れば分かると言い残して、そのまま去った。間もなく智子は保護され、警察は緊急配備を敷いたが、そのころには昌介は遠く地方へ逃れていた。時刻はすでに真夜中で、交通量の少ない高速道路は運転に不慣れな昌介にとっても楽に走れた。
あと二時間ほどで日が昇るころ、昌介の運転するトレーラーは燃料切れ寸前だった。ラジオですでに昌介は自分が手配されていることは知っているので、ガソリンスタンドには寄らなかった。辺りはすでに田舎で開いている商店はなく、もちろん人通りもない。昌介は林道を見つけ、そこから杉林になっている山を登った。途中で間伐した後なのか、木々の間が広くなっている箇所を見つけ、林道を外れて林の中に分け入り、少し行ったところで昌介はトレーラーを停めた。燃料計は赤い警告のランプが点灯していた。どっと疲れが押し寄せると同時に虚しさと後悔が湧き上がった。他人を傷つけたことへの良心の呵責ではない。払った代価に対してあまりにも少ない満足しかえられなかったことの後悔だった。昌介は学生時代に単

位を稼ぐためにとった法医学の授業をぼんやりと思い出していた。法医学と言っても遺体から犯人の証拠を探すものではなく、犯罪者の心理を扱うものだった。快楽のため連続殺人を犯す犯人は犯行から犯行までの間を満足して過ごすわけではない。むしろその逆で、もっと手際よくもっと入念に計画すればもっと満足を得られたはずと後悔し続ける、そしてその欲求が満たされることはない。

昌介は助手席に智子の持ち物が置きっぱなしになっていることをようやく思い出した。スポーツバッグをあさってみると、ノートとビニール袋に入った汗で濡れた下着とユニフォームが出てきた。バッグの底にペットボトルに入った飲みかけのスポーツドリンクを見つけた昌介は急に喉の渇きを覚え、半分以上の残っていたそれを一気に飲み干した。温くはなっていたが甘露のようにうまかった。前日の昼から昌介は食事どころか水も飲んでいなかったのだ。人心地ついた昌介はさらに智子の持ち物を探った。汗で濡れた衣類は土埃のにおいがした。スポーツ用のショーツは二枚あった。一枚は部活で汗が染みて脱いだもの、もう一枚は昌介に脱がされた替えのものだ。汗をたっぷり吸って濡れたほうを昌介は手にとって裏返してみた。クロッチには性器の形に縦に長い汚れがついていて、嗅ぐとアンモニアとチーズの匂いがした。クロッチの塩辛い味を舐めながら昌介は自慰をした。一回射精しただけでは収まらず、もう一枚のショーツも使い、他の汗の染みた下着類も使って昌介は三回連続で自慰をした。これほど充実した自慰は久しぶりだが、このために犯罪者になったと思えば大乗は高すぎ、また虚しさが昌介を襲った。

当局の手に落ちる前にもう一人でも犠牲者を探し出し、今度こそ手際よく満足する割礼をしようと昌介は薄明るくなり始めた林道を歩いた。少女を見つけたら拉致する目的で昌介はエーテルの小瓶をポケットに入れていた。昌介は路肩に停まった軽自動車を見つけた。ガソリンを失敬できればまたトレーラーを動かせると昌介が近づくと、車には鍵がついたままだった。僥倖だと昌介は思った。車が置いてあるなら山中に民家があり、待ち伏せれば割礼を受ける前の少

女に出会えると昌介は考えた。実際のところ、この車は地衣類の採集ためにキャンプを張っていた学生がうっかり鍵を指したままにしたもので、この山中に民家はただ一軒だけ、住んでいるのは一人暮らしの老人だけだった。そんなことは知らない昌介は早速車に乗り込みエンジンをかけた。廃車の不法投棄かとも疑ったが問題なく車は走り出した。そのすぐ後、エンジン音に気づいて車の持ち主である学生があわてて林から駆け出してきた。その学生は自分の車が走り去るのを見ると、携帯電話で警察に通報しようとしたが、この山中では電波は届かなかった。諦めた学生は悪態をつきながら林道の急な坂を歩いて下って行った。

代償　後編（後書き）

もう割礼ものは書かないと予定です。すでにネタ切れの状態で、無理やり薄く延ばしてもつまらないだけでしょう。